

平成26年度

大分大学
高等教育開発センター報告書

目 次

はじめに	1
I 高等教育開発センター事業概要	2
II 各部門活動・事業報告	
1. 新規授業・カリキュラム開発部門	4
2. メディア・IT活用部門	11
3. FD・授業評価部門	23
4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門	46
III 付録	84
1. センター関係諸規則（投稿規程を含む）	
2. 高等教育開発センター運営委員会名簿	

はじめに

大分大学高等教育開発センター長
山下 茂

いつもセンターの活動にご支援、ご協力いただきありがとうございます。高等教育開発センター平成 26 年度、第二期中期計画 5 年目の活動報告書を作成しました。

センターの活動は、高等教育系と生涯教育系の大きく 2 つの柱で運用されています。平成 26 年度は、高等教育系では教養教育の改革に関与する活動が大きなウェイトを占めました。現在大学に求められている学士課程教育の質の保証に関しては、4(6)年間の学修成果を把握するシステムの構築が急務として、全学の検討組織「学修システム部会」では本センターが中心となって活動を行いました。また教養教育の改革については「教養教育 WG」に参加し、センターのこれまでの活動に基づき関与しました。今年度は「大学の機能強化」にかかわる予算がつき、FD の活動として大学教育にかかわる「人材養成」の事業にも関与しました。

一方、生涯教育系は、学外での地域連携としてセンターが主体となって取り組んだ文部科学省「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進」が 2 年目を迎え、積み上げられてきた実績をもとに検証と啓発の取り組みを行いました。また、大学教育への取り組みとして、昨年まで参加してきた「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」が終わりましたが、この成果をより教養教育に定着させるべくこれまで実施してきた科目の継続を行い、一定の評価を得ています。このほか、地域との連携も社会教育に関わるものをはじめ、多くの活動が着実に成果を積み上げてきています。

こうした本センターの事業について、センター内各部門の今年度における報告としてとりまとめています。

本センター事業の取り組みの円滑な推進は、学内教職員のご協力とご支援、ならびに学外の関係者に負うものといえます。年次報告書の刊行にあたり、この場を借りて感謝を申し上げますとともに、今後の本センターの充実・発展のために忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸いです。

平成 27 年 6 月

I 高等教育開発センター事業概要

高等教育開発センターは、「学内外の関係機関との連携の下に、高等教育及び生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もって大分大学における教育及び地域社会の発展に寄与すること」を目的として設置されています。その目的を達成するための平成 26 年度の成果について、部門ごとに列挙すると以下のようなになる。

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・教養教育における初年次教育科目の実施の支援
- ・「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」での科目の開設を継続
- ・高等教育協議会が設置している「とよのまなび」コンソーシアムへの支援と参加
- ・きっちよむフォーラム 2014「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

2. メディア・IT 活用部門

- ・グローバルキャンパスの運営
- ・遠隔授業の実施支援
- ・大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ・高等教育開発センターホームページの全面改装
- ・WebClass 操作の独学練習テキストの作成
- ・e ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ・ICT 活用通信（仮）の配付
- ・教育支援機器の貸し出し・活用支援
- ・学生スタッフの育成

3. FD・授業評価部門

- ・WebClass 利用への支援
- ・学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2014」の実施
- ・大学院学部合同 FD 講演会、学習会の実施
- ・学生のメンタルヘルス講演会を保健管理センターと共催
- ・e ラーニング活用セミナーの開催
- ・学生による授業評価アンケートの実施

4. 大学開放推進部門

- ・公開講座・公開授業の実施
- ・社会人学生に対する学習支援
- ・社会教育関係職員等に対する研修（自治体等との連携による）
- ・大学開放に関する調査・研究の実施

5. 生涯学習支援システム部門

- ・自治体や諸団体への支援及び自治体や諸団体との共同・連携事業の実施
- ・地域指導者育成のための社会人や学生の学習の場の提供
- ・教育の協働に関するネットワークの取り組み
- ・地域社会システムに関する調査研究

6. 平成26年度高等教育開発センター運営委員会

第1回

日 時：平成26年6月27日（金） 13：10～14：10

場 所：旦野原キャンパス：教養教育棟会議室2

挾間キャンパス：第3会議室 【遠隔会議システムを利用】

議 題

1. 平成25年度各部門活動報告及び平成26年度活動計画について
2. 平成25年度決算報告及び平成26年度予算案について
3. 平成26年度計画・アクションプラン及び認証評価への対応について

第2回（メール審議）

審議期間：平成26年10月17日（金）～10月20日（月）

議 題

1. 幹事監査への対応について

第3回

日 時：平成27年1月15日（木） 9：00～9：55

場 所：旦野原キャンパス教養教育棟会議室2

議 題

1. 平成27年度計画アクションプランについて
2. 第3期中期目標期間に向けて高等教育開発センターに求めるものについて

報 告

1. シラバスの書き方講習会について
2. 平成26年度後期公開授業の開設状況について

第4回（メール審議）

審議期間：平成27年2月24日（火）～2月26日（木）

議 題

1. 高等教育開発センターの教員人事について

報 告

1. 平成26年度実績報告書について

第5回

日 時：平成27年3月27日（金） 16：30～17：00

場 所：旦野原キャンパス教養教育棟会議室2

議 題

1. 平成26年度実績報告書について

報 告

1. 高等教育開発センターの教員人事について
2. 公開講座の企画について
3. 公開授業・講座の変遷について

Ⅱ 各部門活動・事業報告

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

本部門は全学教育機構の設置に対応して、全学的な教育課題に関する企画・調整業務を担当する部門であり、以下の事業を行った。

【平成 26 年度の主な取り組み】

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・高等教育協議会が設置している「とよのまなびコンソーシアムおおいた」への支援と参加
- ・「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」での科目の開設を継続
- ・教養教育における初年次教育科目の実施
- ・きっちよむフォーラム 2014 学生教職員共同教育改善シンポジウム

【平成 26 年度の事業内容】

(1) 全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加

全学教育機構運営会議には、構成メンバーとしてセンターから 2 名（センター長、次長）が参加し、教養科目の検討など本学の学務事項の審議に参加している。特に教養科目カリキュラムについての検討組織である全学教育機構主題科目専門部会にはセンター長、次長、専任教員 1 名の 3 名が入っており、各年度の教養教育科目の検討作業を行っている。

今年度は、昨年度より取り組んできた教養教育改革を概算要求事項として、理事の下で協議し文部科学省に提出した。残念であるがこの要求事項は採択されなかったが、本学の教養教育改革は、本学の学士課程教育の取り組みの根幹をなすものとして、そして同時に進めていた学部新設・改組の基礎になるため、教務部門会議の下に「教養教育改革部会」、「学修システム部会」を新設し、28 年度実施に向け検討をお行ってきた。この部会のメンバーに、本センターの高等教育部門の 2 名の専任教員とセンター長が加わって作業を行った（検討の経緯等、詳しくは教務部門会議の議事録、資料を参照されたい）。年度末に改革の方針案が教授会に諮られた（部門報告の末尾に資料として掲載しておく）。

(2) 高等教育協議会「とよのまなびコンソーシアムおおいた」への支援と参加

大分県における「地域連携研究、国際教育・留学生支援、教育連携を柱とする地方における高度人材養成拠点の構築」事業として高等教育協議会が設置されており、その 1 つとして「とよのまなびコンソーシアム」による教育連携として共同授業を実施している。現在、講義に当たるところはすべて e ラーニング（VOD による学習）で行い、2 回分（2 コマ分）ほど対面授業でグループ学習を、大分大学に於いて行っている。この講義のビデオコンテンツは、昨年度までの対

面授業で収録されたビデオを基に、コンソーシアムの共同授業分科会で選択し運用している。この授業を構成するビデオコンテンツは、今後毎年各大学においていくつか製作していくことが申し合わされている。その際、ビデオの作成、その利用においてガイドラインは昨年度策定され、今年度多少の修正がされた。これらのビデオコンテンツにおいては、コンソーシアムが共有する教材として、この共同授業のほか、各大学における授業の中の教材としての利用も可能としている。しかし、その際の授業の運用については、各大学の責任において対応が必要となる。

なお、この共同授業は、昨年度から加盟大学が相互に結んだ単位互換制度を利用することになった。これまでの実施体制の見直しを行い、加盟大学間での単位互換が可能なように制度の改正を行ったことによる。しかし、各大学の時間割が多少違うことや、距離的には離れていないが移動手段の不便なこともあり、活発な活用にまでは行っていない。

授業実施曜日 後期

講義科目：「大分の人と学問」

受講形態：VODによるeラーニング（13回分）と半日教室に集合しての学習活動（2回分）

授業の具体的な到達目標：

- ① 講義内容の要約および感想・意見の記述を通して、大分の特色や課題などを他者に説明できる。
- ② 講義内容を受け、派生的な課題を自ら見つけ、1200字程度の文章として論述することができる。

評価：講義ごとのミニレポート(300字)と学期全体を通して1回の課題レポート(1200字)を、期限日を設定しオンラインによる提出。これらを成績評価する。

「大分の人と学問」講義スケジュール

講義ビデオの配信日	担当者	所属	講義タイトル
10月 1日	島田達生	放送大学大分 学習センター	今よみがえる田原淳の業績。ノーベル賞を超える大偉業
10月 8日	井上正文	大分大学	竹の研究
10月15日	望月 聡	大分大学	『関あじ・関さば』を科学する
10月22日	立松洋子	別府大学 短期大学部	大分の『食』の現状と食育
10月29日	石川雄一	大分大学	おおいた過疎地域を元気にする産学連携 — 柚子の抗アレルギー能について —
11月 5日	芝原雅彦	大分大学	大分の水と温泉

11月12日	高見 徹	大分工業高等 専門学校	水環境の計測と評価
11月16日	末本哲雄	大分大学	対面授業： グループワーク (会場：大分大学 且野原キャンパス)
11月16日	末本哲雄	大分大学	対面授業： グループワーク (会場：大分大学 且野原キャンパス)
11月19日	杉浦嘉雄	日本文理大学	“おおいた”の夢創造型の地域づくり～大分からトキを再び日本の大空へ！～
11月26日	荻野 哉	大分県立芸術文化 短期大学	芸術学入門～アートの世界
12月 3日	山田繁伸	大分工業高等専門 学校	おおいたの文学碑を歩く
12月10日	島岡成治	日本文理大学	大分近世城下町の成立とその後～大分のまちの起源を探る～
12月17日	廣田篤彦	日本文理大学	都市のイメージと嗜好性～外から見た大分とは～
1月 7日	溝部 仁	別府溝部学園 短期大学	大分県の中の朝鮮半島

今年度の履修状況については、下記の表に示してある。全体的に参加者が少ない傾向にある。次年度に向けて検討を要するであろう。

	大分大学	大分県立芸術 文化短期大学	日本文理大学	別府溝部学園 短期大学	立命館アジア 太平洋大学
登録者数	20名	0名	6名	6名 DVD 貸出	9名
単位取得者数	11名	0名	1名	5名	5名
修了率	55%	—	17%	83%	56%

合計 登録者数：41名

もうひとつコンソーシアムの事業である生涯学習支援としての連携講座部門については、大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門の報告を参照されたい。

(3) 教養教育における初年次教育に向けた新科目の検討と準備

教養教育の改革に向けた取り組みとして、大学4年間の各自のキャリアを意識し、学修する動機や人間的成長、社会人を支援する科目群の開設や検討を行ってきている。今年度も2つの取り組みを継続し、実施に参画した。

① 「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に対応した科目の継続

一昨年度から取り組んだ事業で、今年度が最終年度であった。大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門の報告を参照されたい。

② 初年次教育科目「分大キャンパスライフ入門」

大学生になった初年次で学ぶ科目として、平成 25 年度より開設している。講義のシラバスとして、はじめに自分たちが 4 年間過ごす組織である大学の社会的、歴史的な位置づけ、大学の機能についての理解をはじめに意識付けしてもらうことを置いている。そして、まずすぐに対応を迫られる学生生活、同時にアルバイトをはじめ、地域で生活する市民、社会人としての対応力を身に付ける学び解をすすめる。後半では大学での学びについて理解してもらうプログラムを組んで昨年と同様に実施した。

今年度は、社会人講師として「法テラス」の支援を取り入れて担当者をお願いしたり、上級生の活動報告などを取り入れている。また、受講生が 200 名と昨年に比べ大幅に増加しており、そして各回の欠席者も少なく、一定の成果として表われている。

本センターが担当したシラバスの一部を掲載する。

平成26年度 前期水曜3限 「分大キャンパスライフ入門」実績

第 11 回	6 月 18 日 (水)	「大学におけるキャリア形成には」 中川忠宣 (大分大学高等教育開発センター教授)
第 14 回	7 月 9 日 (水)	ワークショップ「授業の振り返り」
第 15 回	7 月 16 日 (水)	ワークショップ「授業の振り返り」

授業の振り返り [グループ学習] 実施概要

授業の振り返りを目的に、グループ学習での方法を取り入れ、授業内容を語れる力、企画力、表現力、発言力、チーム参加力等を学習する授業企画を立てた。

(4) センター教員の教養科目等の担当

これまでの専任教員が実施してきた科目の継続を実施できた。前期 6 科目、後期 9 科目を実施した。センターの役割から、取り組んでいるプロジェクトに応じた多様な教育方法を取入れた授業となっている。

【前期】

- ・プロジェクト型学習入門
「中小企業の魅力大発見」(集中)
- ・生涯学習論入門
- ・学習ボランティア入門

- ・社会教育からみた「教育の協働」
- ・生命観の変遷
- ・自然体験活動の理論と実践

【後期】

- ・キャリアデザイン入門
- ・プロジェクト型学習入門
「仕事・若者・キャリア」
- ・成人教育方法入門
- ・アカデミック・スキル入門ー社会教育計画を題材にー
- ・科学技術コミュニケーションのデザインと実践
- ・カラダの見方・考え方
- ・里海と里山Ⅱ（後期集中）
- ・大分の人と学問（とよのまなびコンソーシアムおおいた共同授業）

（５）「きっちよむフォーラム 2014「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

このフォーラムは、FD・授業評価部門の事業であるが、授業やカリキュラムの検討の場でもあり、本部門も関連している。今回は、「大分大学のアクティブラーニング、キックオフ研修会」として、本学の実践例を紹介した。全国の大学で普及が急がれているアクティブラーニングについて、実践例を踏まえながら、本学での位置づけを検討した。

詳しい報告は、FD・授業評価部門に掲載している。

日時 2014年12月3日（水）14:50～16:20(4限)

場所 教養教育棟 35号教室（旦野原）

病院第1会議室（挟間：遠隔配信）

テーマ「大分大学のアクティブラーニング、キックオフ研修会」

報告：「生活科の授業づくりのための実践例」

竹中真希子先生（教育福祉科学部）

「教養教育科目におけるインターンシップを組み込んだ授業の開発」

岡田正彦先生（高等教育開発センター）

参加された教員には、今後の研修資料として、「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」（溝上慎一著 東信堂）を配布した。

（６）センター業務に関わる研修参加実績（協議会、学会、研究会等への参加）

本年度における本部門関係者の出張、研修は、

- ・「全国大学教育研究センター等協議会」（2014/9/18～19 琉球大学，沖縄）
- ・「九州地区一般教育研究協議会」（2014/9/5～6 九州大学，福岡）
- ・「大学教育研究フォーラム」（2015/3/18～19 京都大学高等教育開発推進センター，京都）
- ・「大学教育学会」（2014/5/31～6/1 名古屋大学，愛知）
- ・「大学教育学会 課題研究会」（2014/11/29～30 神奈川工業大学，神奈川）
- ・「日本高等教育学会」（2014/6/28～29 大阪大学，大阪）

・「高等教育質保証学会」(2014/8/23～24 成城大学, 東京)
などに出席した。今年度も質保証, 評価, ラーニングアウトカム, ポートフォリオ, そしてアクティブラーニング等の話題についての多くの調査や議論ができ, センターの業務に活かしていただける有益なものであった。

資料 (1) 教養教育の改革案 教授会資料

教養教育改革について

教養教育の改革に当たっては, これまでの答申等や本学の教養教育の実績を踏まえて, 以下に示す新しい理念を設定した。

『変化の激しい社会にあつて, 豊かな人間性と高い倫理性を基盤に, 地球規模の視野, 歴史的な視点, 多元的な視点で物事を考え, 地域, 福祉, 社会, さらに国や異文化の多様性の問題に主体的に対応していく力を涵養する。』

この理念に基づいて教養教育において学生に修得させるべき資質は次の5点である。

1. 生涯にわたって学びよりよく生きる主体的な態度
2. 知識基盤社会に求められる基礎的な知識・技能
3. 社会人・市民の一員としての幅広い市民的教養
4. 地域・社会の問題を発見し解決する力
5. 専門教育に発展的につなげる力

このように, 現代の学士課程教育において教養教育に求められるものは多岐にわたり, 多面的な観点から網羅的に実施していく必要がある。そこで, 現代の大学教育に求められる学士課程教育の観点, 「大分大学憲章」に記された「大分大学の基本理念」及び「教育の目標」, 更に「大分大学のディプロマ・ポリシー」が求める教育を一層充実する観点から, 現行の教育課程を見直し, 以下のような教養教育の改革を行うものである。

1. 全学共通科目の主題の再編と全学必修化

大学での学びへのスムーズな導入, 大学での学びへの転換, キャリア教育の重視, 情報社会に生きる市民としての資質を涵養するといった観点から, 「導入・転換」科目群を主題の1つとして設定し, この主題を全学必修とする。

加えて, 「福祉」は大分大学がこれまでに全学的に培ってきた強みであり, 大学改革の一つである福祉健康科学部(仮称)の新設といった新しいリソースを全学に波及することで, 「大分大学」での学びとして全学の学生に身に付けさせる価値のある分野である。また, ミッションの再定義等により大分大学は地域志向の大学としての位置付けが明確にされたことから, 「地域」を志向する資質を身に付けさせることも大分大学ならではの教養教育となる。

新しく「導入・転換」科目群, 「福祉・地域」科目群を主題として設定し, この主題を全学必修

とする。

2. 5つの主題と外国語科目，ゼミナール科目の位置づけ

(1) 導入・転換

高校から大学での学びへのスムーズな導入，学びの転換といった質的転換を円滑に行い，自己を見つめるキャリア教育，情報社会に生きる市民としての資質を形成する科目群

(2) 福祉・地域

地域の課題を認識し，市民の一員としてこれを解決する方法を思考することによって地域を理解するとともに，福祉を医療・健康・環境・社会制度などの幅広い視野から捉える科目群

(3) 文化・国際

国際的視野で日本や世界の文化的特質をより深く，より広く探究することで，自らの進むべき道，取るべき方法を判断する力を養うことができる科目群

(4) 社会・経済

グローバル化する経済社会の構造と原理の初歩を学修し，景気変動や格差社会の出現など社会経済のさまざまな事象がいかにか理解する科目群

(5) 自然・科学

自然・科学の発展とその背景を学び，日常生活を支える最新の科学・技術とその利活用，持続可能な超高齢化社会を形成するための課題を理解する科目群

3. 専門教育と融合した幅広い学びのための教養

教養教育の機能は俯瞰的に学問分野を見渡すことができることにある。専門性を高める教育が必要な一方，その専門がおかれている社会・文化状況を正しく理解することも欠かせない。これらを展開するために，専門科目においても，より包括的な内容を含んだ授業を行うとともに，教養においては専門内容と有機的に連携した授業を行い，その社会・文化的背景を理解しつつ専門科目を理解できる高度な教養教育を展開する。

今回，従来の10の主題を学士課程に対応する形で5つに再編することを通じて，主題の選択範囲を絞りこんだ。これら導入・転換，福祉・地域，外国語科目を核とした教養教育群を専門科目と有機的に連携するように位置付け，限られた在学期間における幅広い学びを保証する。

4. 自ら主体的に学ぶ意欲を醸成するための「アクティブ・ラーニング」の拡充

教育の道標に示された，高い学習意欲，たゆまぬ探究心を喚起するために，教員の話聞くだけの授業や，教員の指示に従って活動するだけの授業形態を改め，教養教育科目に「アクティブ・ラーニング」を積極的に導入することとし，この学びの方法を専門科目で発展できるための基礎とする。このような授業方法の導入を推進するために，FDを積極的に実施して教員の研修の機会を充実させるとともに，学生に対してはシラバスに明記することによって，学生自らが主体的に学ぶ意識を醸成する。

2. メディア・IT 活用部門

メディア・IT 活用部門では、「多様なメディアを活用し、授業形態の多様化を図るとともに、自由な学習機会の拡充を進める」という中期計画のもと、情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）を活用した教育活動の推進を支援している。特に ICT を活用した学習環境の整備，ICT 活用型授業の支援，授業方法の改善に向けた相談，e ラーニング教材の開発，学習メンタリングを通して、本学における教育課題の解決を目指している。

【平成 26 年度の主な取り組み】

- ① グローバルキャンパスの運営
- ② 遠隔授業の実施支援
- ③ 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ④ WebClass の活用支援と普及
- ⑤ e ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ⑥ ICT 活用通信（仮）の発行
- ⑦ 教育支援機器の貸し出し・活用支援
- ⑧ 教材の作成
- ⑨ 学生スタッフの育成
- ⑩ メディア・IT 活用における国内の動向～研修・会議を通して～

【平成 26 年度の事業内容】

（1）グローバルキャンパスの運営

メディア・IT 活用部門では、高等教育開発センターの Web サイトを通じて講義や講演会などのビデオ配信を行っている（<http://he-ogc.he.oita-u.ac.jp/>）。この事業を「グローバルキャンパス」と呼び、平成 19 年度より継続して行っている。配信されたビデオは受講生の復習や欠席者の補習、遠隔地での非同期的学習、授業担当教員のふり返り、発表や活動の記録、生涯学習や地域貢献などに使われている。

①講義ビデオの収録と配信

2014 年度は 15 科目 162 件（前期 9 科目 96 件，後期 6 科目 56 件）の講義ビデオをグローバルキャンパスに掲載した（表 1）。2013 年度（掲載数 150 件）とほぼ同数であった。人的労力や経費、撮影機材を含めた設備を鑑みると、前年度並みの件数は妥当と考えている。既に撮影した講義ビデオの活用を理由に本年度の撮影を不要とする授業もこの 2～3 年で増加している。対象科目の範囲や撮影スタッフの確保に対する現行のやり方では頭打ちになっていると見て、撮影への要求レベルの高い科目の取捨選択や運営方法の革新が求められる。

表 1. グローバルキャンパスへの掲載科目 (2014 年度)

実施時期	教員名(所属)	講義名
前期	牧野治敏(高等教育開発センター)	生命観の変遷
	佐藤大介(経済学部)	日常生活のリスクと保険
	山下 茂(教育福祉科学部)	自然とゆらぎ
	中川忠宣(高等教育開発センター)	学習ボランティア入門
	岡田正彦(高等教育開発センター)	
	末本哲雄(高等教育開発センター)	科学技術コミュニケーション入門
	真鍋正規(工学部)	建築設備計画 I
	山崎清男(教育担当理事)ほか	分大キャンパスライフ入門
	藤野幸嗣(工学部非常勤)	高度情報化と社会生活
	末本哲雄(高等教育開発センター)	論考の基礎
後期	山崎栄一(非常勤講師)	日本国憲法
	岩城貴史(医学部)	分子システムの時間発展
	末本哲雄(高等教育開発センター)	科学技術コミュニケーションの デザインと実践
	牧野治敏(高等教育開発センター)	カラダの見方・考え方
	真鍋正規(工学部)	建築環境計画 II
	松浦恵子(医学部)ほか	男女共同参画入門

②講演会ビデオの収録

グローバルキャンパスでは講義ビデオ以外にも、講演会やシンポジウムなどの配信を行っている。2014 年度も FD 講演会などを収録し、高等教育開発センターの Web サイトを通じて配信した(表 2)。

表 2. 収録した講演会 (2014 年度)

実施時期	主催	講演名
04 月 07 日	総務企画課評価係	認証評価自己評価書作成についての説明会
07 月 02 日	図書館	S を目指す！レポートの書き方講習会 ～デキル大学生は出典明記と引用作法の仕方を知っている！～
08 月 26 日	高等教育開発センター	「授業支援ボックス」(富士ゼロックス社製)のビデオデモ
09 月 30 日	高等教育開発センター	FD・SD 講演会「これからの大学教育が取り組むこと： 長崎大学の教育改革推進戦略」

③動画配信システムの置き換え

老朽化してきた動画配信システムの置き換えがこの 3 年間の課題であった。本年度、理事経費

による予算配分が得られ、2015年3月に新しい動画配信システムを稼働させた。

従来はパソコンでの視聴を想定して Flash 技術を使って配信してきた。この5年間でスマートフォンの普及が急速に進み、この配信技術では学生の間で高い保有率をほこる iOS 系モバイル端末で再生できない状態であった。今回の置き換えにあたり、iOS 系モバイル端末を含めた幅広い機種でビデオを再生できる仕様変更を組み入れた。これにより、移動時間や屋外など様々な場所で学習機会が広がると思われる。また、新しい動画配信システムでライブ配信の機能が追加された。学外サービスに頼らず、地域に向けた成果発表会やイベント中継などが可能になった。このような新しい試みは中期計画「多様なメディアを活用し、授業形態の多様化を図る」の達成の一助となるだろう。

(2) 遠隔授業の実施支援

且野原キャンパス教養教育棟 35号教室と挾間キャンパス医学部 211号教室には、インターネット経由で教室の映像と音声を相互に伝送できるテレビ会議システムが導入されており、学期中は毎週、このシステムを使って遠隔授業を行っている。

2014年度は「日常生活のリスクと保険」(前期火曜日 1限目：且野原から挾間)、「日本国憲法」(後期月曜日 4限目：且野原から挾間)、「分子システムの時間発展」(火曜日 1限目：挾間から且野原)で遠隔授業を実施した。

本部門では、前年度と同様にネットワークカメラの操作、中継回線の設定、バックアップ映像の確保で遠隔授業を支援した(図1)。

年度を通してテレビ会議システムに特筆すべきトラブルは起きなかった。小さなトラブルとして、録画したビデオで音割れをしているということがあった。ただし、両教室でスピーカーからでる音量に問題なく、講義に影響はなかった。別の授業で音響装置の設定を変更したことが原因と思われ、講義後に両キャンパスでシステム音量を調整して30分間程度で解決できた。また、講義開始時に教員がマイクを使わずに話し始め、遠隔地で音声聞こえないということが何度かあったが、遠隔地の職員からその旨が伝わり、すぐに解決できた。

遠隔授業関連の業務にあたり、教育支援課教育推進グループの岡村氏・大内氏にご協力をいただきました。深く感謝いたします。

(3) 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援

前年度と同様、とよのまなびコンソーシアムおおいたの共通教育科目として「大分の人と学問」が開講された。これは Web サイト上で講義ビデオを視聴して課題を提出するという eラーニング形式の授業である。

本部門では、9月中旬から1月末まで eラーニングシステム(Moodle)を教養教育棟1階電算室のサーバで稼働させ、講義ビデオの配信やレポート提出場所の設置などの学習環境を提供した(図1)。本年度は4機関から41名の受講登録があった。授業期間中には特筆すべきシステムのトラブルはなく、予定通り授業を完遂した。



図 1. 「大分の人と学問」専用 Web サイト（左）と講義ビデオの視聴画面（右）

（４）WebClass の活用支援と普及

本学では学習管理システム（LMS : Learning Management System）として WebClass（日本データパシフィック社）を導入している。科目ごとに「コース」を開設すれば、担当教員と受講生は Web 経由で講義資料の配付、テスト/アンケート、Web 掲示板などの機能を利用できる。システムの運営と管理は情報基盤センターの担当であるが、利用普及や教員支援については主に本部門が担っている。

①講習会の開催

WebClass には多様な機能が備わっているが、これらを利用するためには操作方法を習得しなければならない。そこで毎年、教員向けの操作講習会を開催している。本年度は以下の日程で WebClass 関連の講習会を実施した（表 3）。

表 3. WebClass 関連講習会の実施

月	日	曜	テーマ	参加数
4	16	水	初心者のための WebClass ワークショップ	12
8	19	火	紙の提出物を OCR にかき、WebClass に自動登録	1
10	7	火	WebClass と e ポートフォリオ・コンテナの相談会 ～資料掲載とか学生登録とか、並べ替えとか出席管理とか～	1
1	6	火	新しく導入した「授業支援ボックス」の利用法 ～毎回の手書きレポートを WebClass に蓄積する+アンケート収集～	1
1	20	火	授業支援ボックスの操作説明会(教養教育)	1
1	22	木	授業支援ボックスの操作説明会(工学部)	5
1	23	金	授業支援ボックスの操作説明会(経済学部)	3

経済学部が所属教員に WebClass の活用を推奨したため、本年度はワークショップの企画や機能

説明に関する相談が増加した。教務委員からの相談には、カリキュラムを通して学生の成長や実態を把握していく e ポートフォリオへの要望があった。授業単位で運用する WebClass の基本機能では難しい面もあり、得意な部分・不得意な部分も併せて解説した。なお、2015 年 3 月でのシステム拡張で上記の相談に対応できる範囲が大幅に広がったため、次年度はこれらの機能を組み入れ、さらに具体的な要望や学生の成長のストーリーに則った選択肢を提案していくことになる。

一方、個々の教員からは「WebClass とは何か、どのような機能が使えるのか、他の教員は授業でどのように使っているのか」という授業の効率化を目的とした相談が多く、既に蓄積した資料や講習会資料をもとに対応した。また、「会議室に書き込みがあった場合、教員が知る方法があるか」といった課題の焦点化された質問もいくつかあり、簡易な操作手順書を作成して対応した。

②授業支援ボックスの導入

本年度の後半は、新たに導入した「授業支援ボックス」の普及に注力した。授業支援ボックスとは、紙文書をスキャンすると同時に紙面の特定領域を読み取り、連携する学習管理システム（本学では WebClass）に自動でアップロードしてくれる富士ゼロックス社のネットワーク機器である。手書きレポートのデジタル管理、学生への迅速なフィードバックなどが可能になる。

学内普及のため、高等教育開発センター Web サイトに専用ページと大分大学教員用操作マニュアルを作成した（図 2）。授業支援ボックスの導入で手書き成果物の蓄積が容易になったことから、WebClass のポートフォリオとしての利用価値が高まると思われる。次年度以降は活用事例と教育効果の共有が望まれるだろう。



図 2. 「授業支援ボックス」特設ページ（左）と教員用操作マニュアル（右）

（5）e ポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及

①講習会の開催

2010 年度より、WebClass の追加機能である「e ポートフォリオ・コンテナ」を導入している。e ポートフォリオ・コンテナは、WebClass 上で提出された学生の成果物に対し、自己評価・相互評価・教員評価を受け付ける機能をもつ。これにより、「計画」－「実施」－「評価」－「省察」のサイクルを回し、受講生が成果物を自ら評価するとともに、他の受講生や教員から評価をもらい、何度も何度も改善を繰り返しながら成果物の質を高めていくふり返り学習を円滑に進められ

るようになる。

e ポートフォリオ・コンテナの学内普及のため、本部門では継続的に講習会を実施している。2014年度は以下の日程でe ポートフォリオ・コンテナ関連の講習会を行った（表4）。

表4. e ポートフォリオ・コンテナ関連講習会の実施

月	日	曜	テーマ	参加数
4	9	水	教育支援機器の展示会(1回目)	2
4	24	水	教育支援機器の展示会(2回目)	7
8	22	木	e ポートフォリオ・コンテナを使った授業スタイルの提案 ～個人もしくはグループの活動に相互評価を取り入れる～	1

②e ポートフォリオ・コンテナを活用した科目

表5は2014年度にe ポートフォリオ・コンテナを活用した科目の一覧である。

本年度、経済学部ではWebClassの積極的な利用が推進され、何人かの教員がe ポートフォリオ・コンテナを新しく使い始めた。特に学生の活動と成果物の作成、それにもとづくふり返りという学習活動と親和性が高いため、特に基礎演習・中級演習で利用数の増加がみられた。

また、昨年度から引き続き、工学部専門科目「マルチメディア処理演習」、教養教育科目「科学技術コミュニケーション」などでレポートの相互評価の場として使われた。これらの科目では成果物の作成とふり返りが授業計画の中に埋め込まれており、e ポートフォリオ・コンテナはもはや必要不可欠な基盤となっている。

表5. e ポートフォリオ・コンテナを活用した科目

科目
1. 人類の知的遺産と向き合う
2. 論考の基礎
3. 科学技術コミュニケーション入門
4. 科学技術コミュニケーションのデザインと実践
5. 計算物理学特論
6. マルチメディア処理演習
7. 基礎演習 II
8. 中級演習 I
9. 中級演習 II・学問探検ゼミ
10. 中級演習 II

表6は、導入した2010年から2014年度末までのe ポートフォリオ・コンテナの利用科目数とその中で提出された学習成果物の数である。

2013年度に比べ、2014年度の利用科目数が減少しているが、2013年度は試行や動作検証だけに使った科目も多かったため、2014年度での大幅な減少について危惧する必要はないだろう。経済学部の基礎演習・中級演習での取り組みにより、いくつかの活用パターンが新しく蓄積されつ

つある。次年度では e ポートフォリオ・コンテナがもつ価値を見定める機会の創出や効果的な活用事例の共有を目指した学内研修会が求められる。

表 6. e ポートフォリオ・コンテナの利用科目数と成果物数

年度	科目数	成果物数
2010	4	147
2011	9	1191
2012	18	1485
2013	27	1103
2014	10	790

(6) ICT 活用通信 (仮) の発行

学内の ICT 活用教育の推進を図るため、2011 年度から A4 用紙裏表 1 枚に WebClass の操作手順や活用例、教育支援機器の情報、近年の高等教育の動向を掲載した通信を教員に配付している。2014 年度は 4 号の通信を発行した (表 7)。通信のバックナンバーは高等教育開発センターの Web ページに掲載している (<http://www.he.oita-u.ac.jp/publication/ict-news/>)。

表 7. 2014 年度に発行した ICT 活用通信 (仮)

No.	タイトル
第 14 号	シンポジウム 「反転授業はディープ・アクティブラーニングを促すか？」出張報告 1 趣旨説明・基調講演 1「反転授業による高次能力の育成」(山内 祐平)
第 15 号	シンポジウム 「反転授業はディープ・アクティブラーニングを促すか？」出張報告 2 基調講演「アクティブラーニングとしての反転授業」(溝上 慎一)
第 16 号	シンポジウム 「反転授業はディープ・アクティブラーニングを促すか？」出張報告 3 ポスター発表「Bb9 を用いた反転授業への応用－講義映像による予習、教室での共同学習と 応用学習、 掲示板を用いた復習－」(古澤 修一)
第 17 号	シンポジウム 「反転授業はディープ・アクティブラーニングを促すか？」出張報告 4 ポスター発表「医学部における反転授業の実践と評価」(西屋克己・住谷和則・岡田宏基)

(7) 教育支援機器の貸し出し・活用援助

高等教育開発センターでは、学内教員を対象に教育支援機器の貸し出しを行っている。

2014年度は276回の貸し出しを行った(表8)。2013年度までと同様に貸し出し数の多い機器がノートパソコン、クリッカー、iPadであったが、2014年度ではクリッカーの貸し出し数が大幅に増加し、ノートパソコンとの順位を逆転させた。高等教育開発センターで管理するクリッカーについては、ほぼ毎日のように貸し出していた印象がある。

表8. 2014年度の貸し出し実績

物品	回数	物品	回数
クリッカー	150	デジタルビデオ	10
ノートパソコン	74	デジタルカメラ	2
iPad	40	—	—
総計			276

表9は高等教育開発センターから貸し出したクリッカーが使用された科目の一覧である。クリッカーは各学部の教務係にも置いているため、専門科目ではそちらでも借用できる。50人以上の場合は、高等教育開発センターのクリッカーを使うように勧めている。

科目名については教員の自己申告によるため、一部の科目名は表9に含まれていない。また、教育免許更新講習や社会教育関連講習会、その他イベントでの活用も記載していない。

本年度のクリッカー貸し出し数が増加した要因として、教養教育科目「自然とゆらぎ」「生命観の変遷」「カラダの見方・考え方」、経済学部専門科目である「会計学Ⅰ・Ⅱ」「簿記Ⅰ・Ⅱ」の授業で、本センターで開発したマークシートと組み合わせる方法を使い、毎回の講義で出席と小テストのデータ回収が行われたことが挙げられる。また、演習科目での発表会の評価にクリッカーによる投票を組み入れたり、クリッカーを使って講義の双方向を目指した教員が試行から本格運用に転じたりしたことも増加の理由に挙げられる。この傾向から、授業展開に不可欠な要素としてクリッカー活用が定着したことがうかがえる。

表9. 高等教育開発センターからクリッカーを貸し出した科目

No.	科目名	No.	科目名
1	生命観の変遷	8	会計学Ⅰ
2	自然とゆらぎ	9	会計学Ⅱ
3	科学技術コミュニケーション入門	10	簿記Ⅰ
4	生涯学習論入門	11	簿記Ⅱ
5	英語	12	基礎演習Ⅰ
6	カラダの見方・考え方	13	基礎演習Ⅱ
7	大分の水Ⅱ	14	マルチメディア処理演習

(8) 教材の作成

工学部の長屋智之先生から依頼を受け、留学生向けに物理学の課題文を日本語で読み上げる音声を作成した。これは前年度に作成した「数式で答える e ラーニング教材の説明ビデオ」に関する議論から生まれたアイデアで、物理学の問題を解く過程に専門科目で使われる日本語に触れさせる目的で作成された。日立ソリューションズクリエイト社の「ボイスソムリエ・ネオ」を使用し、11 問の課題文を音声合成した。MP3 形式で納品し、現在は WebClass 内で SCORM 教材の一部として使われている。

また、国際教育研究センターの武原美穂先生から依頼をうけ、英語を母国語としない学生向けの英語音声教材を作成した(表 10)。英語を母国語とする学生に旅先での様子を演じてもらったり、地元について紹介してもらったりした声を素材に、22 話分を教材化した。対話の雰囲気を出すため、編集で BGM や喧騒やチャイムなどの効果音を挿入した。スマートフォンでの再生を想定しているとの依頼内容より、MP3 形式で Web サーバからダウンロードできるようにした。

表10. 作成した英語音声

タイトル	時間
(1) Airport (normal)	(1 分 43 秒)
(2) Airport (slow)	(2 分 00 秒)
(3) Station (normal)	(0 分 58 秒)
(4) Station (slow)	(1 分 08 秒)
(5) Happy Places To Live	(2 分 37 秒)
(6) Happy Places To Live (2nd)	(2 分 28 秒)
(7) University	(1 分 53 秒)
(8) Sports Center	(1 分 36 秒)
(9) Shopping	(1 分 45 秒)
(10) Joy Places	(2 分 01 秒)
(11) Destination	(2 分 26 秒)
(1) Going Out On Friday Night	(0 分 50 秒)
(2) Going Out On Friday Night (slow)	(1 分 04 秒)
(3) Going to a Pub	(1 分 32 秒)
(4) Going to a Pub (slow)	(1 分 33 秒)
(5) At a Pub	(1 分 56 秒)
(6) At a Pub (slow)	(2 分 02 秒)
(7) Dining	(2 分 39 秒)
(8) Dining (slow)	(1 分 02 秒)
(9) Shopping Clothing	(1 分 27 秒)
(10) Shopping Clothing (slow)	(0 分 37 秒)

(8) 学生スタッフの育成

本学の学生を学習コンテンツ作成のアシスタントとして雇用し、高等教育開発センターの事業遂行に必要な補助業務を担当してもらっている。主な業務はグローバルキャンパスに関わる講義ビデオの撮影と編集、Web 配信ページの作成である。

2014 年度は 5 名の学生に業務を委嘱した。雇用数は減少傾向にあるが、作業行程の見直しによって業務効率が大幅に向上し、多くの学生を雇用する必要がなくなったことが主な原因である。そのため、正課外時間に多様な学習経験を与える機会としては機能しなくなってしまった。この意味の再検討が次年度の課題になるだろう。

(9) メディア・IT 活用における国内の動向 ～研修・会議を通して～

①研修会名：シンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」

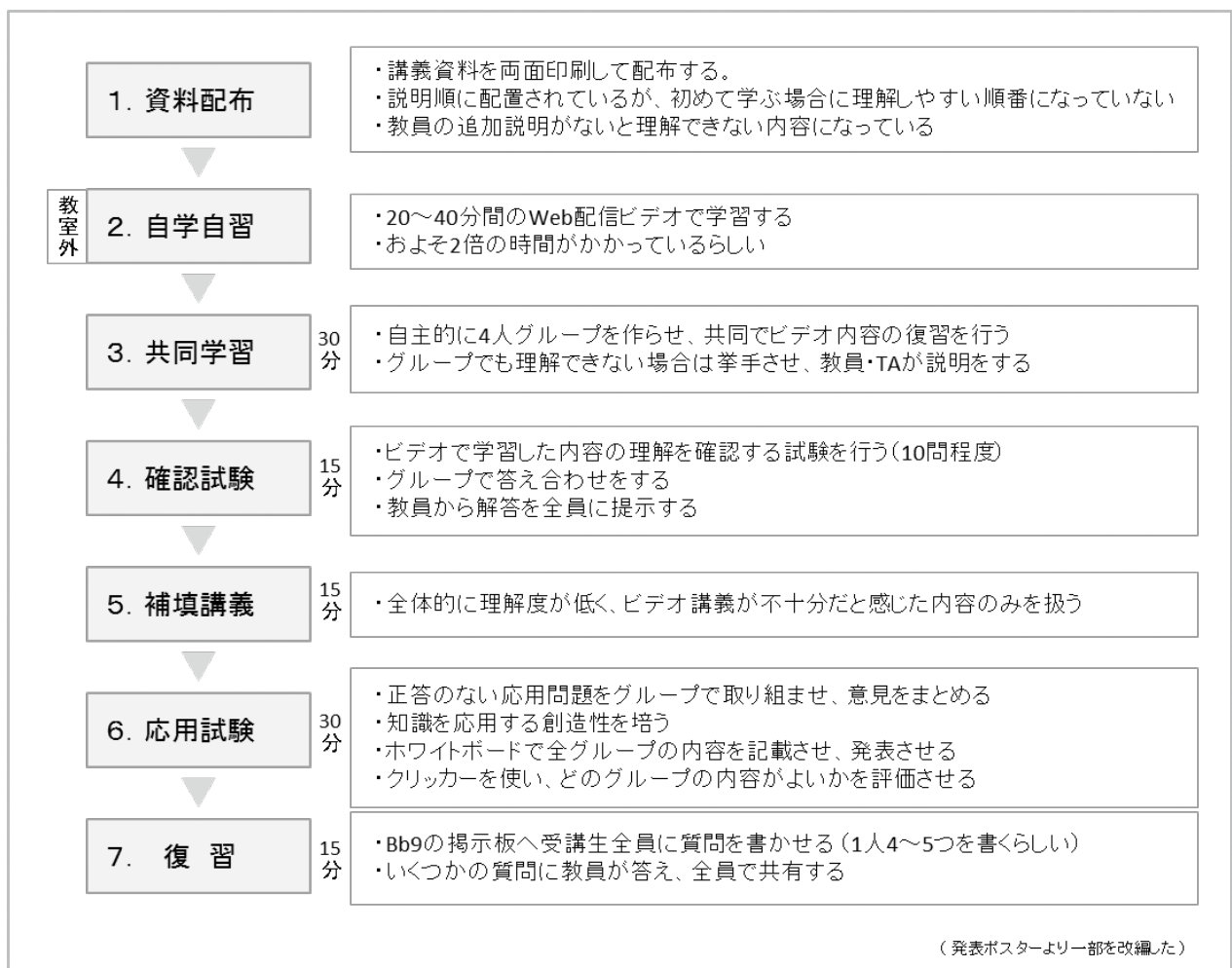
発表：Bb9 を用いた反転授業への応用－講義映像による予習，教室での共同学習と応用学習，掲示板を用いた復習－（古澤 修一）

主催：関西大学

期日：2015 年 2 月 24 日（火）

会場：関西大学（大阪府）

広島大学生物生産学部で行われた反転授業の事例である。この「免疫生物学」の授業は 2 年生後期の必修科目（指定コース以外の学生には選択科目）で、毎年 30 名程度が受講している。1 回の講義の進行を以下に示す。



ここでの反転授業のねらいは完全習得学習である。そのため、各自のペースで分かるまで学習を続けられる環境と受講生同士の学び合いによる知識の定着の機会を用意している。

まず講義ビデオによって自習として知識を取り入れさせる。著作権保護のため、ビデオに他者の図表は載せられない。講義時間での配付資料ならば著作権保護法の例外として認められるため、必要な図表は事前に印刷物として講義中に配っている。なお、その資料だけでは理解できる作りになっていないため、必ず説明ビデオを見て、自分で関連づけながら自習に取り組まなくてはならない。

教室では4人程度のグループ学習として進行する。グループの人選は受講生に任せたが、報告の対象となった受講生の意欲は高く、安易に固定的な人選としたのは1グループだけだったという。

共同学習のフェーズでは、講義ビデオに対する受講生同士の理解を相互に確認させる。理解に差異がある場合には教え合いになる。報告者は「講義ビデオで理解できればよいが、理解できなくとも何が分からないかを分かる程度になって教室に来る」と印象を述べている。グループ内で理解できない場合は挙手させ、教員もしくはTAがそれぞれのグループに説明する。30分間程度の中に6～7グループより各2回ほどの質問が出るらしい。

相互確認をしたら、10問程度の試験を行う。穴埋め問題として専門用語や原理の説明を記述させる。グループ内で答え合わせをさせた後、教員から正答が提示される。全体的に理解度が低い

と判断した場合、教員による補填講義を行う。

次いで応用試験を行う。知識を身につけても、使えないと意味がないとして、正答のない問題に取り組むことにしているようだ。ビデオで得た知識を組み合わせる新しいアイデアを提案させる課題や要点を理解していないと解けないような判定課題を 2~3 問ほど提示する（例：〇〇という現象を用いて、△△を解決する方法を考えなさい）。グループで考えた内容はホワイトボードに書かせて発表させる。さらに投票システム（クリッカー）を用い、受講生全体でアイデアを評価させている。

最後に、その回の復習として Bb9（BlackBoard 社のオンライン学習支援システムの商品名）の Web 掲示板に質問を入力させ、いくつかの質問を選んで教員が答えることにしている。

このような方法で授業を進めたところ、ほとんどの学生で学習内容に対する理解や意欲が高まった。しかし、ごく少数ながら通常の講義形式の方がよいとする学生がいることも分かった。反転型の授業形態に親和性をもたない学生にどう対応をとるかが今後の課題である。

3. FD・授業評価部門

本部門の主な活動は、本学の教育改善のための全学的な講演会やワークショップの企画と実施、学生による授業評価アンケートの実施と集計、分析である。いずれも教務部門会議の要請を受けて全学の教員を対象とした事業であり、本学の中期計画・中期目標に掲げられたものである。また、個別の教員への授業支援として、授業のコンサルテーション、教員相互による授業参観と授業検討会を企画・実施している。さらに、大学教育全般の動向についての情報収集も本部門の重要な業務であり、大学教育に関連する学会や研究会へ参加している。

本年度は、学修の実質化を推進するための学修支援システムを本学へ導入するにあたっての情報収集、現状分析等について、新規授業・カリキュラム開発部門、メディア・IT活用部門との連携により検討を重ねた。これらの背景を踏まえた本部門の取組として、以下の事業を行った。

【平成 26 年度の主な取り組み】

FD・授業評価部門の事業として、全学的な教育改善を目的とした講演会やワークショップ等の開催と授業評価アンケートを実施した。また、本年度に限り、全学教育機構教養教育改革部門学修システムワーキンググループ、人づくりプロジェクトへの支援を実施した。概要は以下のとおりである。

- ①FD 研修会「初心者のための WebClass ワークショップ」（平成 26 年 4 月 16 日）
- ②FD・SD 講演会「これからの大学教育が取り組むことー学修成果とアセスメントー教学 IR からの捉え方、教養教育モジュール科目の取組みをとおして」（平成 26 年 9 月 30 日）
- ③授業サロン（教員による授業相互参観と授業検討会）（平成 26 年 11 月 10・11・12・13・19 日）
- ④学生教職員学内合同研修会「きつちよむフォーラム 2014」（平成 26 年 12 月 3 日）
- ⑤学生のメンタルヘルス講演会「多様な個性の認め方 ～発達障害の理解と関わり～」（平成 26 年 12 月 5 日）
- ⑥シラバス作成講習会（平成 27 年 1 月 15 日、19 日）
- ⑦大学院・学部合同 FD 研修会「アクティブラーニングを全学的に展開するための研修会」（平成 27 年 3 月 24 日）
- ⑧学生による授業評価アンケート調査（平成 26 年 7 月、平成 27 年 1 月）
- ⑨学修システムワーキンググループのための情報収集（他大学施設の視察）
- ⑩「大学改革を加速させるための人づくりプロジェクト」への支援（教員の派遣と研修会の開催）

（1）講演会・研修会・ワークショップ等

①FD 研修会「初心者のための WebClass ワークショップ」

日 時： 4 月 16 日（水）16:30～18:30（2 時間）

場 所： 図書館 1 階 科目別学習支援ブース（旦那原キャンパス）

概要： 第1部（講義）： WebClass とは何か、授業事例の紹介
第2部（演習）： WebClass 操作の自習
第3部（議論）： WebClass 活用案の相互検討

講師： 末本哲雄（本センター）
山下 茂（本センター長：アシスタント）
牧野治敏（本センター：アシスタント）

第1部では、WebClass の概要を分譲マンションに例えて説明した。また、講師（末本氏）が実際に使っている例をもとに、基本的な機能を使ってどのような授業ができるのかを紹介した。

第2部では、自習用教材として作成したテキストをもとに、各自が研修を希望する機能を選び、自由なペースで操作を学ぶ時間とした。操作を進めるうちに湧いてきた疑問は、講師とアシスタントが机間を巡視しながら回答した。

第2部の後、5分間の休憩を取り、今日の成果をすぐに実践できるよう、参加者自身が実際にWebClass のコースを申請した。

第3部では、屏風型2連式ホワイトボードを使って、実際の自分の授業でどのような使い方をするかを検討するまでを2人1組で各授業での使い方の紹介あるいは提案によるディスカッションをした。

予想以上に白熱し、WebClass 以外にも授業改善について熱心な話し合いが行われた。

参加者

所属	氏名
経済学部	青野 篤, 石井 まこと, 井田 知也, 鶴崎 清貴, 小野 宏, 城戸 照子 久木元 美琴, 佐藤 隆, 松岡 輝美, 宮町 良広, 本谷 るり
医学部	大下 晴美, Chidlow Sean Michael
その他	山下茂, 末本哲雄, 牧野治敏

②FD・SD 講演会「これからの大学教育が取り組むことー学修成果とアセスメントー教学 IR からの捉え方, 教養教育モジュール科目の取組みをとおして」

日時： 2014年9月30日（火）第1部：9:00～10:30, 第2部：10:40～11:00

場所： 旦野原地区 教養教育棟 35号教室, 挾間地区 第3会議室（遠隔講演）

講師： 川越 明日香 氏（長崎大学 大学教育イノベーションセンター）

概要

【第1部】

高等教育開発センター長、山下茂教授より講演会の主旨説明と講師の紹介があり、引き続き、教育担当理事、古城和敬副学長からの挨拶の後、川越先生の講演が行われた。

講演内容の概略は以下のとおりである。

1. 長崎大学の教育改革状況

- ・長崎大学の学士教育改革スケジュール（平成23年から28年にかけて）
- ・教養教育改革（モジュール化とアクティブラーニング導入）
- ・新学部設立（多文化社会学部）
- ・長崎大学の学士課程教育のあり方を巡る全学的議論により教養教育の役割を決定

2. 学生による授業評価
 - ・ 授業評価の経緯（調査項目と情報の公開）
 - ・ 教養教育科目の評価結果について平成 24 年度，25 年度の比較
 - ・ 個別授業での評価結果と授業改善への視点
3. 全体傾向で見る PROG と IRiS の相関分析
 - ・ 学生の伸びを見るための POROG テスト，IRiS の導入とその結果（授業，課外活動ともに活発な学生のコンピテンシーが高い）
4. 個別授業に於けるプログと IRiS の相関分析
 - ・ 初習外国語として「韓国語」を履修した学生の調査結果
5. 今後の課題
 - ・ 学生の学修成果を可視化し，教育効果をあげる取組みの必要性
 - ・ 個人データを全体から分析し，その結果を個人の学習指導に活かす方策の検討
 - ・ 大学教育イノベーションセンターと ICT 基盤センターとの連携

IR データの収集と分析する体制
(質疑応答)

講演の後，長崎大学イノベーションセンターの組織，実施にあたっての学部間の取り組みへの温度差，学内合意形成の過程での問題点の克服，外部試験を導入する事への是非など，活発な議論が交わされた。

【第 2 部】

10 分間の休憩の後，希望者には引き続いて会場に残り，講師を囲んでの情報交換を行った。大分大学の状況も話題に交えながら，より詳細な話し合いとなった。

参加者（第 1 部）

所 属	氏 名
教育福祉科学部	大野歩，永田誠，河野伸子，谷野勝敏，川寄道広，中川裕之，藤井弘也 古賀精治，藤井康子，芝山久美子，仲野誠，三次徳二，望月聡
経済学部	梶原博，合田公計，宮町良広
医学部	森先生，大下先生，久保田先生，谷川先生，岩城先生，長谷川先生 出川隆富
工学部	原恭彦，越智義道，賀川経夫，石川雄一，守田則之，安東ゆか 西野浩明，池辺実，大谷俊浩，古家賢一，岩本光生，前田寛，上実憲弘 斉藤晋一
その他	佐藤智久，藤本弥生，大内沙紀，田中美香，坂本陽子，表野すみれ 池田耕一，尾石圭，今村正明，水野雅美，降旗みを，釘宮隆 波多野順代，岡嶋あゆみ，渡邊信一郎，池部真理

③授業サロン（教員による授業相互参観と授業検討会）

授業公開，授業検討会として，本年度は授業サロンを実施した。授業サロンとは 4，5 人のグループでお互いの授業を参観した後に，検討会で意見を交換しあう，授業改善のための研修スタイルである。全学の教員に参加の呼びかけを行ったが，希望者がいなかったため，今回は高等教

育開発センターFD・授業評価部門委員によりグループを構成し実施した。

1) 授業の相互参観

授業サロンは本来、グループ構成員全員の授業を参観するが、時間調整がうまくいかなかったり、受講生が少人数のため参考にならなかったりなどの理由により、結果的に以下の4つ授業を相互参観した。

11月10日(月・1) 岩本先生(工学部) 専門科目

11月11日(火・5) 藤井先生(教育福祉科学部) 専門科目

11月12日(水・1) 牧野先生(高等教育開発センター) 教養科目

11月13日(木・1) 大井先生(経済学部) 専門科目

それぞれの授業は、板書だけの授業、講義の後半を実習とする授業、授業の途中に問題演習を含んだ授業、クリッカーで学生の反応を見ながら進める授業など、形式は多様で、参観者相互には大いに参考となるものであった。

2) 授業検討会

授業参観が終了した後に、11月19日(水)18時から、高等教育開発センターで授業検討会を実施した。

授業検討会では、最初に、各授業者からの授業の概略と授業への工夫などが説明され、その後、授業の内容や授業方法等について意見を交換した。それぞれの授業記録も参考にしながら和やかな雰囲気話し合いが進んだ。

また、授業サロンのあり方についても、今後の実施、普及を考慮しながら意見交換を行った。授業サロンは、授業を参観し合うメンバーを限定することで、誰が授業を見に来るのかといった不安が無いこと、また授業検討会では、和やかな雰囲気、話し合いが進み、授業に対するスタンスなど、細かなところまで話し合いができると好評であった。席上、来年の前期もこのメンバーで続けてみようとの意見もあった。

参加者(高等教育開発センター FD・授業評価部門員)

藤井康子先生(教育福祉科学部)、大井尚司先生(経済学部)、岩本光生先生(工学部)、末本哲雄先生、牧野治敏先生(高等教育開発センター)

④学生教職員学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2014」

日 時： 12月3日(水) 14:50～16:35

場 所： 教養教育棟 35号教室(旦野原キャンパス)

病院第1会議室(挾間キャンパス：遠隔配信)

報 告：「生活科の授業づくりのための実践例」

竹中真希子先生(教育福祉科学部)

「教養教育科目におけるインターンシップを組み込んだ授業の開発」

岡田正彦先生(高等教育開発センター)

概 要

本年度の学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2014」は、「大分大学のアクティブ・ラーニング、キックオフ研修会」として企画し、本学教員による2件の授業実践報告ののち、報告への検討をはじめとして、アクティブ・ラーニングについても議論した。

報告の概要

報告1. 竹中先生から、「生活科」の指導法・教育法に関する集中講義の様子が、豊富な写真記録により、以下のように紹介された。

教材研究が一通り完了した段階で授業を作り込むための作業をグループワークで進めるため、単語連想法の紹介を兼ねてプリントを配布し作業させている。特に授業を構造化することに主眼を置いている。また、グループ分けをくじ引きとすることで、話したことのない人とも話さなければならない状況を作り出している。グループワークにあたっては作業内容をパワーポイントで示し指示を明確化する工夫がある。作製した構造図を隣のグループにプレゼンすることで情報の共有化を図るとともに、学んだことのふり返りを行う授業実践であった。

報告2. 岡田先生から「教養教育科目におけるインターンシップを組み込んだ授業の開発」として、教養教育科目で開設している4つの授業「中小企業の魅力の発見～インターンシップセミナー～」 「学習ボランティア入門」 「プロジェクト型学習入門1～インターンシップセミナーB～」 「プロジェクト型学習入門2～インターンシップセミナーB～」をもとにした実践報告があった。

それぞれの授業の概要の説明のあと、学生による授業評価、学んだこと、習得した能力などについて、アンケートや成果物、レポート等に基づく調査結果が報告された。その結果、学ぶ意欲の向上やキャリアデザインの具体化、地域連携の活用等の成果が上げられるものの、成果の客観的な測定方法、 Semester単位での実施によるカリキュラムの限界、就職活動まで視野に入れた支援体制についての課題が指摘された。

質疑応答

授業中のスマホの使用について、グループの分け方、知識伝達型授業とは異なる成績評価のあり方について、報告者とフロア参加者を交えて活発な議論が行われた。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	甘利弘樹, 川寄道広, 竹中真希子, 長野昌博, 藤井康子, 山下茂
経済学部	青野篤, 石井まこと, 小野慎一郎, 佐藤隆
工学部	岩本光生, 中島誠, 西野浩明, 小林祐司
その他	井上昌美 (産学官連携推進機構) 岡田正彦, 末本哲雄, 牧野治敏 (高等教育開発センター)

⑤学生のメンタルヘルス講演会「多様な個性の認め方 ～発達障害の理解と関わり～」

日時：平成26年12月5日(金) 15:00~16:30

場所：教養教育棟35号教室(旦那原キャンパス)

病院第1会議室(挾間キャンパス:遠隔配信)

テーマ：「多様な個性の認め方 ～発達障害の理解と関わり～」

講師：高橋正泰(たかはしまさやす)先生, 発達障害支援研究所「たまや」所長

概要

工藤先生(保健管理センター)より、講師の高橋先生にお話をしてもらいたかった旨、挨拶が

あり、続いて司会の堤先生（保健管理センター）から講師の紹介があった。

講演の主題は「発達障害」。言葉が先行しているがよく知られていない、専門医が少ない。広汎性発達障害という訳の分からない診断が下されることがある。「たまや」では、児童、成人に居場所の提供し、働く練習をさせている。現在の特別支援教育は甘やかしすぎである。困ったら誰かが助けてくれると思っている。

発達障害の定義について。言葉が悪い。障害、ひらがなに置き換えてもかわらない。個性でもないし障害でもない。社会の価値観が変われば障害も変わるので、定義も変わる。障害特性と障害がある状況との区別が必要である。適切な支援があれば障害のある状況は無くすることができる。

発達障害の特性。生まれつきのものであると言われているが、躰の問題も関係している。自閉症の診断は、かつて冷たい親に育てられたから自閉症になったと言われていたが、そうではなかった。ただ、外で話を聞かない子どもは家ではもっと聞かない。

特別支援教育。方向性で大切なことは共感的に理解することが大切と描かれているが、発達障害はそれが（共感的理解）が一番難しい。例えば視覚障害は目を閉じることで理解できるが、自閉症の子どもは、行動を真似してもわからない。共感的理解は難しい。追体験が難しい以上、想像力が最も大切である。イメージを駆使して読み取るためには知識が必要である

発達障害の原因は分かっていない。大学で一番多いのはアスペルガーと ADHD。アスペルガーはこだわりが強い。アスペルガーが一番残っているのは大学ではないか。障害特性があることは問題では無い。苦手なことを持っているにすぎない。苦手なことがあることによって失敗経験が増えて、不適応リスクが増える。失敗しやすくなって、周囲から困られ社会から外れていく負の循環がある。

適応のモデル。自己評価が一番大事。積極性が出る、適応ができる、経験を積みながらステージが上がっていく。「してはいけない」という指示は「しなさい」と同じことである。伝え方の工夫が必要。禁止の指示はダメ。例えば、「走るな」ではなく「ゆっくり歩け」。大学生で多いのはルール違反が許せないことが多い（自分のことはさしおいて）。鏡文字を書いてしまう子どもが苦手な漢字を使わないところを選び医学部に入った。社会人で頑張りすぎが多い。急げと言われることが苦手。既に叱られていると思ってしまう。急げと言われても、間に合っただけと褒められる経験を積むとよくなる。

支援と言うが人を変えることはできないので、受け取る側の自分自身が変わること。それが支援であるとのまとめであった。

質疑応答

Q：内科的には早期発見早期治療が重要だが、支援ではどうか。

A：支援という感覚は、少しでも良くなるのが支援。声をかけてあげるのは早いほうが良い。

Q：ピグマリオン効果について、褒めて伸ばすコツというのはあるか。

A：褒めるのは私も得意では無いが、指示して認めてあげるのが基本。評価をしてあげる。

こっちは繰り返しやっていくしか無い。否定的な言い方が肯定的になるのに3年くらいかかった。最後は拍手で終了した。

参加者

所 属	氏 名
教育福祉科学部	柳澤奈奈, 衛藤彩花, 西本一雄, 井上あゆみ, 椎葉紀枝, 河野伸子 島原奈美, 谷口真希, 衛藤裕司, 嶋田藍, 堀江菜摘, 増本晴香
経済学部	中村明子, 植木貴頭
医学部	村田俊幸, 木戸芳香, 土器屋美貴子, 岐部千鶴, 徳丸喜美代 岡野ゆかり, 松本典子, 小野悦子, 江口美和, 出川隆富 小松昌代, 小田寛, 笹島三幸
工学部	柴田克成, 竹の井朝美, 甲斐美恵
その他	木次政則, 釘宮隆, 板井美恵子, 河野泰久, 遠藤翔平, 稲村奈夏 後藤佐智子, 河野香奈江, 藤枝由佳, 稲田博文, 今村正明 高橋かおり

⑥シラバスの書き方ワークショップ

例年実施している、シラバスの書き方講習会を以下の日程で実施した。

[講演会の概要]

テーマ: シラバス作成講習会 2014

～ねらい・到達目標・評価・学習活動の立て方～

担 当: 末本 哲雄 (高等教育開発センター)

日 時: 2015年1月15日(木) 16:30～18:00

2015年1月19日(月) 16:30～18:00

場 所: 27号教室 (旦那原キャンパス教養教育棟2階)

[内容]

全学に配布した資料に基づき、シラバスの役割を再認識するとともに、授業設計とシラバス記述のヒントについて解説した。

[対象]

- ・授業担当教員

[参加者]

1月15日

- ・教育福祉科学部…1名 ・工学部…2名 ・高等教育開発センター…1名
- ・教育支援課…1名

1月19日

- ・教育福祉科学部…2名 ・工学部…1名 ・高等教育開発センター…2名

⑦大学院・学部合同 FD 研修会「アクティブ・ラーニングを全学的に展開するための研修会」の開催

[研修会の主旨]

大学の教育改革が全国的に展開されているが、その中核を占めるものとして「アクティブラーニング」の導入がある。本学でもその全学的な取組が始まり、「きつちよむフォーラム 2014」で

は、アクティブラーニングのキックオフ研修会が開催された。また、シラバスについては各授業でのアクティブラーニングへの取組を記載するよう新たな項目が加わった。このように徐々にではあるがアクティブラーニングへの対応が広がる傾向があるものの、その一方では、「アクティブラーニングとはなんぞや」の声も少なくない。そこで、大分大学が進めている「大学改革を加速させるための人づくりプロジェクト」の一環として、アクティブラーニングに関する研修会を開催した。

日 時： 平成 27 年 3 月 24 日(火) 13 時～16 時
場 所： 且野原キャンパス教養教育棟 23 号教室
講 師： 成田 秀夫 氏 (河合塾 研究開発職・講師)
野吾 教行 氏 (河合塾 教育研究部)

プログラムの概要

第 1 部. アクティブラーニングの概要 講演とワークショップ (120 分)

第 2 部. アクティブラーニング調査と他大学事例等の講演 (45 分)

[研修会の概要]

今回はアクティブラーニングについての全国調査を実施した河合塾より講師を招聘し、日本の大学での動向や実際の授業の作り方、進め方についての研修会とした。

最初に、高等教育開発センター長山下茂氏より、開会の辞として、全国のアクティブラーニングへの取組に関して、全国の研究会等へ参加しての印象とその必要性が伝えられた。

次に、望月聡副学長より挨拶があり、本学でのアクティブラーニングへの今後の取組、将来に向けての展望等の話があった。講師の紹介のあと、講演が始まりました。

第 1 部 成田秀夫氏 (河合塾教育研究開発本部) 株式会社 KEI アドバンス

テーマ「今、大学で求められているアクティブラーニング ータフな若者を育てるためにー」

1. 社会の変化とアクティブラーニング
2. 学びを深めるアクティブラーニング
3. 今日からできるアクティブラーニング型授業

第 2 部 野吾教行氏 (学校法人河合塾 教育研究開発部門教育研究部)

テーマ「調査事例に基づくアクティブラーニングに関するご提言」

1. 河合塾の大学教育力調査について
2. アクティブラーニングについて
3. 2012 年度 大学のアクティブラーニング調査 ー質問紙調査から見てきたことー
4. 実地調査からの事例紹介と提言

今回の研修では、当初予定していた具体的なシラバスや教材作成のためのワークショップまでには行き届かなかったため、次回の研修会への課題とした。参加者からは、アクティブラーニングについての理解が深まったと好評であった。

参加者

所 属	氏 名
教育福祉科学部	三次徳二, 住田実, 都甲由紀子, 花坂歩, 甘利弘樹, 望月聡
経済学部	小野慎一郎, 宮町良宏, 佐藤隆, 青野篤, 白木康晴, 石井まこと
医学部	林智一, 木下晴美
工学部	加藤芳隆, 金澤誠司, 中島誠, 石川雄一, 斉藤晋一, 和泉志津恵
その他の機関	古城和敬, 井上昌美, 板井美恵子, 岡田正彦, 牧野治敏

(2) 学生による授業評価アンケート調査

本学の授業改善を目的とした、学生による授業評価の実施母体である教務部門会議の活動を支援するために、全学統一した授業評価アンケートの立案、作成及び調査結果の集計と分析を行い、報告書を発行している。本年度刊行した報告書は「平成 24 年度教員による自己点検レポート集～学生による授業評価への対応～」 「平成 24 年度授業改善のためのアンケート調査結果報告書～学生による授業評価～」である。

平成 26 年前学期及び後学期に実施した「学生による授業評価」アンケート調査の調査対象は以下のとおりである。

前学期

- ・教養教育（全学教育機構）：主題科目（自然分野（自然系）・総合分野）
- ・教育福祉科学部：C グループ(授業担当者の名前は～わ)
- ・経済学部：各学科 3 番目の講座の科目
- ・医学部：医学部からの提出科目
- ・工学部：全科目

後学期

- ・教養教育（全学教育機構）：主題科目（自然分野（自然系）・総合分野）
- ・教育福祉科学部：A グループ(授業担当者の名前あ～こ)
- ・経済学部：各学科最初の講座の科目，学科共通科目
- ・医学部：医学部提出科目
- ・工学部：全科目

①平成 25 年度前期授業改善のためのアンケート対象科目

【教養教育】	人間・労働と技術の現代史（藤原 直樹）
子育て支援の地理学（久木元 美琴）	グローバル経済入門（柴田 茂紀）
企業と労働（幸 光善）	日本国憲法（橋本 聖美(非)）
日常生活のリスクと保険（佐藤 大介）	会社組織のしくみ（本谷 るり）
資本市場論（金 珍奎）	経済学を学ぶ（高見 博之）
税金入門（菅野 隆）	日本経済入門（村山 悠）
スポーツと生活（前田 寛）	生涯学習論入門（岡田 正彦）
イノベーションと企業（松尾 純廣）	地理学基礎・読図入門（佐藤 裕哲）

【教育福祉科学部】

教育学研究法Ⅰ	(山崎 清男)	英語コミュニケーションⅢ(ミッシェル ポール)	
教育学研究法Ⅰ	(長谷川 祐介)	精神保健福祉に関する制度とサービスⅠ	(廣野 俊輔)
スポーツ栄養学	(望月 聡)	特別活動の指導法	(長谷川 祐介)
栄養学	(望月 聡)	精神保健福祉援助演習Ⅰ	(橋本 美枝子)
人間栄養学	(望月 聡)	美術科教育演習Ⅰ	(藤井 康子)
社会福祉学特講Ⅰ(外書講読)	(橋本 美喜男)	デザインⅢ(a)	(廣瀬 剛)
音楽鑑賞法Ⅰ	(松本 正)	造形表現Ⅰ	(廣瀬 剛)
芸術と鑑賞Ⅰ	(松本 正)	生活環境福祉関連外書講読	(三次 徳二)
環境物理学	(藤井 弘也)	情報処理演習Ⅰ	(山下 茂)
認知心理学	(藤田 敦)	図画工作科指導法(小)	(藤井 康子)
国語科指導法(小)	(花坂 歩)	現代生活論	(望月 聡)
環境教育	(三次 徳二)	小学校外国語活動指導法	(御手洗 靖)
音楽(小)	(松田 聡)	音楽史Ⅱ	(松田 聡)
生徒指導論(学校教育相談と進路指導を含む。)		言語・外国語(中)Ⅰ	(李 末)
	(長谷川 祐介)	言語・外国語(中)Ⅰa	(李 末)
ソーシャルワーク論Ⅳ	(日和 恭世)	環境教育演習	(三次 徳二)
幼児・児童臨床心理	(前田 明)	公民科指導法(高)	(平田 利文)
幼児・児童臨床心理学	(前田 明)	英語コミュニケーションⅠ	(ミッシェル ポール)
近代文学演習	(藤原 耕作)	英語コミュニケーションスキルB	(御手洗 靖)
日本史概説Ⅰ	(八木 直樹)	器楽(小)	(松田 聡)
日本史特講Ⅰ	(八木 直樹)	表現教育概論	(松本 正)
構成ⅡA(b)	(廣瀬 剛)	計算物理学入門	(藤井 弘也)
教育制度・経営論	(山崎 清男)	社会科教育学入門	(平田 利文)
数学特講Ⅰ	(馬場 清)	栽培学(実習を含む。)	(林 浩昭)
社会科指導法(小)	(平田 利文)	基礎デザインⅠA(a)	(廣瀬 剛)
児童・家庭福祉論	(矢野 茂生)	基礎物質科学Ⅰ	(藤井 弘也)
精神保健福祉の理論と相談援助の展開Ⅱ		物理学Ⅰ	(藤井 弘也)
	(橋本 美枝子)	近代文学特講	(藤原 耕作)
デジタル情報演習	(山下 茂)	教師学	(山崎 清男)
心理検査の理論と実際	(溝口 剛)	表現と文化	(松田 聡)
人格心理学	(溝口 剛)	理科(小)	(藤井 弘也)
マルチメディア情報処理	(山下 茂)	計算機数学演習	(馬場 清)
地域芸術文化研究	(松本 正)	言語獲得と言語障害	(橋本 美喜男)
基礎物質科学Ⅱ	(藤井 弘也)	書道概論	(樋口 将一)
物理学Ⅱ	(藤井 弘也)	社会科教育学演習Ⅰ	(平田 利文)
線形代数Ⅰ演習	(馬場 清)	国語(小)	(花坂 歩)
食生活論	(望月 聡)	地質学概論	(三次 徳二)
英語教育演習	(柳井 智彦)	国語科教育研究法	(堀 泰樹)

デザインⅡB (b) (廣瀬 剛)
 現代社会と福祉 (廣野 俊輔)
 現代福祉事情 (廣野 俊輔)
 芸術療法概論 (溝上 義則)
 最新発達心理学演習 (前田 明)
 理科実験Ⅰ (藤井 弘也)
 国語科授業研究 (花坂 歩)
 地球科学 (三次 徳二)
 物理学実験Ⅱ (コンピュータ活用を含む。)
 (藤井 弘也)

線形数学 (馬場 清)
 線形代数Ⅰ (馬場 清)

【経済学部】

経済政策論Ⅰ (高見 博之)
 証券論 (金 珍奎)
 情報社会論Ⅰ (豊島 慎一郎)
 国際金融論Ⅰ (小笠原 悟)
 簿記Ⅰ (越智 学)
 簿記Ⅰ (小野 慎一郎)
 経営学入門 (鵜崎 清貴)
 管理会計論Ⅰ (大崎 美泉)
 会計学Ⅰ (小野 慎一郎)
 異文化間コミュニケーション論Ⅰ (久保田 亮)
 経済学Ⅱ (井田 知也)
 経済学Ⅲ (丸山 武志)
 企業ファイナンス論Ⅰ (鵜崎 清貴)
 原価計算論Ⅰ (加藤 典生)
 現代フランス社会論 (安田 俊介)
 社会政策論Ⅰ (石井 まこと)
 経済学Ⅰ (相浦 洋志)
 上級簿記 (正田 淳一)
 簿記Ⅲ (篠森 英佐)
 監査論Ⅰ (越智 学)

【医学部】

医療・看護情報論 (穴井 孝信)
 精神・神経疾病論 (井上 亮)
 小児・母性疾病論 (穴井 孝信)

地域看護システム論 (井手 知恵子)
 解剖学 (荒川 満枝)
 地域生活支援方法演習 (井手 知恵子)
 精神看護方法論Ⅱ (河村 奈美子)
 成人慢性期看護方法論Ⅱ (脇 幸子)
 地域看護学概論 (井手 知恵子)
 地域生活支援方法論 (井手 知恵子)
 精神看護学概論 (河村 奈美子)

【工学部】

英語Ⅰ (園井 千音)
 英語Ⅰ (園井 千音)
 英語Ⅰ (園井 千音)
 英語Ⅱ (園井 千音)
 英語Ⅱ (園井 千音)
 英語ゼミナール10 (園井 千音)
 物理学実験 (小林 正)
 応用解析Ⅲ (沖野 隆久)
 力学Ⅰ (後藤 善友)
 応用解析Ⅳ (沖野 隆久)
 応用解析Ⅳ (沖野 隆久)
 物理学基礎 (後藤 善友)
 物理学基礎 (小林 正)
 物理学基礎 (野本 幸治)
 熱力学Ⅰ (濱武 俊朗)
 力学Ⅰ (小林 正)
 応用解析Ⅲ (沖野 隆久)
 建築施工学 (上田 賢司)
 データベースシステム (二村 祥一)
 基礎数学 (開 憲明)
 解析学Ⅱ (開 憲明)
 技術者倫理 (佐藤 光雄)
 建築法規 (宮本 吉朗)
 力学Ⅰ (今野 宏之)
 測量学実習 (児玉 伸彦)
 図学 (今永 和浩)
 流体工学Ⅰ (栗原 央流)
 材料力学基礎・演習 (後藤 真宏)
 材料と弾性の力学 (後藤 真宏)

流体力学基礎・演習	(濱川 洋充)	基礎電磁気学	(近藤 隆司)
プログラム言語演習	(石松 克也)	物理学基礎	(近藤 隆司)
機械製図	(後藤 真宏)	物理学基礎	(長屋 智之)
伝熱学 I	(橋本 淳)	情報理論	(田中 充)
機械力学基礎・演習	(劉 孝宏)	言語処理	(川口 剛)
システム制御基礎	(中江 貴志)	英語コミュニケーション	(大城 英裕)
機械物理	(山本 隆栄)	情報理論	(川口 剛)
機械数学 II	(石松 克也)	基礎プログラミング	(中島 誠)
メカトロニクス	(田上 公俊)	ソフトウェア工学 II	(大竹 哲史)
機械設計製図 I	(岩本 光生)	データサイエンス基礎 II	(和泉 志津恵)
エネルギー変換機器	(後藤 雄治)	計算機科学概論	(越智 義道)
材料力学 I	(小田 和広)	データサイエンス演習	(和泉 志津恵)
エネルギーシステムデザイン	(後藤 雄治)	情報構造論	(中島 誠)
伝熱学 I	(岩本 光生)	情報職業指導	(越智 義道)
電気理論基礎	(濱本 誠)	情報論理学	(古家 賢一)
流体工学 I	(山田 英巳)	知識処理論	(末田 直道)
流れ学 I (山田 英巳)		基礎数学	(高阪 史明)
機械要素設計学	(福永 道彦)	基礎数学	(田中 康彦)
電磁気学 I	(濱本 誠)	解析学 II	(高阪 史明)
弾性力学	(小田 和広)	解析学 II	(田中 康彦)
電気回路 II	(高坂 拓司)	音メディア処理	(古家 賢一)
機械設計製図 II	(岩本 光生)	情報ネットワーク	(西野 浩明)
電気回路 III	(秋田 昌憲)	計算機アーキテクチャ I	(川口 剛)
電気工学概論 I	(柴田 克成)	代数学 II	(高阪 史明)
電子回路 II	(緑川 洋一)	代数学 II	(田中 康彦)
電力エネルギー工学	(市來 龍大)	情報システム概論	(川口 剛)
電気電子基礎実験 I	(秋田 昌憲)	代数学 II	(田中 康彦)
電磁気学 IV	(戸高 孝)	基礎理論化学 I	(大賀 恭)
電気電子制御工学 I	(柴田 克成)	無機化学 1	(豊田 昌宏)
電気電子計測工学	(槌田 雄二)	分析化学	(井上 高教)
電気機器工学 II	(戸高 孝)	原子と分子	(平尾 翔太郎)
計算機工学 I	(緑川 洋一)	電気化学	(津村 朋樹)
電気回路 I	(金澤 誠司)	化学実験	(大賀 恭)
通信工学	(秋田 昌憲)	高分子化学 II	(氏家 誠司)
音響工学	(秋田 昌憲)	有機化学 II	(石川 雄一)
電気電子数学 I	(柴田 克成)	高分子化学 I	(守山 雅也)
電気電子工学入門	(秋田 昌憲)	物理化学 I	(永岡 勝俊)
電磁気学 I	(金澤 誠司)	原子と分子	(大賀 恭)
電気機器設計・製図	(甲斐 祐一郎)	建築総論	(大鶴 徹)

建築環境計画Ⅰ	(大鶴 徹)	人間システム信号処理	(上見 憲弘)
材料力学	(佐藤 嘉昭)	メカトロニクスⅡ	(小川 幸吉)
建築計画設計演習Ⅱ	(鈴木 義弘)	人間工学	(前田 寛)
建築材料	(大谷 俊浩)	応用解析Ⅱ	(福田 亮治)
建築構法	(井上 正文)	機械工作学	(菊池 武士)
建築耐震システム	(菊池 健児)	応用解析Ⅲ	(福田 亮治)
鉄筋コンクリート構造	(菊池 健児)	電気回路Ⅱ	(小川 幸吉)
都市計画	(小林 祐司)	材料力学	(今戸 啓二)
建築環境工学Ⅰ	(富来 礼次)	応用解析Ⅱ	(福田 亮治)
建築設備計画Ⅰ	(真鍋 正規)	現代制御工学	(菊池 武士)
建築環境工学Ⅰ演習	(富来 礼次)	システム解析	(松尾 孝美)
建築CAD製図Ⅱ	(姫野 由香)	電子回路Ⅱ	(上見 憲弘)
建築英語	(大鶴 徹)	身体運動機能学	(岡内 優明)
構造力学Ⅱ	(井上 正文)	人間システム計測工学	(上見 憲弘)
基礎構造	(佐藤 嘉昭)	力学基礎演習Ⅰ	(松尾 孝美)
建築計画設計演習Ⅱ	(鈴木 義弘)	福祉機器工学Ⅰ	(今戸 啓二)
福祉環境計画	(鈴木 義弘)	電気工学Ⅰ	(小川 幸吉)
コンピュータプログラミング	(富来 礼次)	情報処理概論	(松尾 孝美)
建築計画Ⅰ	(鈴木 義弘)	Cプログラミング	(池内 秀隆)
機構力学	(今戸 啓二)		

②平成25年度後期授業改善のためのアンケート対象科目

【教養教育】

食品材料概説	(望月 聡)	科学技術コミュニケーションのデザインと実践	(末本 哲雄)
プロジェクト型学習入門2-インターンシップ		クルマと社会の関わり	(島田 和典)
セミナーB(市原 宏一)		カラダの見方・考え方	(牧野 治敏)
ハンゲルとその文化Ⅱ	(劉 美貞)	数理の世界	(田中 康彦)
国際関係入門	(高山 英男)	電気の世界Ⅱ	(大久保 利一)
植物細胞工学	(泉 好弘)	統計学基礎	(安部 眞彦)
木材加工の技術	(市原 靖士)	情報処理入門	(本城 信光)
機械の世界	(木下 和久)	大分の水Ⅱ	(市原 宏一)
物質の状態と変化	(大賀 恭)	健康と看護	(井上 亮)
機械と文明	(木下 和久)	くらしの化学	(氏家 誠司)
海流とその研究	(西垣 肇)	エレクトロニクスの世界Ⅱ	(厨川 明)
情報処理入門	(本城 信光)	家族と住まい	(川田 菜穂子)
身近な化学	(芝原 雅彦)	情報処理入門	(本城 信光)
分子システムの時間発展	(岩城 貴史)	科学技術史	(梅津 清二)
大分の水Ⅲ	(寺村 淳)	日本の環境政策	(城井 堅)
市民参加と現代社会	(豊島 慎一郎)	コミュニケーション能力の養成入門Ⅱ	

	(佐藤 裕哲)	哲学概論 I	(黒川 勲)
職業とキャリア開発	(古城 和敬)	哲学概論	(黒川 勲)
医科学入門	(西園 晃)	生物学実験 II (コンピュータ活用を含む。)	
社会福祉と自立思想	(衣笠 一茂)		(泉 好弘)
男女共同参画入門	(松浦 恵子)	基礎解析	(大野 貴雄)
物質の状態と変化	(原田 拓典)	自然地理学特講	(小山 拓志)
情報処理入門	(吉岡 孝)	地域地形論	(小山 拓志)
情報処理入門	(本城 信光)	ソーシャルワーク論 I	(衣笠 一茂)
情報科学の世界	(末田 直道)	数学特講 II	(家本 宣幸)
基礎理論化学 II	(大賀 恭)	言語・外国語 (中) IV	(甘利 弘樹)
抽象化と代数学	(馬場 清)	絵画演習	(久間 清喜)
数学入門	(大隈 ひとみ)	住居管理学	(川田 菜穂子)
数学の世界	(川寄 道広)	数学特講 II	(川寄 道広)
カタリバでキャリアを拓く	(宮町 良広)	情報科学 I	(大岩 幸太郎)
現代の福祉政策	(垣田 裕介)	数学特講 II	(大野 貴雄)
家族と法	(藤村 賢訓)	スクールソーシャルワーク	(衣笠 一茂)
大分の人と学問	(古城 和敬)	アメリカとアメリカ文学	(金子 光茂)
情報リテラシー II	(豊島 慎一郎)	声楽 II (日本の伝統的な歌唱を含む。)	
情報リテラシー III	(西村 善博)		(栗栖 由美子)
情報リテラシー II	(松隈 久昭)	技術科指導法 (中)	(市原 靖士)
情報リテラシー II	(平川 純一)	プログラミングと言語	(大岩 幸太郎)
数学基礎 S	(安部 眞彦)	基礎解析演習 II	(大野 貴雄)
		位相幾何学 I	(家本 宣幸)
		世界史特講 II	(甘利 弘樹)
		声楽 IV	(栗栖 由美子)
		肢体不自由児の心理・生理・病理	(古賀 精治)
		宗教学	(黒川 勲)
		比較思想論 I	(黒川 勲)
		マルチメディアコミュニケーション演習	
			(市原 靖士)
		英書講読	(青柳 かおり)
		教育数学 II	(川寄 道広)
		絵画 II b	(久間 清喜)
		合唱 II	(栗栖 由美子)
		合唱 IV	(栗栖 由美子)
		合唱 VI	(栗栖 由美子)
		合唱 VIII	(栗栖 由美子)
		コーラス I b	(栗栖 由美子)
		コーラス II b	(栗栖 由美子)

【教育福祉科学部】

幾何学 II	(家本 宣幸)		
健康スポーツ福祉論	(石橋 健司)		
教育学研究法 II	(伊藤 安浩)		
現代国際事情 I	(甘利 弘樹)		
言語・外国語 (独) IV	(池内 宣夫)		
知的障害児の教育と指導法	(衛藤 裕司)		
発達心理学	(河野 伸子)		
応用理科 II	(大上 和敏)		
解析学 II	(大野 貴雄)		
アートマネジメント II	(麻生 和江)		
地域福祉論	(衣笠 一茂)		
地域福祉論 II	(衣笠 一茂)		
版画	(久間 清喜)		
表現基礎実習 BI(声楽)b	(栗栖 由美子)		

グループ表現Ⅰb (栗栖 由美子)	住居学演習 (川田 菜穂子)
表現構成演習Ⅱb (栗栖 由美子)	生物学Ⅰ (泉 好弘)
特殊教育論 (古賀 精治)	基礎環境化学実験Ⅱ (大上 和敏)
知的障害者教育総論 (古賀 精治)	保育学演習 (大野 歩)
教育メディアとコンピュータ (市原 靖士)	教育メディアとコンピュータ (市原 靖士)
法律学概論Ⅱ (含国際法) (織原 保尚)	世界史概説Ⅰ (青柳 かおり)
法学概論Ⅱ (国際法を含む) (織原 保尚)	西洋史概説 (青柳 かおり)
アートセラピー演習Ⅱ (麻生 和江)	現代社会論Ⅱ (大杉 至)
表現指導演習 (麻生 和江)	舞踊創作演習 (麻生 和江)
表現教育演習Ⅱ (麻生 和江)	ダンスⅠ (麻生 和江)
表現教育演習Ⅰ (麻生 和江)	ダンスⅡ (麻生 和江)
社会調査論 (奥田 憲昭)	ダンスⅢ (麻生 和江)
情報数学演習 (大隈 ひとみ)	身体表現実習 (麻生 和江)
データベース基礎 (大隈 ひとみ)	舞踊表現研究Ⅰ (麻生 和江)
調理学 (梅木 美樹)	舞踊表現研究Ⅱ (麻生 和江)
公民科授業論 (黒川 勲)	舞踊表現研究Ⅲ (麻生 和江)
調理学 (梅木 美樹)	舞踊表現研究Ⅳ (麻生 和江)
特殊栄養論 (梅木 美樹)	心理学特別研究 (河野 伸子)
ライフスタイルと栄養 (梅木 美樹)	図画工作(小) (久間 清喜)
総合アートマネジメント演習 (麻生 和江)	A・A地域論Ⅰ (甘利 弘樹)
スポーツ医学 (明石 光伸)	絵画ⅢB(b) (久間 清喜)
ソーシャルワーク演習Ⅱ (衣笠 一茂)	造形表現Ⅱ (久間 清喜)
言語・外国語(中)Ⅱb (甘利 弘樹)	住居学Ⅱ (川田 菜穂子)
居住福祉論 (川田 菜穂子)	住環境論 (川田 菜穂子)
言語・外国語(独)Ⅱa (池内 宣夫)	保育学Ⅱ (大野 歩)
言語・外国語(独)Ⅱ (池内 宣夫)	保育援助論 (大野 歩)
ソーシャルワーク演習Ⅱ (衣笠 一茂)	教育課程・方法論 (伊藤 安浩)
自閉症児の心理と指導法 (衛藤 裕司)	国語学概論 (荻野 千砂子)
国語学特講 (荻野 千砂子)	障害児教育演習 (古賀 精治)
声楽Ⅴ (栗栖 由美子)	高齢者福祉論Ⅱ (工藤 修一)
工業科授業論 (市原 靖士)	コンピュータ概論 (大岩 幸太郎)
西洋文明論Ⅱ (青柳 かおり)	舞踊概論 (麻生 和江)
生活総合演習 (川田 菜穂子)	英書講読 (甘利 弘樹)
基礎環境化学実験Ⅱ (大上 和敏)	コンピュータと芸術 (久間 清喜)
生活総合演習 (大野 歩)	自然地理学概論 (小山 拓志)
ソーシャルワーク演習Ⅲ (衣笠 一茂)	運動生理学実習(トレーニング法演習を含む。)(石橋 健司)
生涯発達心理学 (河野 伸子)	社会学概論Ⅱ (大杉 至)
生涯発達心理学 (河野 伸子)	社会言語学 (池内 宣夫)
職業指導 (市原 靖士)	

国語学演習	(荻野 千砂子)	成人急性期・回復期看護方法論	(末弘 理恵)
絵画基礎 (b)	(久間 清喜)	生活行動論Ⅱ	(志賀 たずよ)
表現基礎実習 AI(デッサン)	(久間 清喜)	保健統計学	(杉田 聡)
統計学Ⅰ	(大隈 ひとみ)	クリティカルケア看護	(末弘 理恵)
情報統計学	(大隈 ひとみ)	基礎看護技術Ⅰ	(吉良 いずみ)
英書講読	(大杉 至)	災害看護論	(志賀 たずよ)
英書講読	(池内 宣夫)	内科系疾病論Ⅱ	(濱口 和之)

【経済学部】

農村発展論Ⅱ	(山浦 陽一)
外国書講読AⅡ	(石井 まこと)
地域経営論Ⅱ	(久木元 美琴)
ビジネス英語A	(ホワイト クリストファー ミル)
比較経営史Ⅱ	(松尾 純廣)
経営情報論Ⅱ	(松岡 輝美)
地域構造論Ⅱ	(宮町 良広)
マクロ経済学Ⅱ	(宇野 真人)
ミクロ経済学セミナー	(村山 悠)
国際経営論	(宮下 清)
地域と商業	(松隈 久昭)
農山漁村再生論	(加藤 恵里)
比較地域分析Ⅱ	(城戸 照子)
法学入門	(青野 篤)
法学入門	(秋山 智恵子)
ゲーム理論	(下田 憲雄)
経営学Ⅱ	(宮下 清)
流通論Ⅱ	(松隈 久昭)
経済学Ⅰ	(相浦 洋志)
経済学Ⅲ	(丸山 武志)
株式会社論Ⅱ	(片山 准一)
経済学Ⅱ	(井田 知也)
政治経済学Ⅱ	(佐藤 隆)
経済数学Ⅰ	(西村 善博)
基礎経営論Ⅱ	(藤原 直樹)
組織革新論Ⅱ	(本谷 るり)
都市経営論Ⅱ	(高島 拓哉)

【医学部】

ホスピスケア	(寺町 芳子)
--------	---------

【工学部】

システム制御	(中江 貴志)
材料力学	(後藤 真宏)
工作機械・生産工学	(木下 和久)
流体力学	(濱川 洋充)
機械工学基礎・演習	(後藤 真宏)
機械設計製図	(中江 貴志)
流体工学Ⅱ	(濱川 洋充)
機械計測工学	(栗原 央流)
機械力学	(劉 孝宏)
デザイン実習	(濱川 洋充)
機械数学Ⅰ	(加藤 義隆)
工業力学	(堤 紀子)
伝熱学Ⅱ	(岩本 光生)
電磁気学Ⅱ	(濱本 誠)
電力システム工学	(後藤 雄治)
エネルギー変換工学	(後藤 雄治)
流れ学Ⅱ	(山田 英巳)
機械工作法	(齋藤 晋一)
流体工学Ⅱ	(山田 英巳)
機械材料	(堤 紀子)
制御工学Ⅱ	(後藤 雄治)
機械設計製図Ⅲ	(齋藤 晋一)
材料力学Ⅱ	(小田 和広)
電気回路Ⅰ	(高坂 拓司)
通信方式	(秋田 昌憲)
電気回路Ⅱ	(金澤 誠司)
電気電子制御工学Ⅱ	(柴田 克成)
電磁気学Ⅲ	(戸高 孝)

電気電子材料	(戸高 孝)	機器分析	(井上 高教)
電気回路Ⅳ	(大久保 利一)	無機化学Ⅱ	(津村 朋樹)
プログラミング	(原 正佳)	化学史	(甲斐 徳久)
電子回路Ⅰ	(緑川 洋一)	物質の状態と変化	(大賀 恭)
プラズマ工学	(市來 龍大)	分離工学	(平田 誠)
電磁気学Ⅱ	(金澤 誠司)	遺伝生化学	(一二三 恵美)
電気工学概論Ⅱ	(秋田 昌憲)	物質の状態と変化	(原田 拓典)
電気電子数学Ⅱ	(柴田 克成)	有機化学Ⅰ	(守山 雅也)
電気機器工学Ⅰ	(槌田 雄二)	有機化学Ⅲ	(守山 雅也)
熱力学	(近藤 隆司)	物理化学Ⅱ	(大賀 恭)
物理学実験	(近藤 隆司)	基礎理論化学Ⅱ	(大賀 恭)
物理学実験	(長屋 智之)	建築計画Ⅱ	(姫野 由香)
電磁波工学Ⅱ	(田中 充)	建築環境工学Ⅱ	(大鶴 徹)
データサイエンス基礎Ⅰ	(越智 義道)	構造力学Ⅰ	(大谷 俊浩)
オペレーションズ・リサーチ基礎	(越智 義道)	構造力学Ⅰ演習	(大谷 俊浩)
コンピュータグラフィックス	(西野 浩明)	建築構造設計Ⅱ	(菊池 健児)
数値解析Ⅰ	(原 恭彦)	木質構造	(井上 正文)
ソフトウェア工学Ⅰ	(吉田 和幸)	建築構造設計Ⅰ	(菊池 健児)
ウェブサイエンス	(古家 賢一)	構造解析	(菊池 健児)
多変量解析	(原 恭彦)	都市システム工学	(小林 祐司)
オペレーティング・システム	(西野 浩明)	建築環境計画Ⅲ	(富来 礼次)
アルゴリズム論	(中島 誠)	塑性設計法	(菊池 健児)
デジタル回路	(大竹 哲史)	建築環境計画Ⅱ	(真鍋 正規)
人工知能基礎	(末田 直道)	建築計画設計演習Ⅰ	(鈴木 義弘)
ヒューマン・インタフェース	(古家 賢一)	建築設計演習	(佐藤 嘉昭)
教職実践演習	(古家 賢一)	建築ワークショップ	(小林 祐司)
解析学Ⅱ	(高阪 史明)	鉄骨構造	(井上 正文)
情報数学	(越智 義道)	建築設計演習	(佐藤 嘉昭)
解析学Ⅰ	(寺井 伸浩)	住居論	(鈴木 義弘)
解析学Ⅰ	(田中 康彦)	建築材料実験	(大谷 俊浩)
解析学Ⅰ	(高阪 史明)	電気工学Ⅱ	(小川 幸吉)
数値解析演習	(原 恭彦)	メカトロニクスⅢ	(池内 秀隆)
計算機アーキテクチャⅡ	(川口 剛)	電気回路Ⅰ	(小川 幸吉)
情報英語	(西野 浩明)	メカトロニクスⅠ	(松尾 孝美)
代数学Ⅰ	(寺井 伸浩)	確率統計	(福田 亮治)
代数学Ⅰ	(田中 康彦)	応用解析Ⅱ	(福田 亮治)
代数学Ⅰ	(高阪 史明)	福祉機器工学Ⅱ	(今戸 啓二)
マルチメディア処理	(行天 啓二)	確率統計	(福田 亮治)
代数学Ⅱ	(寺井 伸浩)	人間システム制御工学	(松尾 孝美)

制御工学 I	(松尾 孝美)	制御工学 I	(松尾 孝美)
材料工学	(今戸 啓二)	生物化学	(坂井 美穂)
工業英語	(HARRAN THOMAS JAMES)	建築CAD製図 I	(重田 信爾)
電子回路 I	(上見 憲弘)	波動と光	(後藤 善友)
力学基礎演習 II	(菊池 武士)	倫理感性工学	(福永 圭悟)
リハビリテーション工学	(池内 秀隆)	基礎電磁気学	(野本 幸治)
人間システム工学	(上見 憲弘)	解析学 I	(開 憲明)
熱・流体力学	(菊池 武士)	基礎数学	(開 憲明)
メカトロニクスIV	(菊池 武士)	力学II (今野 宏之)	
生体運動制御論	(前田 寛)	力学II (小林 正)	
人間システム制御工学	(松尾 孝美)	リハビリテーション工学	(永野 敬喜)

(3) 教育改革推進事業の支援

1) 学修システムの視察

今日の大学改革では、学生の学修状況を把握し、実態に即した学生の指導を行うこと、またそのためのシステムの構築が急務となっている。本学において学生のための学修支援システムを構築するために、教養教育改革ワーキンググループのもとに学修支援システム部会を立ち上げた。この部会へ、本センターのセンター長と教員 2 名が参加し、全目的に支援した。

ここでは、本センターが資料収集のため他大学での学習支援システムの実地調査を行った 2 件の大学の事例について概要を報告する。

①長崎大学との学修システムに関する会議 (テレビ会議システム)

日時；平成 27 年 1 月 13 日(火) 10 時 40 分から 12 時

場所：教養教育棟 会議室 2 (3 階)

参加者： 長崎大学 副学長 村田嘉弘センター長 上野課長

大分大学 山下センター長、末本先生、牧野先生、佐藤副課長

概要：「長崎大学の主体的学修と ICT」について

平成 24 年度 長崎大学の情報化マスタープランに従って ICT アクションプラン 2012 を作成。大学の情報化をどうするか、中期計画に合わせている。6 年間でどうするか。次の中期目標も見通し、12 年を見越している。

アクションプランは達成状況を見ながら 2 年ごとに更新

- ・ LACS (主体的学習促進支援システム) はブラックボードを導入
- ・ CIO/CISO (最高情報セキュリティ責任者) を定め、推進組織として情報企画
- ・ NU-Web システム (学務情報システム)

クォーター制への対応、ナンバーリングシステムにも対応できるように構築中

②佐賀大学の学修システム訪問調査

日時：1月19日（月）10：30～12：00

場所：佐賀大学文化教育学部9号館1F 全学教育機構 教員会議室

対応者：滝澤 登 教授（副機構長） 皆本 晃弥 教授

取材内容

1. ラーニング・ポートフォリオ統合システムについて
2. シラバス
3. チューター制度
4. ティーチング・ポートフォリオ
5. eラーニング, LMS
6. 自動録画システム
7. 出席管理システム
8. 教養科目
9. 各システムの全学的な位置づけ

2)「大学改革を加速させるための人づくりプロジェクト」によるアクティブラーニング推進への取組と研修会への教員派遣の支援

①FD研修会, 講演会の開催

人づくりのための講演会, 研修会として以下の2件を開催した。

1) FD・SD講演「これからの大学教育が取り組むこと～長崎大学の教育改革推進戦略～」

平成26年9月30日 参加者 本学の教職員68名

講師：川越明日香（長崎大学 大学教育イノベーションセンター）

【概要】

第1部では, 長崎大学の学士課程教育の改革状況について, 教養教育を中心に授業評価の活用方法, 学生のコンピテンシーとリテラシーに関する調査結果, 学修成果把握のためのIR導入について講演があり, その後質疑応答を行った。

第2部では, 情報交換として, 講演の内容をもとに大分大学での状況も踏まえながら, より詳細な議論が行われた。

上記の講演会, 情報交換により, 大分大学での今後の教育改革の方向性について多くの示唆を得ることができた。

2)「アクティブラーニングを全学的に展開するための研修会」

平成27年3月24日 参加者 本学の教職員25名

講師：成田秀夫（河合塾 研究開発職・講師）, 野吾教行（河合塾 教育研究部）

<概要>大学でのアクティブラーニングについて, 全国調査と他大学での事例について講演を受けた後, 参加者各自での授業にどう展開すればよいかをワークショップで学ぶことにより, 次年度からの授業実践への足がかりとすることができた。

②研修会への派遣事業

人づくりに関する研修会への参加, 他大学への調査として述べ件数20件, 延べ人数25名を派遣した。

平成26年10月8日 国際シンポジウム「学習のための, 学習としての評価-PBLとMOOCにおける学習評価の可能性-」(京都大学) 中村浩之

平成26年10月20日 第13回大学改革シンポジウム「大学の入試改革について」

(学術総合センター一橋講堂) 望月聡, 大賀恭, 向井豊実, 大野歩
平成 26 年 11 月 8 日 「PBL 教育フォーラム アクティブラーニングにおける学習支援について考える」(同志社大学) 中村浩之
平成 26 年 10 月 29 日 FD フォーラム「成績評価の客観化, 厳格化について」(名城大学) 中村浩之
平成 26 年 10 月 30 日 大学教育再生加速プログラム採択キックオフシンポジウム「国際バカロレア教育と大学教育の接続」(岡山大学) 中村浩之, 向井豊実
平成 26 年 11 月 14 日 国際シンポジウム「大学カリキュラム改革の最前線」(大阪大学) 中村浩之
平成 26 年 11 月 21 日 教育フォーラム「九工大における教育改革の方向と現状」(JR 博多シティ大会議室) 佐藤晃一
平成 26 年 11 月 22 日 「教学マネジメントの改善と学修成果 ～学生支援型 IR の可能性～」(関西国際大学) 佐藤智久
平成 26 年 11 月 27 日 「求める人材, 育てる人材交流会」(京都商工会議所) 中村浩之
平成 27 年 1 月 19 日 「佐賀大学ラーニング・ポートフォリオ・システムをはじめとする学修支援システムの視察」(佐賀大学) 牧野治敏
平成 27 年 1 月 24 日 「2014 年度 京都 FDer 塾 カリキュラム・デザインとは何か」(キャンパスプラザ京都) 中村浩之
平成 27 年 1 月 31 日～2 月 1 日 「情報処理学会第 15 回教育学修支援情報システム (CLE) 研究発表会 (東京学芸大学) 山下茂
平成 27 年 2 月 20 日 山形大学 EMIR 勉強会 (東京未来大学) 中村浩之
平成 27 年 2 月 21 日 大学教育再生加速プログラム推進フォーラム (東急ベイホテル) 中村浩之
平成 27 年 2 月 18 日 第 20 回熊本大学 21 世紀型大学教育セミナー「アクティブラーニングを考える」(熊本大学) 松木俊貴
平成 27 年 2 月 24 日 関西大学 AP 反転シンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか?」(関西大学) 末本哲雄
平成 27 年 2 月 28 日 日本教育工学会研究会学習支援環境とデータ分析 (九州大学) 山下茂
平成 27 年 3 月 13 日 大学教育改革フォーラム in 東海 2015 (名古屋大学) 山下茂, 牧野治敏
平成 27 年 2 月 31 日～3 月 1 日 大学コンソーシアム京都「第 20 回 FD フォーラム 学修支援を問う～何のために, 何をどこまでやるべきか～」(同志社大学) 佐藤隆, 牧野治敏
平成 27 年 3 月 14 日 河合塾 FD セミナー「明日から使える学修評価シート作り」(京都大学) 花坂歩

(4)

学部独自に開催された FD 活動の記録

教育福祉科学部

日時: 平成 26 年 9 月 11 日 (木) 4 限 (14:50～16:20)

場所: 教育福祉科学部 第一会議室

「本学部学生の教員採用試験の受験・結果の現状について」 長谷川祐介先生

「まなびんぐの成長支援システム」 麻生良太先生

「教師育成サポート推進室の支援システム」 森下覚先生

「就職進路委員会の指導システム」 住田実先生

「メンタリング・コーチングシステムの構想」 鈴木篤先生（各 10 分）

質疑応答 （10 分）

教師育成方法共有化のためのディスカッション （30 分）

*約 30 名が参加した。

経済学部

実施日	事業名	参加人数	事業の概要
4月1日	2014年度 初年次教育FD	22名	新入生の授業科目「基礎演習」について、どのように実施していくか、全体説明と質疑応答を行った。
9月29日	第1回 経済学入門検討会議	記録なし	平成28年度から、高大接続の性格をもつ新規開講予定科目「経済学入門」の全体提案が行われた。
9月29日	2014年度 ポートフォリオ研究会 立ち上げ準備学習会	記録なし	佐賀大学経済学部山下壽文氏を講師に迎え、佐賀大経済学部のポートフォリオの現状と課題についての報告と質疑応答を行った。
10月24日	2014年度 第1回ポートフォリオ研究会	16名	前教務委員の井田知也(経済学部教授)先生から、これまで教務委員会を中心に検討してきたポートフォリオを活用した教育指導について話題提供をいただき、参加者で討論を行った。
10月24日	第2回 経済学入門検討会議	記録なし	ミクロ経済学分野の下田先生、マクロ経済学分野の西村先生、政治経済学分野の佐藤先生からそれぞれ20分程度でご報告頂き、残り時間で質疑応答および討論を行った。
12月3日	第3回 経済学入門検討会議	記録なし	金融分野の小笠原先生、財政分野の小野先生からそれぞれ20分程度でご報告頂き、それぞれ25分程度で質疑応答および討論を行った。
12月12日	2014年度 第2回ポートフォリオ研究会	12名	高等教育開発センターの末本哲雄先生を講師に迎え、「WebClassの基本機能の操作実習」が行われた。
12月25日	第1回課題探求型授業(PBL) 研究会	26名+富士通関係者3名	富士通・富士通総研のイノベーションへの取組事例・イノベーション手法の紹介と参加教職員による質疑応答が行われた。
1月21日	第2回課題探求型授業(PBL) 研究会	13名+富士通関係者2名	富士通が行っている「あしたのコミュニティーラボ/あしたラボ UNIVERSITY」の紹介と大分大学出張講義への参加予定学生を交えたオリエンテーションが行われた。
2月4日	第3回課題探求型授業(PBL) 研究会	10名+富士通関係者10名、 学生28名	「あしたラボ UNIVERSITY」の大分大学出張授業として、基調講演、大分大学経済学部生の取組事例紹介、「世界中から人が集まる大分県を目指そう」をテーマとしたアイデアスプリント(学生28名に加え、教員・富士通社員も参加)が行われた。アイデアスプリントで優勝したチームの学生3名には、富士通が実施している社会課題の解決を考えるアイデアソン(大阪会場)への出場権が与えられた。
2月23日	第4回課題探求型授業(PBL) 研究会	8名+富士通関係者1名	「あしたラボ UNIVERSITY」の大分大学出張授業の総括と今後のプログラム企画の方向性の検討が行われた。

2月26日	2014年度 第3回ポートフォリオ研究会	9名	WebClassのポートフォリオの利用に関して、西村善博先生(経済学部)にこれまでの取り組みについてお話し頂き、参加者全体で討論をおこなった。
3月4日	第4回 経済学入門検討会議	記録なし	企業・日本経済関連分野の相浦先生、村山先生からそれぞれ20分程度でご報告頂き、それぞれ25分程度で質疑応答および討論を行った。
3月19日	第5回課題探求型授業(PBL)研究会	17名+富士通関係者1名	イノベーション人材育成のための理想の授業を考えるをテーマに、教員によるワークショップ・コンペが行われ、グループ毎にプロモーション・ビデオの撮影と発表が行われた。

医学部

1. OSCE (医学科4年次) 評価者に対する FD

実施日時・参加人数

- 1回目 平成27年1月21日(水) 18:30~19:30 7名
- 2回目 平成27年1月22日(木) 11:00~12:00 2名
- 3回目 平成27年2月6日(金) 17:00~18:00 2名
- 4回目 平成27年2月16日(月) 18:00~19:00 7名
- 5回目 平成27年2月16日(月) 19:00~20:00 1名
- 6回目 平成27年2月17日(火) 19:00~20:00 4名
- 7回目 平成27年2月18日(水) 18:00~19:00 4名

のべ参加者数 27名

概要

医学科4年次生 OSCE 面接ステーション評価者の講習を実施した。

内容：1回目から3回目は医療面接導入研修として DVD を視聴した。

2回目から7回目は医療面接標準化トレーニング研修を行った。

※平成26年度は医療面接 St.のみ講習を実施した。

2. Advanced OSCE 評価者に対する FD

実施日時・参加人数

- 1日目 平成26年7月22日(火) 13:00~17:00 18名
- 2日目 平成26年7月24日(木) 13:00~17:00 18名

参加者数計 36名

概要

医学科6年次生 Advanced OSCE 実施時の、外科・胸部・頭頸部・腹部・救急・神経の各ステーションの評価者に対して評価者講習 FD と位置づけ証明書を発行している。

3. 大分大学東洋医学教育研究会の FD が1月から11月までの11回/年

毎週第4木曜日に実施している。

1. 実施年月日：4月から3月までの第4木曜日 除12月
2. 事業名：大分大学東洋医学教育研究会

3. 参加人数：毎回 10～20 名
4. 事業の概要：東洋医学教育を実施できる指導者を養成する

4. 大分県医師臨床研修指導医講習会

1. 実施年月日：9月6日から7日までの2日間，約17時間のFDを実施
2. 事業名：大分県医師臨床研修指導医講習会
3. 参加人数：35名
4. 事業の概要：厚生労働省指定の臨床研修指導医資格を取得するための講習会
5. 特記事項（2日間 16時間35分間の講習会）

工学部

授業参観の実施

日時：2015年4月17日（金）1限

場所：産学官連携推進機構の建物西側端のセミナー室

科目：応用化学入門（1年生，必修，2単位，通年，隔週開講）

応化新入生の半分約30人（二グループの1つ）が対象

講師：石川先生 内容：新入生を対象に，学生の心のバリアを低くしようとして，コミュニケーションの育成を明示した能動型講義です。同級生と「自然な対話」ができるようになることを目的とした，「聴く，観る，話す」のグループワーク。

4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門

高等教育開発センターにおける生涯学習関連業務は、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の2部門が連携して実施し、本学における教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、緊急且つ重要な事業、日常的に行う事業等に分類し、軽重をつけて実施することとし、次の2部門において生涯学習社会の形成に向けて以下の業務をおこなった。

- ① 大学開放推進部門において、公開講座・公開授業及び県民・学生への現代的課題への対応に関する学習機会の提供等の大学開放を推進する。
- ② 生涯学習支援システム部門においては、県内の生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とのネットワーク化による県民の生涯学習を支援する。

ただし、生涯学習を推進するためには、学習機会を提供する側の機能（本学）と学習機会を活用する側（県民及び行政）のニーズとを適切に結びつけることが必要であり、本センターにおける取組も、大学開放推進部門と生涯学習支援システム部門の共同で協議を行い、連動して業務を推進してきた。また、センターの統合のメリットを最大限に生かし、高等教育関連部門との連携による生涯学習関連の情報提供の充実の取組、さらに、公開講座・公開授業の充実を中心とした本学の大学開放推進部門会議との連携、大学生の学習に対する生涯学習の観点からの支援（社会人基礎力などを育成するためのインターンシップ等を組み込んだ授業科目の開設や学習ボランティアの養成・支援事業など）、生涯学習に関わる学内の諸部局との連携をおこなった。

また、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の推進の基盤となる調査研究においても、県及び市町村教育委員会生涯学習行政との連携によって、現代的な課題に関する分析・研究を行いつつ、生涯学習・社会教育計画の作成や指導者の育成等に関する指導的業務を担ってきた。

【平成26年度の主な取組】

（1）部門会議

第1回

期 日：平成26年6月17日（火）

議題1. 平成26年度事業計画について

中川生涯学習支援システム部門長及び岡田大学開放推進部門長から資料に基づき平成26年度事業計画について説明し、検討の結果、原案のとおり了承した。

- ①平成26年度センター事業について
- ②平成26年度公開講座及び公開授業について

なお、②について以下のように協議した。

- ・公開講座講習料規程に基づき、公共性の高い講座、子ども向けの講座及び研究開発的性格を持つ講座に関しては、講習料を無料もしくは減額とする。

- ・公開授業に関するクレームとして、休講関係（補講がない、あっても出席できない日である等）、受講者に対する配慮不足（資料が配付されない等）、受講申請時に想定した授業内容と異なる等があるが、一方、受講者に対するアンケートでは好意的な回答も多い、という報告の後、これらの情報を、ある程度フィルターをかけた上で本部門会議や授業担当者にフィードバックすることを検討することとした。

報告事項 1. 平成 25 年度事業報告について

中川生涯学習支援システム部門長及び岡田大学開放推進部門長から平成 25 年度事業実績について報告した。

（２）主な事業

平成 26 年度は第 2 期中期計画 5 年次にあたり、本センターが平成 22 年度に策定した「連携 GP 等への取組及び地方自治体をはじめとする地域の関係機関との連携を進めるとともに、これらの取組を推進するための体制整備の方針」の発展への取組をおこなった。具体的には、平成 26 年度計画では「県民の生涯学習支援や指導者育成による地域づくりを促進するため、学外の機関・団体・企業等による県内のネットワークの更なる拡大を図るとともに、学内の教育機能のネットワーク化などによる高等教育機能を発揮するシステムづくりを行う。」ため、これまでの実践を基盤にして次のような重点施策に取組、多くの成果をあげた。

- ①公開講座、公開授業、指導者育成講座等の実施について引き続き、学内のネットワークづくり、関係大学や市町村、関係団体・NPO 等との連携、各種のホームページや報道機関のメディアを活用するなどして、大学開放事業を広く県民へ広報して受講者層の広がりを進めた。
- ②平成 23 年度に本センターが中核となって設立した大分県「協育」ネットワーク協議会や、本センターが実施する「協育」アドバイザー養成講座の修了生で組織する NPO 法人「大分県『協育』アドバイザーネット」を育成するなどして、更なる支援・指導を行いつつ、県内の教育の協働に関するネットワーク化を推進した。
- ③学生のキャリア教育を生涯学習の視点から推進する「学習ボランティア『フォーバル』」の活動支援や、中小企業と連携したキャリア形成に関する取組を推進した。

【平成 26 年度の事業内容】

（１）大学開放と学習機会の提供

本学が持つ高等教育機能を発揮し、県民に対して直接に様々な学習機会を提供することは地域の大学としての価値と存在感をアピールするうえで重要であり、次のような取組をおこなった。

1) 公開講座

公開講座は、各学部が実施する講座と、本センターが現代的な課題に対応して実施する講座で構成され、開催方法としては、本学が主催する「主催講座」と市町村教育委員等と協同で行う「連携講座」となっている。

平成 26 年度の公開講座は、前期 8 講座、後期 13 講座の計 21 講座（前年度：21 講座）を実施し

た。内訳は、成人対象講座 15 で受講者 474 名（前年度：413 名），子ども・家族対象講座 6 講座で受講者 304 名（前年度：323 名）となり，受講者の合計は 778 名（前年度：736 名）であった。

子ども・家族対象の講座では，平成 24 年度のみの実施の「子どもサイエンス 2012」の 1,250 名を除くと受講者数はほぼ例年どおりである。平成 24 年度から「とよの学びコンソーシアムおおい」の公開講座として開設している「豊の国学」は，分野別講座が 46 名，県立社会教育総合センターと共催して「ふるさと学・豊の国学ジョイント講座，リレー講演会」として開催した中央講座は 80 名の参加があった。また，「豊の国学」と「ふるさと学講座」との連携についても，受講者の視点からの連携を進めるなど，今後の連携内容についての協議を行っている。なお，各学部から各 1 名の教員を推薦して，大分大学からは 4 名の教員が講師として担当するシステムができあがった。

平成 26 年度公開講座

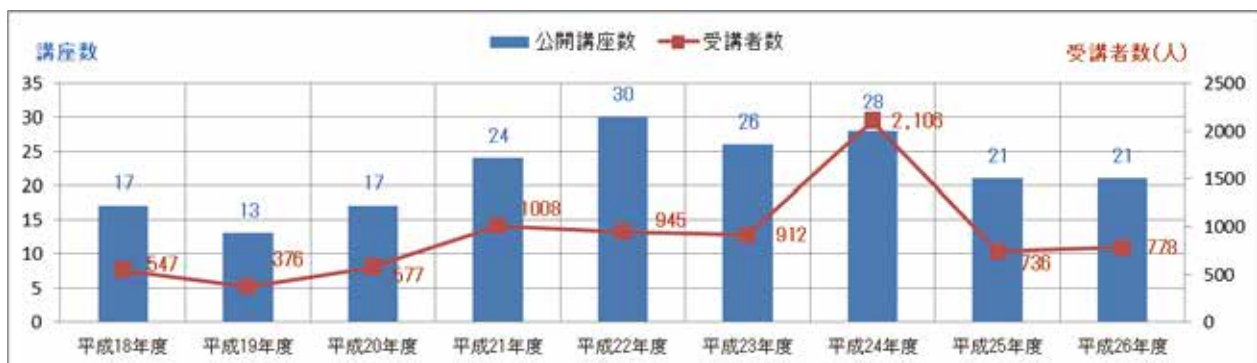
番号	講座名	実施場所	実施期間	実施時間数	受講者数	申込者数
1	わかりやすく楽しい英語発音 上達講座	大分大学内	6月6日～ 7月4日 (5回)	10	14	15
2	建築と都市のこれまでとこれから	ホルトホール大分	6月13日～ 7月4日 (4回)	8	7	7
3	身近な大分の化石収集	大分大学内 採石場：緒方市	7月19日	7	73	150
4	理科や算数を使って親子で遊ぼう	大分大学内	7月12日～9月 6日(8日間)	16	15家族 (32名)	59 家族
5	泳げない子どもの水泳教室	大分大学内	7月26日～8月 2日(7日間)	21.5	78	88
6	夏休み子ども造形美術教室	附属中学校内	8月10日(8/9台 風の為一開催)	6	29	86
7	将棋講座	大分大学内	8月25日～ 30日(6日間)	10.5	77	131
8	豊の国学 中央講座 リレー講演会	ホルトホール大分	8月9日	台風の 為中止	—	48
9	「ふるさと学」「豊の国学」 ジョイント講座 リレー講演会	県社会教育綜 合センター	H27.3月8日	3	80	—
10	豊の国学 分野別講座	ホルトホール大分	8月25日・9月 27日	6	46	55
11	「協育」アドバイザー養成講座上級編	佐賀県武雄市	10月3日～10 月4日	10/3- 4 8時～17 時	13	13
12	これからのまちづくり	ホルトホール大分	9月25日～10 月23日 (5回)	10	39	42

13	「協育」アドバイザー養成講座基礎編	大分大学内	10月26日	6.5	16	16
14	「教育の協働」推進のための公開講座 (読み聞かせ：川島久美子氏講演会)	大分大学内	10月26日	12	73	73
15	放射線が人体へ及ぼす影響	ホルトホール大分	10月31日	2	15	22
16	日本のピロリ菌は胃がんのもと!? -ピロリ菌の国際比較から見えてくる 胃の病気-	ホルトホール大分	11月7日	2	20	22
17	腎臓病と生活習慣	ホルトホール大分	11月14日	2	18	28
18	乳がんのことを知りたい、あなたへ	ホルトホール大分	11月21日	2	18	20
19	早期発見！くちのがん	ホルトホール大分	11月28日	2	21	29
20	「教育の協働」推進のための交流会 協育見本市」	国東市	H27.2月28～ 3月1日	H27. 2/28- 3/1 10時～ 11時	85	70
21	小学生ラグビー教室	大分大学内	H27.1月25日 ～3月15日 (7回)	14	15	15
22	「協育」アドバイザー養成講座中級編	大分大学	H27. 3月14日 3月15日	12	9	15

＝公開講座に関する過去9年間の講座数及び受講者数の変化＝

本センターの統合2年前（平成18年度）から統合7年後（平成26年度）の9年間の講座数及び受講者数を示したものが図1である。

図1 過去9年間の公開講座の実施状況



平成21年度の実受講者数は、単年度事業として竹田市の公民館学級開校式と共催して実施した出前講座（286名）、平成24年度は当年度のみの「子どもサイエンス2012」の17教室1,250名を含む関係である。全体の傾向としては、平成21年度から若干増加して、横ばい傾向である。

しかし、近年は県内のNPO法人や地域の組織・団体等と共催した交流会や研修会等を、一部「公開講座」として指導者育成事業を実施している。

今後とも、県民の生涯学習機会の提供として継続して実施する講座に加え、講座の数の増加という視点だけではなく、実施目的を明確にした高等教育機関で出来る指導者養成や青少年の課題、健康づくりへの対応など、県民のニーズに応える講座の開設が必要であると考えている。

2) 公開授業

公開授業は、正規の授業を開放して学生と共に専門的な教育内容を体系的に学ぶ場を提供するものであり、各学部及び個々の教員からの申請で実施している。

平成 26 年度の公開授業は、前期 62 科目（前年 60 科目）、後期 53 科目（前年 56 科目）で計 115 科目（前年 116 科目）となっている。また、受講生は前期が 128 名、後期が 78 名の合計 206 名（前年度：238 名）であり、第 2 期の 1 年次（75 名）に比較して大幅の伸びである。その要因は、新聞への折込や各種ネットワークを活用した広報の拡充であると考えている。

平成 26 年度大分大学公開授業

前期			後期		
番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数
1	生命観の変遷	3	63	化学Ⅳ	0
2	現代天文学と SETI	6	64	基礎ドイツ語Ⅱ	1
3	西洋美術史	2	65	基礎中国語Ⅱ	0
4	農村発展論Ⅰ	3	66	言語・外国語(独)Ⅳ	0
5	教養ドイツ語Ⅰ	1	67	英語科授業論	1
6	教養中国語Ⅰ	1	68	教養中国語Ⅱ	1
7	環境物理学	1	69	現代中国社会論	1
8	基礎中国語Ⅰ	4	70	国文学史	1
9	比較経営史Ⅰ	0	71	哲学概論Ⅰ	4
10	電気化学	0	72	海流とその研究	1
11	国際金融論Ⅰ	3	73	基礎中国語Ⅱ	0
12	英語Ⅰ	0	74	基礎中国語Ⅱ	2
13	体育学概論	1	75	「読むこと」と自己開拓	0
14	日本経済史Ⅰ	1	76	比較経営史Ⅱ	0
15	医療倫理	4	77	国際金融論Ⅱ	3
16	英語Ⅰ	0	78	人間関係論	2
17	哲学概論Ⅱ	6	79	日本経済史Ⅱ	3
18	臨床心理学	10	80	臨床心理学演習	6
19	古典文学特講	6	81	美術鑑賞論	0
20	地域芸術文化研究	0	82	科学技術コミュニケーションのデザインと実践	0
21	美学・美術史概論	1	83	カラダの見方・考え方	0
22	科学技術コミュニケーション入門	0	84	応用中国語Ⅱ	2

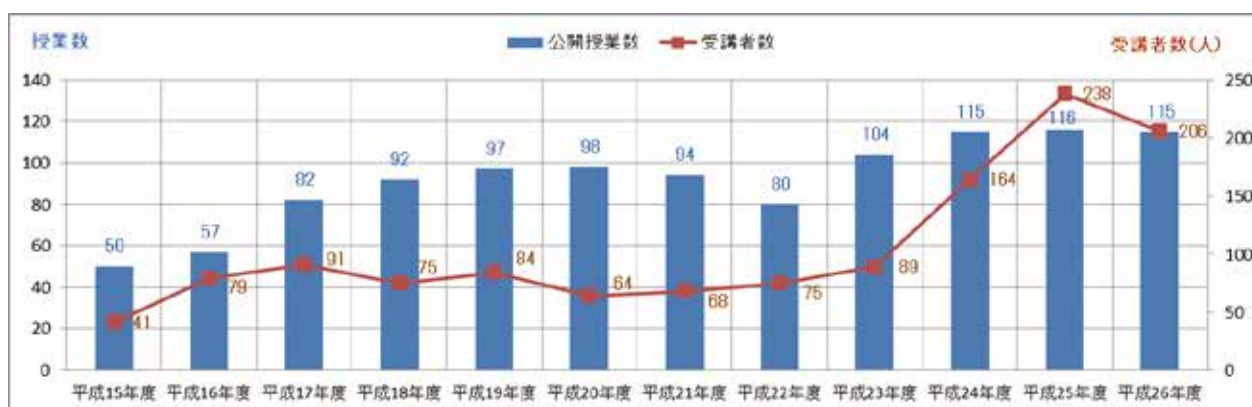
23	福祉と工学技術	0	85	成人教育方法入門	0
24	スポーツと生活	2	86	コミュニケーション能力 の養成入門Ⅱ	1
25	20世紀音楽の諸相	1	87	国際関係論Ⅱ	0
26	イノベーションと企業	1	88	有機化学Ⅰ	0
27	応用中国語Ⅰ	2	89	英語Ⅰ	7
28	人間・労働と技術の現代史	1	90	異文化間コミュニケーション 論Ⅱ	2
29	コミュニケーション能力の養 成入門Ⅰ	1	91	言語・外国語（独）Ⅱ	0
30	社会心理学	10	92	西洋経済史Ⅰ	1
31	国際関係論Ⅰ	1	93	生涯健康論	2
32	老年看護学概論	3	94	英語Ⅱ	0
33	高分子化学Ⅰ	0	95	応用英語E	5
34	英語Ⅰ	8	96	グローバル化と政治経済 (The Politics and Economics of Globalization)	2
35	経済学を学ぶ	5	97	現代ドイツ社会論	2
36	小学校外国語活動指導法	4	98	保険論Ⅱ	2
37	言語・外国語（独）Ⅰ	0	99	英語Ⅱ	2
38	異文化間コミュニケーション 論Ⅰ	2	100	身体表現実習	2
39	応用英語E	6	101	ダンスⅠ	0
40	英語Ⅱ	0	102	社会政策論Ⅱ	1
41	EUの政治経済	2	103	教育の社会学	2
42	消費者教育	0	104	応用中国語Ⅱ	0
43	国語史	1	105	英語ゼミナール17	11
44	企業ファイナンス論Ⅰ	0	106	大学開放論—社会人の学びと 大学生の学び—	4
45	保険論Ⅰ	0	107	労働関係法Ⅱ	1
46	英語Ⅱ	4	108	基礎経営論Ⅱ	0
47	音響工学	0	109	表現形式総合論Ⅱ	0
48	身体表現基礎	0	110	環境生物学Ⅰ	0
49	社会政策論Ⅰ	1	111	都市経営論Ⅱ	1
50	地理学基礎・読図入門	1	112	国語学概論	1
51	応用中国語Ⅰ	0	113	数値解析	0
52	英語ゼミナール9	4	114	日本東洋美術史	1
53	英語ゼミナール16	7	115	応用数学	0

54	生活の化学	1
55	生涯学習論入門	1
56	労働関係法 I	0
57	政治経済学 I	0
58	基礎経営論 I	1
59	都市経営論 I	2
60	国文法研究	0
61	身体感覚の知覚演習	0
62	システム L S I 設計特論第 1	3

＝公開授業に関する過去 12 年間の講座数及び受講者数の変化＝

本センターの統合 5 年前（平成 15 年度）から統合 7 年後（平成 26 年度）の 12 年間の公開授業数及び受講者数を示したものが図 2 である。

図 2 過去 12 年間の公開授業の実施状況



公開授業数は、平成 20 年度の 98 授業をピークに減少傾向であったが、平成 23 年度は 100 授業を超え、平成 26 年度は 115 授業を公開した。受講者数も平成 17 年度をピークに減少傾向であったが平成 23 年度は 89 名で過去最高に近づき、平成 24 年度から大きく増加している。しかし、授業を公開しても受講者がいない授業もある。グラフで特徴がある年度の無受講者授業の割合をみると、平成 16 年度は 35%，平成 17 年度は 49%，平成 20 年度は 55%，平成 23 年度は 49%，平成 24 年度は 38%，平成 26 年度は 36%である。公開授業数に対して受講者数が多い平成 16 年度、平成 17 年度は 1 授業への受講者数が複数であったのことに比較して、平成 18 年度以降は 1 授業あたりの受講者数が少ないという特徴が見られる。公開授業の開始当初は集団での受講であったが、次第に個人のニーズに沿った個人型学習の傾向へと変わってきたことがうかがえるが、平成 26 年度は、公開した授業の内、74 授業への受講者があり、3 名以上の受講者があった科目が 36%（前年度：31%）であり、幅広い科目に複数の受講者があったことがわかる。その要因としては新聞への折込、組織やホームページを活用した広報の充実であると評価している。

3) 公開講座・公開授業収入

開講授業・講座数及び受講者数の変化は前述したとおりであるが、平成24年度の工学部の公開講座などに見られるように、年度において特殊な場合があるために「受講料収入」で変遷を示したものが図3である。



図3 過去11年間の公開事業収入の変化

平成19年度以降の減少要因は、社会のニーズに対応した指導者層の育成のための無料の公開講座の開設や青少年対象の低額の公開講座の開設等に伴うものであるが、受講対象者を指導者層や青少年等に拡大することにより、地域貢献を強くアピールすることができた。平成23年度からの収入の増加は、公開授業・公開講座とも開講数の増加もあるが、有料であってもニーズが高い授業の公開と広報の充実が大きく要因していると捉えている。

(2) センター主催指導者養成事業

生涯学習社会形成の方策として、現代的な課題に関する講座の開設や調査研究を通じた地域貢献と学生への学習支援、及び市町村等との連携による地域が抱える課題に対する学習支援をおこなった。

1) 生涯学習指導者研修事業

<指導者研修1> ※「大分大学高等教育開発センター紀要」第7号から引用

川島久美子氏 講演会 『子どもと本を結ぶあなたへ』 ～大人のためのちょっといい時間！～

大分大学高等教育開発センター主催の本講演会は、「協育」ネットワーク推進事業の一環として開催され、学生の教養としての学びを深めるとともに、地域でのボランティア活動として大切にされている「読み聞かせ」などの読書支援ボランティアについての意識の醸成を目的としている。

今回は、長年にわたり、本と人をつなぐ仕事をされてこられた川島久美子氏に、昨年、本学においていただいた『童話作家 あまんきみこ氏』の魅力や作品を友人の立場から語っていただき、また、東北の方言による「語り」の実演を交え、「語りと絵本の世界」の講話をお願いした。

講演会終了後、同じ講演を聞いた者同志、読書支援に関わることにおける喜びや悩みなどを語り合い、横の繋がりをつくりながら、これからの活動に役立てていただければと願って、昨年同様、交流会を企画した。

主催 大分大学高等教育開発センター

共催 NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット

「ゆい（結い）」人と本を結ぶ読書支援プロジェクト

会場 大分大学旦野原キャンパス

日時 2014年10月26日（日）10:00～14:45（受付 9:30～）

講演会 10:00～12:00

*講師紹介 大分大学2年 金丸佳加

*謝辞 大分大学3年 外池夏子

I部 「あまんきみこ」氏よりメッセージ（代読 川島久美子氏）

友人「あまんきみこ」氏と作品について

II部 「川島久美子の語り」と「絵本」の世界

語り「やまんばのにしき」

交流会（講話と交流） 12:45～14:45

- ・全体会「川島久美子」氏を囲んで・・・講演会の内容についての質疑応答、感想
- ・グループ交流会 1グループ6人程度6グループになって、各グループ進行役を中心に、日常の活動の喜びや悩み等の活動を交流した。
- *グループ進行役 読み聞かせ学生ボランティア「ゆい（結い）」

川島久美子氏プロフィール



1941年 秋田県生まれ 福岡県在住。福岡県立図書館、久留米大学非常勤講師、福音館書店社外講師、福岡県社会教育委員、大野城まどかぴあ図書館長を歴任、平成23年度福岡県教育文化表彰受賞、平成24年度社会教育功労者文部科学大臣表彰受賞、公益財団法人大野城まどかぴあ理事、久留米市立図書館協議会副委員長、日本子どもの本研究会会員、紙芝居文化の会会員、宮の陣小学校絵本の会、宮の陣ひまわり文庫主宰、小学校や図書館で子どもたちへの読み聞かせやお話を語り続ける活動の傍ら、親・教師・図書館員向けの講座の講師として活躍中



<指導者研修2>

「協育」見本市>第8回 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会

近年、青少年を取り巻く様々な課題や団塊世代・高齢者の地域参加の促進等が指摘されているところであり、学校や家庭、地域における様々な取組の連携・協力の必要性が言われています。こうした現状の中、県内各地で各種団体等の独自の取組、地域が学校と連携した取組などが行われています。

本交流会は、こうした県内各地の実践者が自主的に集い、実践事例を交流することによって大人自身の活動エネルギーを蓄えるために、大分県生涯教育学会や、福岡県を中心に活動する「NPO法人幼老共生まちづくり支援協会」などの協力をいただき、さらに、地元教育委員会・生涯学習団体等と協力して開催するものです。多くの方々の参加をいただき事例を基にして地域づくりを熱く語りましょう。**運営委員長 林浩昭（東国東地域デザイン会議会長）**

テーマ 「大いに語ろう～大人がする子ども育て、子どもが活躍するまちづくり～」

主催 東国東地域デザイン会議 大分大学高等教育開発センター
NPO法人幼老共生まちづくり支援協会

協力 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット
大分県「協育」ネットワーク協議会 大分県生涯教育学会

会場 「梅園の里」 〒873-0355 国東市安岐町富清 2244 Tel0978-64-6300

期日 平成27年2月28日（土）～3月1日（日）

日程

一 日 目	<p>10:30 開会行事</p> <p>10:50～基調提案（案） 「コーディネート機能の観点からコミュニティ・スクールの現状を考える」 ～全国の143校のアンケート調査から～ 提案者 大分大学高等教育開発センター 中川 忠 宣 教授</p> <p>※11:50～昼食</p> <p>12:40～実践事例発表</p> <p>○第1分科会 学校教育等への地域・家庭からの支援・協力の事例（5事例） <u>事例</u> 竹田津小学校目標「協働」達成のころみ（国東市） <u>事例</u> 国東市 学びの教室の取組（国東市） 等</p> <p>○第2分科会 地域が主体になった子育て活動の事例（5事例） <u>事例</u> 大分県少年の船の取組み「これまで、そして、これから」（国東市） <u>事例</u> 中学生が考える「愛LOVE NAKATSU未来像」（中津市） 等</p> <p>16:30～17:10 特別講演 演題 「国際結婚の社会学ーアメリカ人妻の「鏡」に映った日本の発想とシステムは変わるのか？」 講師 三浦 清一郎 氏（生涯学習・社会システム研究者）</p> <p>17:40～情報交換会（みなさんの活動状況を交換しましょう）</p>
二 日 目	<p>9:30～11:00 情報交換会 ～地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会のこれからのを考える～ ※8回までの交流会を振り返り、今後の交流会プログラムや運営について、事務局や参加者で語り合しましょう。</p>

会 場 ☆梅が咲き誇る三浦梅園生誕の地～「梅園の里」～☆

参加費 無料 (500円資料代等実費) ※宿泊費等は別途必要です。

申込方法 ○別途「参加申込書」での詳細な参加内容を申し込み願います。

○平成27年2月13日(水)までに申し込み下さい。※当日参加も受け付けます。

第8回 地域発「活力・発展・安心」デザイン交流会 役割者一覧

1. 基調提案

市町村	氏名	役職・所属	内容
大分大学	中川忠宣	大分大学高等教育開発センター教授	「コーディネイト機能の観点からコミュニティ・スクールの現状を考える」～全国の143校のアンケート調査から～
豊後大野市	岩崎 蓉子 工藤 ゆみ	朝地「絆の会」事務局 朝地小学校主幹教諭	

2. 分科会事例

第1分科会：学校教育棟への地域・家庭からの支援・協力の事例（5事例）

○司会者：大分県立社会教育総合センター社会教育主事 矢野 修

	市町村	氏名	役職・所属	事例内容
1	国東市	橋本邦彦	国東市立竹田津小学校校長	竹田津小学校目標「協働」達成のこころみ
2	由布市	伊東俊昭	阿蘇野小学校 校長	『協育』ネットワークの構築による 学校・家庭・地域の連携推進の在り方
3	大分市	三浦章嘉	大分市立吉野中学校PTA	子どもたちを青空に…強い翼をつくるためのこころとからだの栄養
4	国東市	萱島かよ	国東市協育ネットワーク 協育コーディネーター	国東市の放課後チャレンジ教室
5	大分市	大分大学 学生	大分大学学習ボランティア フォーバル「コネクト」	コネクト（大分大学生）の別府市立学校への支援活動とは？

第2分科会：地域が主体になった子育て活動の事例（5事例）

○司会者：大分大学高等教育開発センター准教授 岡田正彦

6	大分市	佐伯和可子	ハートフルウェーブ	不登校生・元不登校生へのフリースクール ハートフルウェーブの役割
7	中津市	高橋栄太郎 豊田 毅士	公益社団法人（日本青年会議所）中津青年会議所	2014 生き抜く力 醸成事業「愛loveNAKATU未来像」
8	大分市	一万田正彦	おおいとおやじネットワーク	おやじが集まって何が出来る？
9	久留米市	馬場 義之	パパラフネットくるめ	お父さんが「気楽に子育て！」をする仲間づくり活動
10	国東市	中野浄昭	大分県少年の船 運営委員長	県少年の船の取り組み「これまで、そして、これから」

4. 特別講演

三浦清一郎	演題：国際結婚の社会学-アメリカ人妻の「鏡」に映った日本 日本の発想とシステムは変わるか？
-------	--



<指導者研修3>

「『協育』アドバイザー養成講座」の取組

改正教育基本法や教育振興基本計画をふまえ家庭・学校・地域が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的として「学校支援地域本部事業」が始まり8年が経過した。その間、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う取組が急激に進んできた。大分県教育委員会は、それ以前の平成17年度から施策として取組始め、子どものために家庭・学校・地域が協働する「教育の協働（協育）」を推進してきた。さらに、平成16年度にコミュニティースクール（和製英語）が実施され、学校教育に地域の願いを反映させ、日常からの地域と学校のつながりの基盤づくりの取組が始まった。現在、文部科学省は、コミュニティー・スクールの拡大を目指して推進している。

本講座は、こうした取組に対して民間の教育力を発揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進するために、地域ぐるみでの学校や地域での子どもの健全育成や家庭教育への積極的な支援、福祉と教育の融合、及び大人社会の再構築を推進する中核的な人材の養成を行うことを目的として平成21年度から開講している。平成26年度までの受講者は129名で、開講する「基礎編」「中級編」「上級編」の3つの講座すべてを受講した方は32名にであり、職業や地域活動を持ちながら日程を調整しての受講だが、徐々にネットワークが広がっている。

さらに、受講者で組織する「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」は、大分県教育委員会が進める、子どものために家庭・学校・地域が協働する「教育の協働（協育）」を、民間団体として推進する法人として平成22年に設立した。会員は、日常的に地域活動をしている方々が、大分大学高等教育開発センターが実施する「『協育』アドバイザー養成講座」を受講して、その趣旨を理解し、会員のネットワークを活用してそれぞれの活動を充実しようとするメンバーである。

NPO法人としての活動は「高まろう（学ぶ）」「広めよう（事業）」「繋がろう（情報）」の3つの柱で、特に「高まろう」の活動をとおして、「協育」のためのコーディネートの大切さを探っている最中である。NPO法人としての今年度の具体的な事業として、文部科学省の事業を受託して、別府市での「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究（学校・家庭・地域の連携協力推進事業）」の取組や、平成26年度文部科学省委託事業「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」～「おんせん県おおいた・別府型ドリームプロジェクト～への支援活動などをおこなった。また、大分大学高等教育開発センター等との共催事業として「川島久美子氏講演会『子どもと本を結ぶあなたへ』～大人のためのちょっといい時間！～」や、「<協育見本市>第8回 地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」などの指導者研修会を実施した。

<平成26年度第5期生「『協育』アドバイザー養成講座」【上級編】>

○期日 平成26年10月3日（金）～4日（土）17：00（1泊2日）

○参加者数 12名

○視察先

1日目 3日⇒9：00大学発（乗車）→別府9：40（県立社会教育総合センター乗車）
別府IC→武雄（昼食）

①佐賀県武雄市立武雄中学校（時間：14：00～16：30）

佐賀県武雄市武雄町富岡 11606 番地 電話：0954-22-4105

県の「家庭・学校・地域連携支援体制づくり推進事業」の指定を3年間受けて、「武中のちから実行委員会」を立ち上げて取り組んできた。平成26年度からコミュニティ・スクールの指定を受ける準備をしている。

2日目 4日(土) 9:30～12:30

9:10 武雄市文化会館着(ホテルから10分) 電話：0954-23-5168

9:30～ 2F 中会議室で説明

②佐賀県武雄市図書館視察

2012年、佐賀県の武雄市議会臨時議会で、武雄市図書館の指定管理者としてカルチュア・コンビニエンス・クラブ(CCC)株式会社を指定する議案等が可決。平成25年4月に全面改装しCCCを指定管理者とした運営が始まった。目的外使用の許可を得てスターバックスを含む蔦屋書店を設置。貸出対象を日本国内居住者に拡大。図書館の開館時間を延長、休館日を廃止などの取組をしている。

<平成26年度第6期生「『協育』アドバイザー養成講座」【基礎編】>

○日時 平成26年10月26日(日) 9:00開講 ～ 16:30閉講

○受講者数 16名(大分大学生含む)

○講座の内容

研修1 9:00～9:50 「『協育』アドバイザー養成講座」について
大分大学高等教育開発センター 教授 中川忠宣

研修2 「子どもと本を結ぶあなたへ」の講演会へ参加(チラシ又はおおいた「協育」ポータルHP参照)

研修2-1 10:00～12:00

テーマ 子どもと本を結ぶあなたへ「大人のためのちょっといい時間！」

講師 川島久美子氏

<講師紹介>公益財団法人大野城まどかぴあ理事、久留米市立図書館協議会副委員長 日本子どもの本研究会会員、紙芝居文化の会会員、宮の陣小学校絵本の会、宮の陣ひまわり文庫主宰小学校や図書館で子どもたちへの読み聞かせやお話を語り続ける活動の傍ら、親・教師図書館員向けの講座の講師として活躍中

研修2-2 12:45～14:45 テーマ 読書活動のネットワークづくり

①12:45～ テーマ「読み聞かせを楽しく続けるために！」

講師 川島久美子氏

② ～14:45 テーマ ネットワークづくりの交流会

読み聞かせなどのボランティアの方々の悩みを語りあいながら、読み聞かせ活動の横の繋がりを作る

進行 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット 佐藤真由美

研修3 15:00～15:20 教育の協働の必要性と大分県・全国の状況

※教育の協働に関する大分県及び全国調査から、その意義や推進方策等についての研修

講師 大分大学高等教育開発センター 中川忠宣

研修4 15:20～16:20 実践を通じた「教育の協働」の意義を学ぶ

～NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動について～

講師 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット 副理事長 八川 徹

＜平成 26 年度第 6 期生「『協育』アドバイザー養成講座」【中級編】＞

○日時 平成 27 年 3 月 14 日（土）・15 日（日）9：00 開講 ～ 16：30 閉講

○受講者数 10 名（再受講含む）

○講座の内容

	時間	内 容
一 日 目	8:40～9:00	受付
	9:00～9:10	開講式（挨拶・説明）
	9:10～11:00	講義 1 学校教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学教育福祉科学部 山崎清男 教授 「子どもの数より多い地域住民が参加する学校教育づくり」 講師 由布市立阿蘇野小学校長 伊東俊昭氏
	11:15～14:00	講義 2 地域社会の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学高等教育開発センター 岡田正彦 准教授
	14:15～16:15	講義 3 家庭教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師 別府 地域子育て支援センター「にじのひろば」代表 村田広子氏 演題：「家庭教育の現状から、地域が関わる必要性を考える」
二 日 目	9:00～10:00	講義 4 いじめの現状と対策及び相談機関に期待すること 大分県教育庁生徒指導室 指導主事 草野 茂生 氏
	10:15～12:00	講義 5 子どものための「協育」を推進するコーディネーターの実際 ～全国のコミュニティ・スクールの現状をとおして～ 講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏
	13:00～16:00	熟議 「学校教育の課題に対応する地域の教育資源（人・文化・産業等）を探そう」 講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏 大分大学高等教育開発センター 中川忠宣 教授
	16:20～	閉講式（修了証授与・アンケート等）

外部講師

氏 名	所属・職名	担 当
生 重 幸 恵	特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長	講義 5・熟議
村 田 広 子	別府 地域子育て支援センター「にじのひろば」代表	講義 3
伊 東 俊 昭	由布市立阿蘇野小学校長	講義 1：学校教育実践
草 野 茂 生	大分県教育庁生徒指導室 指導主事	講義 4

学内講師

山 崎 清 男	大分大学教育福祉科学部教授	学校教育
岡 田 正 彦	大分大学高等教育開発センター准教授	社会教育
中 川 忠 宣	大分大学高等教育開発センター教授	講座担当

（3）学生の生涯学習機会の提供～学習ボランティア『フォーバル』の活動～

「学習ボランティア『フォーバル』」の活動は、「学習ボランティア入門」や「生涯福祉論」等の授業と連動させることによって、学生のボランティア活動のシステムづくりをおこなった。年度当初の募集や研修会などを通して、平成 26 年度の登録者数は 53 名（H26.5 現在）で、これまでの活動を体系的に行う 3 つの自主サークルが主体的な活動をおこなった。

* 「フォーバル」とは

Oita University Volunteer Activity for Lifelong Learning=「Fouvall」

※詳細は「協育」事例集教育の創造～地域「協育」のススメ（第3巻）（大分大学高等教育開発センター発行）をご覧ください。

1) 地域との交流サークル「WITH」の活動

学習ボランティアフォーバルに所属している、ボランティアグループ「WITH」です。「WITH」というグループの名前には、「地域の人たちと“一緒に”地域をつくっていく」という意味が込められており、活動のコンセプトは、「大学生と地域のつながりをつくる」ことです。大学周辺の旦野原地区を対象として活動を進めています。現在、メンバーは 22 名です。今年度は、子どもを対象にして企画を行う「子どもグループ」・高齢者を対象にして企画を行う「高齢者グループ」・地域の現状把握に努め、WITH のメンバー以外の大学生を活動に巻き込めるよう広報活動を行う「事務グループ」の 3 つに分かれて活動を行いました。それぞれのグループの活動を報告したいと思います。

<子どもグループ>



子ども会の子どもたちと大学生とでクッキー作りを行いました。この企画には、WITH のメンバー以外の大学生も参加し、「初めて旦野原の子ども達と関わって、初めは緊張したけど、活動をととても楽しめました！また、このような機会があったら是非参加してみたいです」というような声が得られました。



子ども会のお泊まり会に招待していただきました。その中で、WITH の企画の時間を少し頂き、こむぎねんどを使って工作を行いました。子どもたちは、キャラクターや動物、食べ物など、メンバーと一緒にそれぞれ好きなものをつくっていました。子どもたちとの交流を深めることが出来、良い時間になりました。

<高齢者グループ>



高齢者グループでは、だんご汁ややせうまなど大分の郷土料理をつくりながら地域の高齢者の方と WITH との交流を図る企画を行いました。企画の段階から、地域の方に話し合いに入っていただき、一緒に進めていくことが出来ました。参加者は、県外出身者も多く、大分の郷土料理を知る良い機会にもなりました。



地域の方でものづくりが得意な方がいらっしゃったので、その方を講師にして、WITHのメンバーで貝殻ペンダントづくりを行いました。講師の方は優しく指導していただき、メンバーに教える姿はとても生き生きされていました。みんな真剣な表情で、ペンダント作りに夢中になっていました。

<事務グループ>

事務グループでは、FacebookやTwitterなどのSNSを使って、大学生に活動の周知を進めることが出来ました。また、地域の現状調査においては、地域の方にお話を伺う機会をつくり、且野原地区について知ることが出来ました。事務の活動は今年度から始まったので、来年度は更に活動を深めていこうと考えています。

今年度は、昨年度からメンバーが大幅に増えたことで、体制も変わり、悩みながら活動を進めていくが多かったように思います。来年度も「大学生と地域のつながりをつくる」というコンセプトのもと、多くの大学生を巻き込みながら活動を進めていきたいです。また、少しずつ知名度が広がってきたもののまだまだ地域全体にはWITHの活動が知られていない現状があります。一部の地域住民との交流ではなく、地域全体とのつながりを作る方法を模索していきたいです。

2) 読み聞かせサークル「結(ゆい)」の活動

本を通して人と人を結ぶ。そのつながりの輪を広げる。をテーマに「ボランティアやってみたいけど、どんなものがあるの？。絵本が好き！」という仲間と活動しています。

《主な活動》

- ・毎月第二土曜日の勉強会(大学図書館にて)

4/12 5/10 6/14 7/12 8/9

10/11 11/8 12/13 1/10 2/14 3/14

- ・大分市府内子どもルームでの読み聞かせ
- ・各メンバーそれぞれの活動(小学校など)

その他、様々な場所での読み聞かせ、自らが企画したおはなし会等、開催可能です！



<活動例>

「川島久美子氏講演会「子どもと本を結ぶあなたへ」 ～大人のためのちょっといい時間！～」

この講演会では、受付や開会行事の司会、午後の交流会の班別のファシリテーターなど、講演会の運営をしました。学生にとって、川島久美子氏の話はとても感動的で、今後の読み聞かせ活動の基礎になるものでした。また、午後の交流会では、計画的に読み聞かせ活動をしている社会人の方たちの考え方や悩み、活動内容を聞くことが出来て、とても有効な交流会でした。



～読み聞かせボランティア活動～

大学の学習支援ボランティアの講義の中で「読み聞かせ」の講習を受けた学生たちを中心に活動しています。毎月第2土曜日に2時間の勉強会を行い、自分たちが読んだ絵本やお薦めの絵本を紹介したり、絵本への想いを語り合ったり、また絵本の評論などを読み合うなどして勉強を続けています。

実際の活動としては、大分市の府内子どもルームを中心に、公民館や小学校、育成クラブなどで、絵本の読み聞かせをしています。「子どもルーム」や「公民館」での読み聞かせは、土曜日ということで平日に比べて参加者は少ないですが、お父さんに連れられたお子さんたちもいて、緊張しながらも楽しい時間を過ごしています。

3) 別府市出身の学生による、後輩の小中学生の学びを支援する「コネクト」

平成26年の2月から、別府市の小学校や中学校への学習支援を行っています。学習支援を行っている大学生は、別府出身の大分大学の学生が中心ですが、このサークルの活動に賛同した大分市の学生も参加しています。「同じ別府市で育った後輩である子ども達の成長に、私たちが携わることで何か子ども達に良い影響を与えられたら・・・。」という思いがサークルの発足に繋がりました。小学生や中学生時代に気づけなかったことなど、今になって「そう一か・・・」と思うことなど、子どもたちと関わりながら伝えていきたいと願っています。

サークル名は「コネクト」。この「コネクト」という名前には、「人と人との繋がりを大切にしていきたい」という思いを込めました。学習支援といっても、勉強を教えるだけではなく、子どもたちと一緒に遊ぶことで思いやりの心を育てたり、私たちの子どもの頃の遊びを教えたりと、勉強や遊びを通して友達の大切さや、別府の素晴らしさなど、様々なことを子ども達に伝えることを目標にしています。

<別府市立朝日小学校放課後児童クラブでの活動>

幼稚園生から小学校5年生までおよそ60名の子どもたちが、指導員の方々と一緒に放課後と土曜日に活動しています。活動内容は、チャレランやドッチビーなどのゲーム、音楽を楽しむ演奏会、読み聞かせ、クリスマスカードづくり、楽しい算数ゲームをとおした学習支援などです。その一部を報告します。

○チャレラン

私たちは、活動の一環としてチャレンジランキング（略してチャレラン）というものを行いました。チャレランとは、身近にあるものを使った簡単な遊びに挑戦し、記録を競うゲームのことです。以前まではコネクトが単独で企画していたのですが、同時期に地域の方々もチャレランを企画していたことを知り、一緒にしようということになり、地域の方々と一緒に体育館でチャレランを実施しました。最高記録を出した子には、賞品があり、参加してくれた子どもたち全員に参加賞もありました。



チャレランの目的：単に遊ぶのではなく、記録をつけることで子どもたちに達成感を味わってもらったり、「時間内に箸で何個の豆が隣のお皿に移せることができるか」「どれだけ高く空き缶を積み上げることができるか」のゲームでは集中力を高めたりすることである。

○ドッジビー

社会人のボランティア団体の方々による主催と企画で、体育館でドッジビーというゲームを行いました。多くの子どもが悪戦苦闘していましたが、なかには体育館の端から端まで飛ばせる子もいました。飛距離の長い子にはちょっとしたご褒美がありました。社会人の方々がどのようにして子どもたちと接しているかを間近に見ることができた反面、子どもたち（特に低学年）を一行に並ばせることに時間を要し、社会人の方が賞品を渡す時に騒がないようにすることに手間がかかりました。

ドッジビーの目的：異年齢の交流を目的としているのではないかと考えられる。（特に練習の時）また、普通の遊びではない遊びをすることで子どもの興味をわかせる。

○読み聞かせ

読み聞かせは、幼児・小学1年生、2年生、3年生、4年生、5年生、6年生に対して、大学生がそれぞれに合った本を選びました。幼児・1年生の人数が特に多く、すぐに騒ぎ始めていたので、落ち着かせるのに苦労しました。他の学年は人数が比較的少なく、とても集中して大学生の朗読を聞いていました。

読み聞かせの目的：最近の子どもたちは本離れが進んでいるため、私たちが読み聞かせることで、本に親しみや興味を持ってもらうことである。

<別府市立石垣小学校での活動>

現在では、算数が苦手という児童が増えています。そのため、どうすれば子どもたちが苦手意識を持たずに算数に取り組めるかといったことを研修会に行き学んだり、研修会の中で、実際に児童たちの立場に立って算数ゲームに取り組んだりしました。

長期休業中の学習支援と、月2回（水曜日）の学習支援をおこないました。別府大学の学生も応援してくれて、4年生の子どもたちへの学習支援でした。

成果として一番大きいのは、全員が、学級担任が感じている学習困難児童でしたが、個々の困難状況は異なっても今回の学習支援活動で下記のような大きな成果がありました。

児童の感想：放課後学習教室に参加して、勉強のことで良かったことはありますか？

＜ある：10名　　ない：0名

- ・家で宿題を進んでできるようになった。（9）名
- ・分からなかったところが分かるようになった。（7）名
- ・集中して取り組めた。（6）名
- ・算数が好きになった。（2）名
- ・授業が楽しくなった。（5）名

このように、学習意欲へのきっかけとなって、今後の学習へとつながって欲しいと願っています。



また、指導者した学生への効果も大きく、子どもと素直に接せることで様々な成長があったようです。

最後に今後の課題と方向性についてです。現在、コネクトの活動では、参加回数に個人差があるため、活動を通して得られる成果や学びを得る機会に個人差が生じていることが第一の課題として挙げられます。次に、参加人数が少ないことから活動が中止・延期されることがあったことが第二の課題として挙げられました。今後の方向性については、先ほど挙げた課題の解決に取り組むことを最前提として、活動にできるだけ全員が参加できるようにこれまで以上に日程調整やボランティア先の方との密な連絡などを行いたいと考えています。また、メンバー1人ひとりが活動内容を理解し、活動の目的を考えながら実施するようにしていきたいと思います。それから、現在では学習支援やアウトリーチの活動を中学生へ向けての活動を行っていないので、他の活動でも中学生に向けた活動を行いたいと考えています。

現在コネクトでは別府市の児童・生徒への活動を行っているのですが、大分市にも拠点を広げることができたらいいなと思っています。まだまだできたばかりのボランティアサークルですが、メンバー全員でがんばっていききたいと思います。

(4) 大学教育と生涯学習の接続・連携

1) 生涯学習・社会教育に関する授業の実施（教養教育）

【生涯学習論入門】

生涯学習に関する基本的理解を得、大学の授業なども含めて自分の学習を経営し、展開するための視点を獲得することを目的として、生涯学習に関わる諸側面を講義した。平成25年度より大分県子ども子育て支援課との連携により、授業の中の2回分（5月23日と30日）を「ライフデザイン講座」として地域講師を活用して実施した。NPO法人アンジュ・ママンの小川由美氏が地域での子育て支援の立場から、おおいたパパクラブの大西正久氏が子育てでの父親の積極的な役割について、どのようなライフデザインを持ちつつ取組を行っているかを話して頂いた。学生達にとってはまだ遠い将来の話として興味を持ちにくいのではないかと危惧していたが、講師陣の迫力のある話しぶりに思いの外高い関心を持ってくれた。

【成人教育方法入門】

人格が確立した成人への教育の方法について、ファシリテーターの育成という観点から演習と講義をした。

【学習ボランティア入門】

きつちよむフォーラムで学生から要望があったボランティア活動を単位化する授業として、ボランティア活動を中心とした授業であり、その構成は次のとおりである。

①講義：4時限（授業趣旨、学習ボランティアの意義・心得等）

②活動：9時限（13時間以上）

※実際に地域へ出かけて子どもや高齢者等に関わるボランティア活動を行う。

③振り返り：2時限（ボランティア報告会とまとめ）

【大学開放論—社会人の学びと大学生の学び—】

全国国立大学生涯学習系センター協議会の取り組みの一環として刊行した『大学開放論—センター・オブ・コミュニティ（COC）としての大学—』をテキストとし、大学開放について論

じるとともに、その中で自分がどのように大学を利用して学ぶかについてグループワークなどを通して考える授業とした。「大分大学活用方法の提案」、「大学在学中の目的目標と取り組み」などをグループで検討し、交流した。

2) 本学及び学部の授業・講習との接続

【大分の水Ⅰ】 【大分の水Ⅱ】

これらの科目は、平成 21 年度選定大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進—学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践—」（以下水辺 GP と略記）の取組として行われている授業科目であり、水辺 GP の事務局員である岡田が関与している。具体的には、【大分の水Ⅰ】および【大分の水Ⅱ】では、週末に行われる地域体験活動プログラムのコーディネーターや運営（国東市来浦地区、竹田市岡本地区、九重町セブンイレブン記念財団九重ふるさと自然学校など）を行い、あわせて環境学習や川端（かばた）に代表される自然共生型のライフスタイルについて講義をおこなった。教室では意欲が高くない学生であっても、現地で地元の人からの指導を受ける際には意欲的な姿勢を見せる傾向があり、想定以上の効果を得ることができた。

【教師学】（複数教員）

1 年生の「教師学」は、平成 22 年度からのカリキュラムの再編成で始まった科目で、教員免許取得の必須で、教員としての学びを計画付ける導入科目として設定された。求められる教師像を探る中で、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から社会教育との連結という視点での指導をおこなった。

【教職実践演習】

教員免許取得の最終科目である 4 年生後期の必須科目であり、大学 4 年間の学びを検証し、教員としての力量を確認する。事例研究、ロールプレイ、学級経営、模擬授業の 4 つで構成され、それぞれ演習を通して教員としての資質を確認し、最終の学修をする科目である。高校教員を目指す経済学部の 2 名の学生を担当した。

【教員免許更新講習】

中川が現職の教職員の免許更新講習において、必須科目である「専門職たる教員の役割」の講座（4 コマ）及び、その講義内容をさらに演習等で深める「社会教育と学校教育の連携」という選択科目（4 コマ×2 回）を担当し、学校教育を行う教員の役割に加え、それを更に充実するための社会教育との連結という視点での講義をおこなった。

また、岡田が選択科目「学校と家庭、地域の協働方策—子育てを手がかりに—」（4 コマ）を担当した。学校と家庭、地域が協働するための方策について、主として子育てに関わるという部分に焦点化して講義した。続いて、大分地域で子育て支援を行っている「子育てネットワークおおいた」の 2 名のメンバー（宮崎、村田）とともにパネルディスカッションを行い、地域で起きている子育ての課題を具体的に検討した。最後にグループワークにより協働に向けた行動計画の策定をおこなった。

3) 文部科学省事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の教養科目授業 【「中小企業の魅力の発見と発信」—インターンシップセミナー A—】

「中小企業の魅力の発見と発信」授業プログラム3年間の授業実践からの報告

本実践は、学生のキャリアデザインの基礎的な力を学ぶための教養教育の授業を有効的に実施するための一つの方策の提案として、カリキュラム構成の研究と社会人基礎力の育成等の二つの観点から、評価を通して報告するものである。平成24年度からの文部科学省事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」における三年間の授業実践である。

1. 授業のねらい

本授業は、中堅、中小、ベンチャー企業等との連携を密にしてインターンシップ（就業体験）を行うものであり、講義・職場体験・取材活動・企業の魅力発信の4つで構成している。定められた履修認定期間のみでなく、事前・事中・事後も自主的な学びを行う等してインターンシップを効果的に行うことにより、進路選択等の視野を拡大し、自分自身の将来についてキャリアをデザインしていくための実践的な学びをするものである。未だ職業に関心の無い学生も含めて、単にインターンシップということではなく、4つの学びを通じたキャリアデザインの基礎的な力を学ぶものである。

2. 具体的な到達目標

- ①授業を通して身につけることができる社会人基礎力（別途評価資料）を有する。
- ②十分な学びの足跡（活動、成果、自己評価、他者評価等）として記録し、職業選択に関する基本的な考え方を、職業と関連づけながら自分の生き方を他者に説明できる。
- ③「職場の魅力、職場の楽しさの重要性、人とのコミュニケーションの大切さ」に関する気づきを職場体験の関係者・他の受講生との交流エピソードをもとに他者へ説明できる。
- ④魅力発信に必要な素材を適切に収集し、受け手に配慮したメディアを制作できる。

3. 授業の概要

①集中講義

1年次：平成24年2月20日（水）～3月8日（金）

2年次：平成25年8月20日（火）～9月13日（金）

3年次：平成26年8月20日（水）～9月12日（金）

②対象学部：全学部（教育福祉科学部・経済学部・工学部・医学部）

対象学年：1年生・2年生

受講生数：H24・19名、H25・13名、H26・7名

4. 授業実施に係る協力依頼先

- ①大分県中小企業家同友会
- ②キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会

5. H26年度の授業展開

(1) 事前準備

- ①6月に掲示及び授業で受講者案内をする。
- ②6月25日（水）・26日（木）の昼休みに説明会を行う。（どちらかに参加すること）
- ③職場受け入れ先一覧から、体験先を選択するためにHP等で業務内容等を調べて決める。
※2～3人グループを作り、リーダーを決めて進める。

※7月3日(木) 17:00まで決める。(早いもの優先)

→研究室へ来る, 又は電話かメールで体験先の希望を連絡する。

TEL: 097-554-6027 E-mail: nakagawa@oita-u.ac.jp

④7月4日(金) 17:00までに履修届を提出すること。

→中川教授あてに別紙「履修届」を出す。

→研究室へ来る, 又は電話かメールで体験先の希望を連絡する。

⑤各グループで受け入れ企業へのお願いの挨拶・事前打合せをする。

(7月14日<月>~16日<水>)

・基本は自分たちで通勤するので, 通勤に関するアドバイスをもらって, 職場体験先との日程等を決定してよい。

→決まり次第中川へ報告。(最終報告期限は7月17日<木>)

(2) 授業計画

1) 講義(8月20日<水>・21日<木>) ※社会人基礎力事前調査

講義1日目(8月20日<水>)

①大学教員等による事前指導講義: 1時間目

②キャリアデザインとインターシップに関する講義: 2時間目

③ポスター等作成の目的と手法の講義: 3時間目

講義2日目(8月21日<木>)

④中小企業家同友会派遣講師による中小企業

に関する講義: 4時間目~5時間目

⑤職場体験での学びと取材の目的協議・打ち合わせ:

6時間目及び時間外

※講義から得たことについての実質的な学びをするための活動目的・内容の整理をするので, 打合せ内容の整理をしておく。

2) 職場体験(8月26日<火>頃~9月5日<金>)

中小企業家同友会斡旋先企業: 7時間目~11時間目~時間外

① 1企業あたり参加者数, 2~3名

② 3日程度の職場体験(製造・運搬・販売等)

③ 半日~1日の取材

※体験企業の魅力について, 就職活動をしようとする大学生にPRするポスター・プロモーションスライド等の作成をするための映像撮影やインタビュー等の活動を行う。

※取材計画, ナレーション, 絵コンテ, ポスター構想を作成しておく。

3) メディア作成とまとめ(9月9日<火>): 12時間

目~15時間目(1時限~4時限)

外部講師(NPO法人等)によるメディア作成



- ① ポスター・プロモーションスライド等の作成
 - ② 社会人基礎力事後調査と総括
- 4) 成果発表会（評価）
- （9月12日<金>10:00～12:30）
- ① 作成したメディアを使った報告
 - ② グループディスカッション

(3) 時間外学習

- ① 職場体験の目的・内容や取材目的・取材内容の整理
- ② 職場資料の整理と発信準備
- ③ ポスター又はプロモーションスライド等の完成

6. 社会人基礎力の育成への効果の検証

授業開始時と終了時に同じ項目で調査し、効果の大きい項目を考察ものである。

(1) 意識の変容度

意識の変容が比較的大きく見られた＝成果と考えられる項目は以下。

- ◆自分の好き・嫌いがわかる
- ◆自分の得意・苦手がわかる
- ◆自分の価値観がわかる
- ◆社会に様々な個性の人がいることがわかる
- ◆職業・企業を知る必要性がわかる
- ◆社会に求められる力がわかる
- ◆大学での学びの関係性がわかる

事前学習「キャリアデザイン入門」にて、「人はなぜ働くのか?」「一生働かなくていいほどお金があったとしたら働くか?」という問いかけをしているが、これが「働くこと」や「自身の価値観」を見つめる契機になっていたと考えられる。また、客観的に自身を見つめたことから、自身に足りないこと、今後の大学生活の中で身につけるべきことに気づくことができたのではないかと考えられる。

(2) 行動の実現度「前に踏み出す力」

事前と事後で実現度に変化が大きかったのは、以下の項目。

- ◆自分なりに判断し、他者に流されずに行動する
- ◆協力することの必然性を伝える
- ◆効果的に他者を巻き込むための手段を活用する
- ◆粘り強く取組続ける

(3) 行動の実現度「考え抜く力」

変化が見られたのは、以下の項目。

- ◆成果イメージを明確にし、すべきことを把握する
- ◆他者の意見を積極的に求める

考えられる背景として、制作するメディアを基本的にはポスターにすると絞り込んだことから、成果イメージを明確に持てたのではないか。また、制作プロセスにおいて、客観的な視点からのアドバイスがあったことで、他者の意見の効果を感じられたのではないか。

(4) 行動の実現度「チームで働く力」

事前と事後で変化が見られたのは、以下の項目。

- ◆自分・他人ができることを判断して行動する
- ◆ストレスを一時的に緩和する
- ◆ストレスを重く受け止めすぎないようにする

<データ分析者の考察>

特に以下の感想が印象的である。

- 一番は、働くことに対する恐怖がなくなりました。仕事というのは、もちろん利益も大切ですが、楽しむのが一番です。そのためには、たくさんの人たちと関わらねばならない。そして、仕事を楽しめるだけの器がなければならない。そう感じた。
- 周囲からどう思われて、それに対してどう動くか、ではなく、自分がどう考えてどう動くか、ということ学んだ。今回だと、他人から変な目で見られたくないから働くのではなく、自分がやりたいから働く、ということだった。
- 3日間という短い期間でも、自分の感性をガラリと変えることができるということを実感した。

以下、本授業の分析をおこなう。

◎インターンシップ前の“意識づけ”

インターンシップの事前学習として、どのような意識づけを行うかで出てくる成果が異なる。特に、自身の「現時点での」価値観について客観的に把握することは、インターンシップでの経験を、自身の価値観や現状と比較して評価できる力につながっているのではないか。

◎関わる大人（講師・受入先）の関わり方

関わる大人（講師・受入先）がどのようなスタンスで学生に関わり、メッセージを発信したかが、学生の変化に大きく影響している可能性は否めない。

今後のインターンシップの継続に向け、以下のような項目を整理していく必要はある。

- ・受入先企業の選定基準
- ・受入先での体験内容（何を依頼するか）

例) 企業の顧客にできるかぎり直接出会う体験をさせる

受入先の方は「上司」役を担っていただき、日々の目標設定とふりかえりを行うなど

7. 考察と提案

残念なのはこんなに良い授業なのに受講者が少ないこと。「夏休みにこんなことするよ！」と友達に話すと「それ受けたかったのにポスターに気づかなかった」という人もいた。もっと積極的に人を集めたり、後輩たちにもこの授業の良さを発信したりしたい、という学生の声があった。授業者としては様々な手段で広報したつもりであるが、学生へは届いていなかったことを反省している。

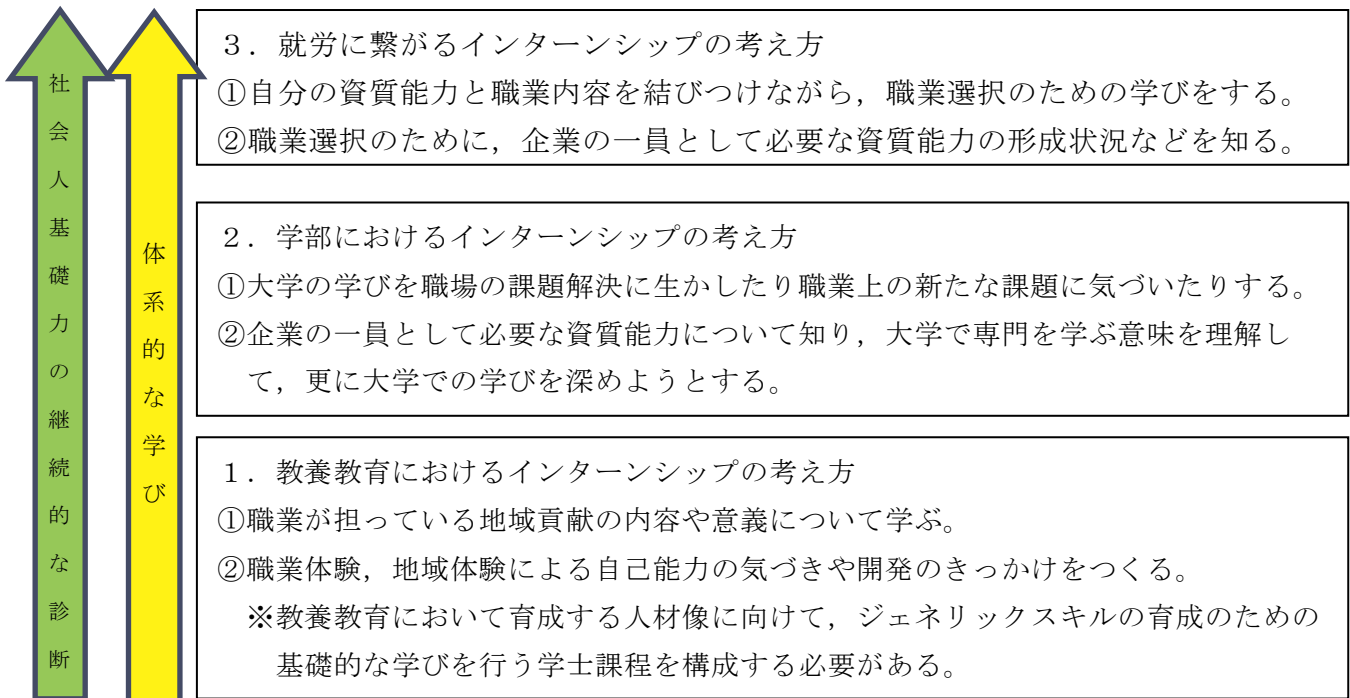
「社会人基礎力の基礎」の形成のための教養教育科目としての効果が検証できた。しかし、「その効果は気付きの範疇でしかないのではないか」という捉えをしている。さらに、そのための基本的なカリキュラムや連携体制が整ったことで、今後、本授業の効果を多くの学生へ提供し、学部のインターンシップや就労に繋がるインターンシップとの体系的な学びのシステムをつくることが重要であり下図のような構想を提案したい。

キャリア形成に関するインターンシップの構想

※参考資料：文部科学省資料（経済産業：「社会人基礎力」として示している）

	4領域	8能力	
①	人間関係形成能力	①自他の理解能力	②コミュニケーション能力
②	情報活用能力	①情報収集・探索能力	②職業理解能力
③	将来設計能力	①役割把握・認識能力	②計画実行能力
④	意思決定能力	①選択能力	②課題解決能力

大学の目標：地域社会の価値・課題と向き合いながら、地域の未来を切り開くコア人材



高校の目標：「働くこと＝社会参画・社会貢献である」という確かな職業観を育み、主体的・自立的に学び続け、自らの進路を切り開く人材

【プロジェクト型学習入門1～インターンシップセミナーB～】

大学で学ぶ力を付けさせるため、また社会人として必要な力の基礎を修得させるため、プロジェクトを自ら企画し、実行することで、企画力，提案力，コミュニケーションスキルなどの向上を図っている。今年度は，前期の授業で「大学生協新商品開発（もぐもグローバルフェア）」と東日本大震災支援のための「ふれあいバザー」，地域の農業の実態を調べ電柵張りなどの作業を体験した「地域の農業」の3テーマで活動が行われた。後期の授業では大分地域若者サポートステーション（多々良友美氏が外部指導者として関与）が開発した「キャリアすごろく」をもとに，大分大学生協専務理事南條晃氏の指導を受け，「大分大学すごろく」を作成した。

(5) 情報収集提供・学習相談活動

1) 情報収集・提供

○平成 21 年度末に本センターホームページの生涯学習関連をリニューアルしたHPを活用して、年度当初には年間計画を掲載すると共に、年間を通して各講座等の詳細情報とその実施報告の日常的な更新をした。

＝大分大学高等教育開発センター生涯学習関連ホームページの構成＝

概 要：①生涯学習支援の概要 ②年度事業計画 ③研究資料 ④生涯学習情報
県民の皆様へ：①公開講座の紹介 ②公開授業の紹介 ③各種学習機会の紹介
学生の方々へ：①ボランティア情報 ②学習ボランティア申し込み ③学習支援
お問い合わせ

○平成 25 年度に、県内の様々な青少年の育成に係る情報を一元的に提供する「おおいた『協育』ポータル」を開設した。

＝「おおいた『協育』ポータル」の構成＝

- ①大分大学の窓：大分大学高等教育開発センターが担当する研修事業・活動情報の提供
- ②活動情報の窓：大分内外の研修・イベント情報の提供
- ③学びの窓：「協育」の推進に関する資料の閲覧・ダウンロード
- ④組織・団体の窓：国・県・団体等の情報へ繋ぐ

4 つの窓から、県民へ「協育」の推進に関する情報を提供するサイトとして情報提供をおこなった。

○紙媒体の情報提供については、ホームページで公開講座・公開授業の受講者募集や公開講座の授業・活動風景を含めた活動状況の報告などに加えて、公開講座・公開授業パンフレットを前期、後期別に 2 回作成して、大分市を中心に配布したり、センターが主催する各種講座については別途チラシを作成して事業ごとに募集したりするなどして広く県内全体への広報をおこなった。また、平成 23 年度からの取組としては、公開講座・公開授業の広報を新聞チラシに挿入しての配布を行うなどして、幅広く広報を行って情報の広がりを図った。

2) 学習相談

社会人の学習活動へのアドバイスや学生の授業や卒業論文、就職活動等の生涯学習に関わる内容について、資料を提供するなどして相談活動をおこなった。

(6) 学内のネットワーク化

1) 部門会議の実施

年度当初の年間実施計画の協議、後期における各種取組計画等について、部門長から提案して審議するとともに、個別の案件については、関係する部門委員に相談するなどして生涯学習関連の取組の充実を図った。

2) 生涯学習支援に関する教員のネットワーク化

公開講座の実施については、各学部の計画での実施や教員が自主的に実施するなどのシステムがある。さらに、大分水フォーラムを通じた連携やセンターが各課題に対応する講座、市町村と連携・協同で実施する講座・調査研究においても一定のネットワークが出来ている。そうした中、平成 25 年度から「とよのまなびコンソーシアムおおいた『連携講座』」の「豊の国学」の実施にあたって、各学部から 1 名の講師を選任するシステムができ、学部から選任された教員が「中央講座」と「分野別講座」の専門分野での講義をおこなった。

(7) 地域生涯学習支援システムの整備

本センターの役割として、県民の生涯学習を支援するシステムづくりや、その中で重要な役割を果たす社会教育関係職員、指導者・ボランティアなどの力量の向上に取り組むことで、間接的に地域住民の学習を支援することが重要であることから、そうした連携のシステムをとおしての地域貢献を行うために次の取組をおこなった。

1) 生涯学習支援ネットワーク化の取組

①県及び市町村教育委員会とのネットワークづくり

県教育委員会社会教育課や県立社会教育総合センターと、個別の施策に関する打ち合わせ会を実施するなどして、連携を深める取組をおこなった。さらに、本センターが実施する各種取組について市町村事業と協同で実施するなどして市町村との日常的な連携を取りながらネットワーク化を図った。

平成 25 年度から開始された県立社会教育総合センターの「おおいた学びの輪」推進事業「ふるさとサポート講座（地域づくりサポート）」では、講座受講がゴールではなく取り組みのスタートや継続・発展につながるよう、26 年度についても実際の取り組みの企画と運営について継続的な支援を行った。その結果、地域のミニコミ紙の発行や郷土史のインタビューによる掘り起こしなどで具体的な進展を確保することができた。

②県内高等教育機関のネットワーク化

「とよのまなびコンソーシアムおおいた」の生涯学習関係事業（連携講座）において分科会を行う中で、各学校の現状を把握するとともに担当者との意思疎通を図ることができた。さらに、「豊の国学」としての体系的な講座を提供するシステムが出来上がった。今年度は、大分県教育庁との連携の一環として、県立社会教育総合センターの「ふるさと学」講座ととよのまなびコンソーシアムの「豊の国学」との合同での講座を開催することができた。

＝豊の国学講座の概要＝

「とよのまなびコンソーシアムおおいた」で実施する「豊の国学」中央講座を、県立社会教育総合センターと共催して「ふるさと学・豊の国学ジョイント講座、リレー講演会」として開催した。

【日時】平成 27 年 3 月 8 日（日）〈受付 12:30〜〉 13 時開会 17 時閉会

【会場】ホルトホール大分 201 会議室（大分県大分市金池南一丁目 5-1）

[文化] 大分県の中の朝鮮半島 <講師：別府溝部学園短期大学学長 溝部 仁>

宇佐八幡宮の出発点ともいわれる御許山と朝鮮・中津大貞八幡宮と朝鮮との関係や宇佐八幡宮最大の祭祀である行幸会と朝鮮について学ぶ。

[文化] 世界から見た国東半島ー日本の世界農業遺産

＜講師：立命館アジア太平洋大学助教 VAFADARI MEHRIZI, Kazem＞

国東半島での農業は、2013年5月に次世代に継承すべき伝統的農業システムとして、「世界農業遺産」に認定され、世界の農業遺産と国東を比較しながら資源循環の文化を再活性化する重要性について学ぶ。

[産業] 大分県救急医療体制ー地域格差是正の切り札！ドクターヘリによる広域救急医療体制と医療圏連携ー

＜講師：大分大学准教授 石井圭介亮＞

大分県においては、著明な医療の地域格差を是正するため、救急医療体制の構築を計画・実行してきた。急激に変化を遂げる医療現場より、ドクターヘリによる広域医療体制と医療圏連携について学ぶ。

[産業] 大分のイメージと観光

＜講師：日本文理大学准教授 廣田篤彦＞

県外から見た大分のイメージや、他県の観光や開発の事例を比較・分析することにより、大分の観光と将来の方向性について考える。

[文化] 大分の科学啓蒙活動と科学館

＜講師：大分工業高等専門学校教授 工藤康紀＞

大分県では様々な『科学啓蒙活動』が行われており、それらのいくつかを紹介し、「青少年のための科学の祭典大分大会」も紹介しつつ、大分にはいわゆる『科学館』がないことの現状を学ぶ。

＝分野別講座＝

【第1回～豊の産業講座～】

日時：平成26年9月7日（日） 13：30～16：45

会場：ホルトホール大分2F サテライトキャンパス大分 講義室

① 大分の特許情報解析

＜講師：大分工業高等専門学校講師 野中尋史＞

現在、当研究室では、文書を解析する技術であるテキストマイニングを利用して、400万件の特許データを解析し、特許文書の重要性や地域イノベーション力の評価を行う手法の開発研究を進めている。大分県に着目する形でデータの解析結果を学んだ。

② 大分の産業と企業行動

＜講師：大分大学教授 松隈久昭＞

大分県内の産業と元気な企業の行動について紹介し、企業行動については、マーケティングの視点から学んだ。

【第2回～豊の文化及び自然講座～】

日時：平成26年9月27日（土） 13：30～16：45

会場：ホルトホール大分2F サテライトキャンパス大分 講義室

① 大分で採れる天然の染色材料

＜講師：大分大学准教授 都甲由紀子＞

大分で採れる天然の染色材料にはどのようなものがあるかご存じでしょうか？天然染料の紫根、サフラン、葛、ウメノキゴケはもちろん、湯の花は天然の媒染剤になり、それらについて学んだ。

② 大分で今求められる防災・減災

＜講師：大分大学准教授 小林祐司＞

震災から3年が経過し、全国では様々な活動が展開されており、今日求められる防災と減災のあり方、我々の姿勢について、ひとつづくりとまちづくりの視点からあらためて学んだ。

2) 市町村・団体等との共同・連携事業※他のページで報告

- ①<「協育」見本市>第8回 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会
(東国東地域デザイン会議)
- ③「川島久美子氏講演会『子どもと本を結ぶあなたへ』～大人のためのちょっといい時間!～」
(NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット)

3) 支援団体等の活動

①NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動

事業1. 指導者養成事業(連携事業)

○マネジメント力向上研修事業

※別府市が受託した文部科学省事業への企画・運営へ参画

○「協育」アドバイザー養成講座

※大分大学高等教育開発センターが実施する研修事業への企画・運営へ参画

事業2. 「協育」プログラム開発事業

○研修会・協働事業等によるネットワークづくり推進プログラムの開発

・人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい(結い)の育成

第1回研修会開催 H26年11月30日(日)

第2回研修会 H27年 3月29日(日)

・大分大学学習ボランティア「フォーバル」の研修事業

※学生読み聞かせボランティア「ゆい(結い)」の育成(11回)

4/12 5/10 6/14 7/12 8/9 10/11

11/8 12/13 1/10 2/14 3/14

○第8回 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会への企画・運営へ参画

事業3. 「協育」実践事業

○読み聞かせ活動支援研修会(大分大学高等教育開発センターとの共催)

・川島久美子氏講演会の開催(H26年10月26日(日))

※読み聞かせ活動を行っている方々の研修とネットワーク化・読書支援ネットワークづくり

②大分県『協育』ネットワーク協議会

○第8回 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会への企画・運営へ参画

○大学教養教育授業への支援活動

○NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動への支援活動

(8) 生涯学習推進と社会的活動の取組

県及び市町村教育委員会生涯学習行政等と連携して、生涯学習・社会教育に関する調査研究の成果を普及・還元するとともに、本センターが持つ各種情報等を生かした生涯学習の推進とともに、センターとしての社会的活動による地域貢献の取組をおこなった。

1) 県教育委員会生涯学習・社会教育行政との連携

＝生涯学習・社会教育事業＝※再掲

「とよのまなびコンソーシアムおおいた」で実施する「豊の国学」中央講座を、県立社会教育総合センターと共催して「ふるさと学・豊の国学ジョイント講座、リレー講演会」として開催した（平成27年3月8日）。現在、「豊の国学」と「ふるさと学講座」との連携についても、受講者の視点からの連携を進めるなど、今後の連携内容についても協議をおこなっている。

＝生涯学習関係者研修事業＝

教職員研修，コーディネーター研修，おおいた学びの輪推進事業「ふるさとサポート講座」「おおいたっ子サポート」事業におけるスーパーバイザーとして支援を行いつつ，研修会の講師やファシリテーターとしてセンター教員2名が担当した。

＝委員等への就任＝

【県教育委員会社会教育課関係】

【県立社会教育総合センター関係】

○おおいた学びの輪推進「おおいたっ子サポート」事業におけるスーパーバイザー（中川）

【大分県関係】

○大分県協働推進会議委員長（岡田）

○大分県青少年健全育成審議会副委員長（岡田）

○おおいた共創応援基金理事（岡田）

○大分県シニア・リーダーカレッジ講師（岡田）

2) 市町村教育委員会生涯学習行政との連携

＝生涯学習関係者研修事業＝

○大分市南部公民館「おやじの夜なべ談義」コーディネーター（大分市：岡田）

○コミュニティ・スクール導入に関する研修事業（豊後大野市：中川）

○新たな地域コミュニティを考える会（由布市：岡田）

○由布市社会教育振興大会（岡田）

＝委員等への就任＝

○由布市指定管理者選定委員会委員長（岡田）

○大分市あなたが支える市民活動応援事業選考委員会委員長（岡田）

3) 国，都道府県，団体，機関等との連携・支援

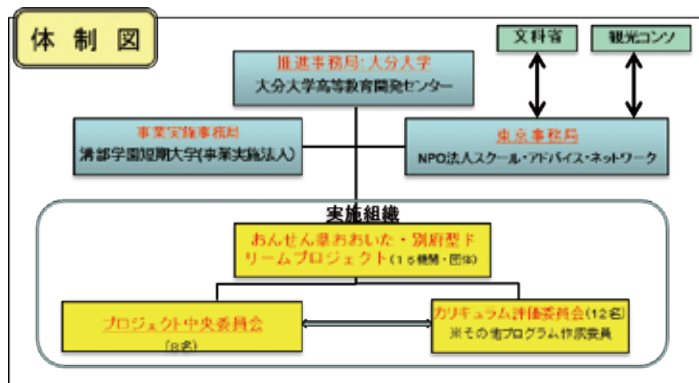
【文部科学省事業】

①平成26年度文部科学省委託事業「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」

「おんせん県おおいた・別府型ドリームプロジェクト」事業概要

※詳細はおんせん県おおいた別府型・ドリームプロジェクト作成の報告書参照

平成26年度文部科学省「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」の2年次を、推進主体である大分大学高等教育開発センターを中心にして、関係者による「おんせん県おおいた・別府型ドリームプロジェクト」を組織し、別府溝部学園短期大学における「温泉コンシェルジュ」養成の取組をおこなった。



本事業の目的は事業名のとおり、「社会が求める中核的専門人材の育成」を行う、高等教育機関の役割が問われるものであり、高等教育機関に求められる中核的専門人材を育成するための方策をモデル的に検証するものである。高等教育機関におけるキャリア教育カリキュラムの開発とその実証、そして、就業への繋がりが期待できるシステム作りが求められているものと考えている。そのためには、まちづくりや地域の活性化に課題を抱える行政や企業、地域活動を続ける組織・団体、さらに、高等教育機関や医療機関等の専門的領域の関係者が、その枠を超えて新しいテーマコミュニティを形成することが重要であるという考えを基盤にしている。

本事業において大分大学は「センターオブコミュニティ」としての役割を担う1つの事業として、別府市の活性化、さらに大分県が進める「おんせん県おおいた」の推進の一翼を担うために、大分県における唯一の国立系大学として中核的役割を担っている。こうした考えのもとに、本学高等教育開発センターがその事務局を担って本事業を中心的に推進した。



○事業内容

実証	授業の実証と映像化	<p>一年生科目の5科目の実証とカリキュラム内容・評価項目と方法・運営の検証</p> <p>①受講者等からのアンケート等の評価</p> <p>②授業者及び自己評価</p> <p>③授業DVDの作成</p>	<p>科目※授業変更後にカリキュラム修正</p> <p>①温泉コンシェルジュの基礎（15コマ）</p> <p>②別府の歴史と発展（15コマ）</p> <p>③まちづくりと景観（15コマ）</p> <p>④温泉学（15コマ）</p> <p>⑤おもてなし演習（30コマ）</p>
	啓発シンポジウム	<p>別府市内の行政，温泉，医療，旅館，観光，NPO等の関係者を対象としたシンポジウム</p>	<p>1. 時期：12月9日（火）</p> <p>2. 規模：100名程度</p> <p>3. プログラム<午後3時間程度></p> <p>①事業報告（事務局）</p> <p>②基調講演（角田陽子氏）</p> <p>③シンポジウム</p> <p>4. 会場：ビーコンプラザ</p>
調査	意識調査	<p>温泉コンシェルジュに求められるものについて調査</p>	<p>①調査時期：9月～11月</p> <p>②調査対象：①企業側 ②顧客側の両面からの調査</p>
教材作成	「おもてなし事典」の作成	<p>温泉コンシェルジュとして必要な用語・会話を日本語・英語・中国語・韓国語でまとめ，スマートフォン向けアプリを作成</p>	<p><構成></p> <p>1. （別府）温泉コンシェルジュって？</p> <p>2. （別府）温泉コンシェルジュが紹介する別府の魅力</p> <p>（1）写真で紹介する別府の魅力</p> <p>（2）発展の「歴史」から観る別府の魅力</p> <p>（3）「自然」「文化」「産業」「人」から観る別府の魅力</p> <p>3. （別府）温泉の知識（魅力）</p> <p>（1）別府温泉の特徴</p> <p>（2）温泉入浴のマナーと効果</p> <p>（3）温泉プールの魅力</p> <p>4. おもてなしに大切な用語</p> <p>5. 温泉コンシェルジュ養成へのご案内</p> <p><様式></p> <p>1. 言語：日本語・英語・中国語（簡体字および繁体字）・韓国語の計5字体</p> <p>2. 作成：スマートフォン向けアプリに掲載</p>



②＜別府市受託事業＞平成 26 年度文部科学省事業

「自律的・組織的な学校運営体制の構築に向けた調査研究」

※詳細は別府市教育委員会刊行の事業報告書を参照

「コミュニティ・スクール導入に伴うマネジメント力向上研修プログラム」作成事業

1. 趣旨

別府市では、平成 23 年度より市内全地区公民館にコーディネーターを配置した「別府市地域教育力活性化事業」を実施し、各学校において地域人材を活用した教育活動を展開している。さらには、平成 25 年度より CS 導入に向け、学校・家庭・地域が連携・協働できる組織・運営体制について、調査研究を行っている。そして、平成 28 年度には市内全小・中学校 23 校及び 1 園を CS に指定する予定である。

そのため、本事業においては、CS 導入に際し、質の高い学校づくりを目指すために、教職員や CS 推進委員会委員等のマネジメント力向上のために、研修プログラムの作成・充実に向けた取組を行うことをねらいとするものである。

(1) 別府市における教育課題

ア. 学力向上及びキャリア教育の推進

→地域にある大学や住民の学習活動への支援、ボランティア活動への協力、職場体験の受け入れ・指導など、地域からの積極的な支援活動が望まれる。

イ. 「いじめ」「不登校」「問題行動」の解消

→家庭や地域において放課後や休日等の児童・生徒指導體制（システム）づくりや、年間を通じた「安全・安心・環境浄化」の支援活動が望まれる。

ウ. コミュニケーション能力と体力の向上

→家庭や地域において日常的なコミュニケーションを図ることや、部活動・保健体育科授業への専門的指導者による支援活動が求められる。

2. 研修プログラムの概要

(1) 研修の観点

別府市における教育課題の中で、学校が担う教育課題に関して、教育の協働による課題解決に向けた CS の立ち上げと運営に関する研修をプログラムの作成と検証をおこなった。

(2) 研修会の計画

ア. 教頭及び CS 担当等の教職員研修

CS 導入のための学校の役割の基礎的な研修を行うとともに、運営に関するマネジメント力の観点に関する研修。

イ. CS 推進委員研修

CS 導入のための CS 推進委員の役割の基礎的な研修を行うとともに PDCA サイクルにおける運営への関わり（マネジメント力）に関する研修。

ウ. 教職員及び CS 推進委員合同研修

学校運営における PDCA サイクルの中で、教職員と CS 推進委員との連携・協働に関した熟議を中心とした研修。

エ. 学校で実施する「CS 推進委員会」の公開

C Sにおける「C S推進委員会」（熟議）を公開し、他校の教職員及びC S推進委員の研修の場とした。

3. コミュニティ・スクールに期待する学校（教職員）の現状・意識の調査

（1）事前調査の目的

本事業において、昨年度作成した「目指す学校・目指す教師」に関する意識調査を行い、地域教育力の活用内容を分析し、研修プログラムに活かす。

（2）事業終了時の調査の目的

平成27年度指定予定校と、平成26年度から調査研究校として実施する学校の全てを対象として、C Sの取組についての研修の活用（成果）に関する調査を行い、C Sに関する研修成果の検証と今後の研修に活かしていく。

【国・他県生涯学習関係者研修事業支援（主なもの）】

- 岡山県地域連携担当者講座（高校・特別支援学校）（中川）
- 広島県公民館等職員研修会（中川）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター公民館職員専門講座（岡田）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育主事専門講座（岡田）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成26年度社会教育主事講習B 特講「生涯学習の推進とまちづくり」「地域総合計画と社会教育計画」担当（岡田）
- 広島大学社会教育主事講習「大学と地域社会」, 「高等教育と生涯学習」担当（岡田）
- 福岡県社会教育委員研修（岡田）
- 九州公民館大会分科会助言者（岡田）
- 九州社会教育振興大会助言者（岡田）
- 全国子育てひろば大分大会助言者（岡田）

【委員等への就任】

- 大分県マリカルチャーセンター管理運営委員（中川）
- とよのまなびコンソーシアムおおいた生涯学習分科会長（岡田）
- 中国・四国・九州生涯学習実践交流会大分県実行委員（中川）
- 地域発「『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」委員及び事務局員（中川・岡田）
- 文部科学省生涯学習政策局社会教育課「公民館を中心とした社会教育活性化事業」審査委員（岡田）
- 子育てネットワークおおいた代表（岡田）
- おおいた水フォーラム事務局（岡田）

（9）調査研究及び刊行物

1) 家庭、学校、地域社会の「教育の協働」に関する調査研究

～コミュニティ・スクールにおけるコーディネート機能を中心に～※報告書5参照

1. 研究協力者

大分大学教育福祉科学部教授 山崎清男

大分大学経済学部教授 深尾 誠

2. 調査協力者

特定非営利法人 スクール・アドバイス・ネットワーク
広島経済大学経済学部准教授 志々田まなみ

3. 調査対象

平成18年度～平成22年度に指定された全国の公立小中学校 448校を対象として以下の要領で依頼した。

- (1) 調査時点 平成26年6月1日現在の取組の現状
- (2) 調査期間 平成26年6月1日～6月30日
- (3) 依頼・回答の流れ

○本センター→各学校長へ依頼→本センターへ回答（中川）

※各学校長は、返信用封筒（大分大学高等教育開発センター中川忠宣行）にて
アンケート用紙の返送

- (4) 回収校数 448校中 146校（有効数 143校）※無効：廃止2校 期限後1校

※有効回収率：31.9%

4. 調査内容に関する概要

- (1) コミュニティ・スクールへの調査に関すること

- ①学校に関する基礎事項
- ②コミュニティ・スクールに関する基本的な事項
- ③コミュニティ・スクールのP・D・C・Aサイクルに関する事項
- ④コミュニティ・スクールの運営に関する課題に関する事項
- ⑤コミュニティ・スクールの運営に関する予算に関する事項
- ⑥コミュニティ・スクールの実施にともなう成果と課題に関する事項

今回の調査から見てきたコーディネート機能とそれを動かすシステムについて以下のように整理し、提言する。

1. コミュニティ・スクールの取組は、単に「学校内の教育活動への支援」としてとらえるのではなく、子どもを中心として「学校が担うこと」「家庭が担うこと」「地域社会が担うこと」を総合的に考え、その重要なツールであると考えられる必要がある。そのことによって学校教育への過度の依存から脱却して、関係者が同じテーブルに着いた協働した教育活動（教育の取組）が生まれる。その取組がなされないままに「学校教育への支援」としてのコミュニティ・スクールの導入は、学校教育の多忙化や形だけのコミュニティ・スクールにつながる恐れがある。
2. コミュニティ・スクールの効果は大きいですが、それを現実として感じることによって、教職員と学校運営協議会委員が本気になると考えられる。特に、学校関係者は、「教職員だけでは対応が困難な課題」から目をそらさずに、地域の教育力を活用するという新たな手法の有効活用への意識改革が求められる。また、学校運営協議会委員は、地域の代表として教職員と共に地域の子どもの育てる中心の役割を担っていることの自覚が求められる。そのためには様々な研修や情報の共有を図りつつ、地域住民への啓発を進める取組が必要である。
3. コミュニティ・スクール専任のコーディネーターの配置は、取組の充実や成果とともに、教職員の仕事量の増加（多忙化）への対応にもなる。しかし、財政上で困難な状況の中で配置できていないコミュニティ・スクールが多い。よって
 - ①同様な目的で活動している既存の組織や事業との連携・協働

- ②コミュニティ・スクール内の組織・体制づくり
- ③他の目的で活動する組織との新たな協働体制づくり

などの工夫によって、コーディネート機能を位置づけ、運営協議会での協議事項が実行に移されるようなシステムを作る必要がある。

<目次>

第1部 調査概要

第1章 調査計画の概要

- 1. 研究の目的
- 2. 研究主体

第2部 調査データの整理と分析

第2章 コミュニティ・スクールに関する基本的事項の概要

- 2.1 コミュニティ・スクールに関する基礎的な事項
- 2.2 コミュニティ・スクールの組織・システムに関する基礎的な事項

第3章 コミュニティ・スクールのP・D・C・Aサイクルの概要

- 3.1 企画 (Plan) に関する事項
- 3.2 実施 (Do) に関する事項
- 3.3 評価 (Check)に関する事項
- 3.4 評価 (Act) に関する事項

第4章 コミュニティ・スクールの運営に関する課題

- 4-1 コミュニティ・スクールの運営に関する全体的な課題
- 4-2 コミュニティ・スクールの運営に関する予算

第5章 コミュニティ・スクールの実施の成果と課題

- 5.1 コミュニティ・スクールの実施による成果
- 5.2 コミュニティ・スクールの実施による教職員の課題

第6章 相関関係から見るコミュニティ・スクールの成果と課題

- 1. コーディネート機能との関係が想定できる項目
- 2. P D C Aサイクルにおける課題の比較
- 3. 各項目と関係する成果の比較
- 4. 教職員の仕事量の増加（多忙化）に関する比較

第7章 調査結果からのコーディネート機能の整理

2) 平成26年度文部科学省委託事業「学校と地域の新たな協働体制の構築のための実証研究」

(学校・家庭・地域の連携協力推進事業) ※報告書参照

別府市は、平成27年度、28年度の2年間で全ての小中学校をコミュニティ・スクールに指定するとして、現在、全ての小中学校に「コミュニティ・スクール推進委員会」を設置してその準備を進めている。本事業の中心的な別府市立石垣小学校は、平成26年度～27年度の2か年のモデル校として指定を受け、平成28年度から学校教育規則に準じるコミュニティ・スクールに指定されることになっている。本事業はコミュニティ・スクールを立ち上げる段階での具体的な取組の調査研究として実施した。まとめは以下の通りである。

1. コミュニティ・スクール運営協議会の設置に関すること

本事業とは直接の関係はないが、事業受託する前から、コミュニティ・スクール指定校の準備としての推進委員会の立上げを行っていた。これまでの「学校評議員」や「学校評価委員」又はPTA 役員がほとんどで構成する場合が多く、また、推進委員へのコミュニティ・スクールに関する学習機会が不十分でもある。推進委員会から運営協議会への移行も視野に入れて、委員の選任に関するマニュアル作りや委員研修、教職員への研修等、教育行政としての役割が大きいことがわかった。

2. コーディネート機能の設置に関すること

別府市は、学校支援地域本部事業の流れの中で、市単独事業として「地域教育力活性化事業」として、公民館にコーディネーターを配置して（各中校区）学校支援事業を実施してきた。このコーディネーターが全てのコミュニティ・スクールへの十分なコーディネートは不可能である。本事業で10月から週3日程度のコーディネーターを置いて、教職員のニーズの把握と、教育活動への地域からの支援、更には地域の組織・団体への啓発活動を行い、急激に「石垣小学校のコミュニティ・スクール」が広がったが、十分な理解と協力を得られるまでには程遠い段階である。しかし、IIで報告したように、教職員への啓発、地域の組織への働きかけ、具体的な支援活動等については、教職員ではできない、地域住民のコーディネーターとしての必要性が明確になった。今後、各学校へのコーディネーターの配置を進めることと、公民館に配置されているコーディネーターの協働システムを作ることが重要である。

3. 学校教育課題に対応したコミュニティ・スクールづくりに関すること

各学校の教育課題は共通部分とそれぞれの特性部分がある。どちらの課題であっても教職員のみでは対応困難な場合が多く、教職員の多忙化やメンタル面の課題へと繋がっている。こうした教育課題を教職員と学校運営協議会が共有することが重要であり、そのためには教職員の意識改革及び、学校運営協議会委員の研修と協働による取組が求められる。具体的には、実践事例で示したような教育課程内の活動への支援も豊かな教育活動づくりに有効であるが、更には、学習困難児童への学習支援の取組も、放課後学習や授業への学習サポーターの支援等も効果があることが紹介されている。さらに、地域社会での安全安心の取組や体験活動の推進は学校だけでは非常に困難である。こうした取組をおこなう学校体制、地域住民との協働システムを作っていくのがコミュニティ・スクールとしての方向性であると考えられる。

<目次>

I 事業の背景

1. 趣旨
2. 別府市における教育課題
3. 別府市立石垣小学校教職員の意識

II 事業の概要

1. ワーキンググループ協議の開催
2. コミュニティ・スクール推進委員会と学校の協働の取組

III 別府市立石垣小学校実践報告

1. 地域バンクの作成とネットワークづくり
2. 教育課程内の学習支援の事例

3. 学習困難児童の放課後学習支援の取組

IV 別府市内への普及

1. 別府市立石垣小学校コミュニティ・スクール「推進委員会」の公開
2. 別府市立朝日小学校放課後児童クラブへの普及
3. 「協育」カタログの充実

V 事業のまとめ

Ⅲ 付 録

1. センター関係諸規則

(1) 大分大学高等教育開発センター規程

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、大分大学学則（平成16年規則第8号）第7条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規程において「部局」とは、国立大学法人大分大学部局を定める規程（平成16年規程第14号）第2条第3項第1号に規定する部局のうち、事務局を除く部局をいう。

2 この規程において「部局長」とは、前項に規定する部局を掌理する者をいう。

(目的)

第3条 センターは、学内外の関係機関との連携の下に、高等教育および生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もっと大分大学（以下「本学」という。）における教育及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第4条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発に係る業務
- (2) メディア・IT活用関連に係る業務
- (3) FD・授業評価関連に係る業務
- (4) 大学開放推進関連に係る業務
- (5) 生涯学習支援システム関連に係る業務
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な業務

(部門)

第5条 センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発部門
- (2) メディア・IT活用部門
- (3) FD・授業評価部門
- (4) 大学開放推進部門
- (5) 生涯学習支援システム部門

(職員)

第6条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) センター員

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、本学の教授のうちから、大分大学学内共同教育研究施設等管理委員会（以下「管理委員会」という。）の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター次長)

第8条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故があるときはその職務を代行する。

- 2 センター次長は、本学の教員のうちから、管理委員会の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター次長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター次長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第9条 専任教員は、教育研究に従事するとともに、センターの業務を行う。

- 2 専任教員の選考は、管理委員会の議に基づき、学長が行う。

(部門長)

第10条 部門長は、センター長の指示を受け、第5条各号に規定する各部門をそれぞれ統括する。

- 2 部門長は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 部門長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター員)

第11条 センター員は、担当部門の研究開発、支援等を行う。

- 2 センター員は、本学の教員のうちから、部局長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第12条 センターの円滑な運営を図るため、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(専門委員会)

第13条 運営委員会に、業務に係る専門的事項について調査及び実施するため、専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会については、別に定める。

(事務)

第14条 センターに関する事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第15条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則（平成20年規程第8号）

- 1 この規程は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター規程（平成16年規程第134号）及び大分大学高等教育開発センター規程（平成17年規程第12号）は廃止する。

(2) 大分大学高等教育開発センター運営委員会細則

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この細則は、大分大学高等教育開発センター規程（平成20年規程8号）第11条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の円滑な運営を図るため、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの運営に関する事項
- (2) センターの事業計画に関する事項
- (3) 部門間の連絡調整に関する事項
- (4) その他センターに関する必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) センター次長
 - (3) 専任教員
 - (4) 部門長
 - (5) 各学部から選出された教員 各1人
 - (6) 大分大学学術情報拠点運営会議から選出された者 1人
 - (7) 大分大学地域共同研究センター運営委員会から選出された者 1人
 - (8) 研究・社会連携部長
 - (9) 学生支援部長
 - (10) その他センター長が必要と認めた者
- 2 前項第5号から第7号まで及び第10号の委員は、学長が任命する。
- 3 第1項第5号から第7号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する者がその職務を代行する。

(会議)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会の事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第8条 この細則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 (平成20年細則第3号)

- 1 この細則は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター運営委員会規程(平成16年規程第135号)、大分大学高等教育開発センター運営委員会規程(平成17年規程第13号)及び大分大学公開講座専門委員会内規(平成16年4月1日制定)は廃止する。

(3) 大分大学高等教育開発センター紀要刊行規程

平成20年10月10日制定

(趣旨)

- 1 この規定は、大分大学生涯学習教育研究センター(以下「センター」という)紀要(以下「紀要」という)の編集および刊行等に関して、必要な事項を定めるものとする。

(紀要の内容)

- 2 紀要には、高等教育または生涯学習についての未発表の学術論文、研究ノート、報告、翻訳、資料等(実践報告を含む)を掲載するものとする。

(投稿資格)

- 3 投稿者は、投稿日において次の各号の一に該当していること。ただし、共著の場合には、筆頭著者が投稿資格を満たしていればよい。
 - (1) 本学教員
 - (2) 本センター客員研究員
 - (3) 本センターが依頼した人
 - (4) 本センター運営委員会が認めた人

(執筆要領)

- 4 投稿原稿に関する執筆要領については、別に定める。

(刊行)

5 紀要は原則として年1回発行するものとする。

(刊行費)

6 刊行費は、センター共通費で負担するものとする。ただし、次の各号については、執筆者の個人負担とする。

(1) 論文の刷り上がりページ数が20ページを超える場合

(2) 別刷が50部を超える場合

附 則

この規定は、平成20年10月10日から施行する。

(4) 大分大学高等教育開発センター紀要執筆要領

1) 投稿枚数

投稿原稿は、単独執筆または共同研究に関わらず、原則として一編につき刷り上がりで20ページ以内とする。刷り上がりで30ページ以内であれば受理するが、その場合には刊行費用について執筆者が応分の負担をするものとする。

投稿枚数は、題目、要旨、キーワード、図表、注、参考文献等を所定の枚数の中に含めて算定することとする。

2) 投稿申込および原稿提出の期限

投稿申込の期限は毎年12月28日とし、原稿提出の期限は毎年1月末日とする。なお、当該日が休日の場合、次の勤務日を期限とする。

3) 審査および掲載の可否

投稿された原稿は、センター運営委員会で掲載の可否について判断された上で紀要に掲載されるものとする。場合に応じて、加筆、修正、削除を求めることがある。

4) 原稿の提出

原則として、原稿はワープロソフトを使用して作成し、プリントアウトしたもの（1部）とファイルを保存したメディアを提出する。

①プリントアウトは以下の書式で作成する。

- ・用紙はA4縦とする。
- ・ページレイアウトは横書きとし、上30mm、左右20mm、下20mmの余白をとる。
- ・1ページあたり、40字×40行とする。
- ・カラー印刷を希望する場合、その旨を明記する。

5) 参考文献

参考文献は原稿末尾に掲載する。雑誌の場合、著者・文献名・巻・号・出版年月・ページを、単行書の場合には、著者・書籍名・出版社・出版年・ページを記入する。

6) 校正

校正は一校を原則とし、必要最低限の訂正、修正に留めるものとする。

7) 別刷

別刷は原則として50部とする。50部を超える別刷を希望する場合には、執筆者が刊行費用について応分の負担をするものとする。

2. 平成26年度高等教育開発センター運営委員会名簿

委員長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）
委員	中川 忠宣	高等教育開発センター次長（生涯学習支援システム部門長）
委員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（FD・授業評価部門長）
委員	岡田 正彦	高等教育開発センター専任教員（大学開放推進部門長）
委員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員（メディア・IT活用部門長）
委員	麻生 和江	教育福祉科学部
委員	西村 善博	経済学部
委員	北野 敬明	医学部
委員	益子 洋治	工学部
委員	吉田 和幸	学術情報拠点運営会議
委員	秋田 昌憲	産学官連携推進機構運営会議
委員	原田 道雄	研究・社会連携部長
委員	中村 浩之	学生支援部長

新規授業・カリキュラム開発部門

部門長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）（部門長）
-----	------	---------------------------

メディア・IT活用部門

部門長	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員
センター員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員
センター員	鄭 娥敬	教育福祉科学部
センター員	藤井 弘也	教育福祉科学部
センター員	本谷 るり	経済学部（～H26.8.15）
センター員	相浦 洋志	経済学部（H26.8.16～）
センター員	原田 千鶴	医学部
センター員	三宅 秀敏	工学部
センター員	岩本 光生	学術情報拠点

FD・授業評価部門

部門長	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（部門長）
センター員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員
センター員	藤井 康子	教育福祉科学部
センター員	大井 尚司	経済学部
センター員	市原 宏一	経済学部
センター員	横井 功	医学部
センター員	津村 朋樹	工学部

大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

部門長	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門）
部門長	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門）
センター員	藤原 耕作	教育福祉科学部
センター員	仲本 大輔	経済学部
センター員	藤木 稔	医学部
センター員	橋本 淳	工学部

平成 26 年度

大分大学高等教育開発センター報告書

発 行 平成 27 年 6 月

編 集 大分大学高等教育開発センター

〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

Tel/Fax(097)554-8509

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>